

日本IT書紀

03 未剖篇

卷之四 曙光

卷之五 靉靆

卷之六 游魚

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

03 未剖篇

卷之四 曙光

029 和洋折衷

030 興廃在此一戦

031 電信

032 大日本帝国

033 火事場泥棒

034 成金

035 米騒動

036 大正デモクラシー

037 女性は太陽

029 和洋折衷

第二十九

和洋折衷

一

文化が伝わり根付くということは、そうそう生易しいことではない。モノが存在するということと、人がそのモノの意味を理解し、再生産するということは違う次元の話である。

例えば土器。

側面にこびついていた煤の放射性炭素測定で、BC一〇〇〇年プラスマイナス一〇〇年^レという結果が出た土器があった、とする。放射性炭素測定というのは、「C14」と呼ばれる炭素の同位元素が五千五百六十八年で半減する原理を応用するのである。炭化した穀物、木片、煤（すす）などに適用して、年代をさかのぼる。

実際、二〇〇三年の十二月、西日本各地の縄文時代後期から古墳時代前期および、韓国南部の無文土器時代の遺跡で発掘された土器に付着していた炭化物六十九点、炭化米二点、漆二点、建物柱七点など計八十点以上に対して、そ

のような総合評価が与えられた。

調査に当たったのは国立歴史民俗博物館である。

——測定値が正しいとして。

というのは、保存施設が不十分だと出土物が現代の空気中に含まれる炭素を吸収してしまうからである。おのずから放射性炭素測定の結果に重大な誤差が出る——可能性がある。

博物館は記者を集めて会見し、

「北部九州の弥生早期の始まりは、前一〇世紀、弥生前期の始まりは前九世紀末から前八世紀前半、中期の始まりは前四世紀前半である。四国の弥生前期は、前九世紀末から前八世紀前半以降で、北部九州より若干遅れる可能性もある」

と発表した。

同博物館は日本古代史学に一時代を築いた井上光貞東大名誉教授の遺志を受け継ぐ権威ある研究機関なので、国が検定している教科書の記述にも影響を与える可能性がないでもない。

ただ、その発表には異論が存在する。

「弥生」

という雅やかな名を持つこの時代は、土器の形状と文様を指標にして編年が形成された。ところが、当時の社会を

再現する総合的な評価に用いられるのは、土器のみではないのである。

利器において石器、木器、金属器があり、埋葬方式に支石墓、甕棺墓、土壙墓があり、装飾品に貝釧、勾玉、ビーズ、黄金などがある。食生活においては水田耕作によるコメばかりでなく、粟の栽培が知られる。

つまりコメというのは、時代を表徴するファクターの一つに過ぎない。

このようにいうと、読者の中には

「教科書で習った日本史では、水稻耕作をもって弥生の始まりとしているではないか」と反論する向きもあるに違いない。

しからば、炭化米を伴出した最も古い生活遺跡が青森県に存在し、縄文時代のコメが確認されているという事実をどのように説明するかである。もし水稻の出現を条件とすれば、青森県は紀元前七世紀に弥生時代を迎えていたことになる。

本書が主とする目的はそれを論じることではないが、同博物館は結論を急ぎ過ぎた。コメの栽培を縄文時代にさかのぼらせるか、従来の「縄文後期」を「弥生早期」に変更するかという論議が成されなければならなかった。

そのことはこれ以上、問わない。

二

筆者がここで語りたいのは次のようなことである。

第一に、短粒米（ジャポニカ種）の発祥地である中国江南地方との地理的關係を考えれば、有明海沿岸の一角に水稻耕作の技術を持つ人々が上陸し、村落を形成していたとする同博物館の発表は、まったく無理がない。というより、わざわざ記者会見を開いて「発見」を報告するまでもなかった。

第二に、水稻耕作の場合、まず種籾がなければならない。だけでなく、田を作る場所の選定、水の引き方、畦の作り方、水温の管理、病気や害虫の駆除、収穫の仕方、脱穀の方法、さらに調理の仕方など、技術と道具が伝わらなければならない。

第三に——これが最も重要なのだが——、コメを食べるという習慣ないし思想、生活様式が伝わらなければならない。

青森県にも紀元前七世紀にコメが存在したが、畦（あぜ）道によって区切られ、そこに用水が引かれた水田が津軽平野に出現するのは紀元前後である。九州島の西北端に発した弥生の文化が本州島の北端まで、約二千キロの距離を行

くの千年を要した。第五「千年の時空」の章で論じたこととやや重複するが、古代というのは何ごとにつけ、時間がゆったり流れていた。

なぜか。

要するに文化の伝播とは、人の移住だったからである。集落の拡大と家族の膨張で、分割・分家が起こり、独立した集団が新たな土地に水稲を営んだ。つまりは「世代」というものが、伝播に要する時間軸の単位だった。

初期において、金属器や装飾品などは、大陸や半島から「完成品」がもたらされたに違いない。それが緩やかで少数の人の移動によったものか、それともある程度組織的な集団の移動であったかという疑問に対して、一定の解釈を与えるのは弥生式埋葬遺跡から発見された人骨である。

その詳細な計測結果によれば、答えは後者ということになる。

黄金の冠をかぶり、青銅の剣や矛を備えた集団が上陸し、そこに住んでいた人々を駆逐し、独自の集落を作るようなこと——騎馬民族征服王朝説——は、いまだに有効であるかもしれない。そのうち銅や鉄の原材料を仕入れ、列島の中で鑄造するようになった。最初は「模造」であり、次に「模倣」が始まり、技術の習得とともに独自の技術で製造が始まる。

先進の文物が請来されたとき、必ず旧の文化との間で摩擦が生じ、戦闘が起こる。仏教が伝わってこの列島に宗教改革が起こったとき、旧勢力を代表していた葛木、巨勢、物部といった氏族が減び、蘇我、中臣、大伴といった士族が興隆した。幕末維新の混乱というのは、別の見方をすればその一つであるに過ぎない。

明治初期に起こった士族の反乱とされる神風連の乱（一八七六年十月二十四日）、秋月の乱（同二十七日）、萩の乱（同二十八日）、西南の役（一八七八年二月～九月）などは、幕末維新の動乱に幕を下ろした戦いであった。

明治政府が最初に取ったのは「模造」である。本質は丁髷と二本差しの時代と変わっていないけれど、外見だけは「西洋」にしようと思えば考え、頭を散切りにし、行灯の代わりにランプを灯し、羽織・袴を洋装に改め、「西洋」の銃や時計や茶器を用いた。見よう見まねで田中久重が蒸気機関を作り、川口市太郎が三輪自転車を作り、その行き着いたところに「鹿鳴館」があった。

次いで模倣が始まった。

模倣とは、形ばかりでなく、精神の一部もそれに近似して初めて成立する行為である。つまり模倣には思想が必要であった。中村正直や福沢諭吉はその役割を担った。実をいえばここにおいて、日本は「和洋混交」の時代から脱し、

いわゆる「和洋折衷」の時代に移行していく。西暦でいえば一九〇〇年が一つの境目であるかもしれない。

三

「明治三十一年一月卅日印刷、二月一日発行」

の年紀を持つ「東京名勝吾妻橋鉄橋之真図」と題した錦絵がある。発行者は「日本橋区馬喰町二丁目十四番地、綱島亀吉」とあって、桜の花が咲き誇る隅田川にかかった国内初の洋風鉄橋「あづまばし」を行き交う人々の姿を描いている。

向こう岸に「吉原」、「富士縦覧所」、「金龍山」の文字が見える。金龍山というのは浅草寺のこと。

橋の下には俵を山積みにした船が行き、橋の両脇にガス灯が立っている。シルクハットの御者が鞭を振るう二頭立ての馬車や洋傘を差した丸髷の婦人を乗せた人力車が走り、かと思えば頭から爪先まで、鹿鳴館風の洋装の母娘連れがいる。

その近くに立ち止まって話をしている二人の男性を見れば、菅笠をかぶり、丁髷に脚半と、そのままの姿で東海道中膝栗毛に出てきてもおかしくはない。やや向こうに目を転じれば、羽織袴に山高帽、警官のそばに立つ少女は洋風

の帽子に振袖、足元は革靴とおぼしい。

絵そのものが和洋混交、和洋折衷の中間点にある。

これがあと十年もすると、丁髷の男性はほぼ姿を消し、都市部で男性会社員が外出する際は背広、カンカン帽に革靴、商家の奉公人は和服、鳥打帽に雪駄か下駄という姿が一般的になる。

農村部や地方都市で名士は羽織に山高帽というのが、公式の場に出席する際の服装だった。ただし女性は、都市部でも農村部でも相変わらず丸髷、島田に和服という姿が一般的だった。

NHKが一九六六年四月から一年間、朝のテレビ小説と銘打って土曜と日曜を除く毎朝、十五分間放送した『おはなはん』は、そういう時代を生き抜いた女性の半生記を描いている。

檉山文枝演ずるところの「おはなはん」は、矢絣の和服に袴の姿で自転車に乗る。ちよつとはねつ返りなハイカラさんというのは、夏目漱石が『坊ちゃん』で描くところの「マドンナ」も、その一人といっている。

このころの世相を揶揄した風刺画「日本人の二重生活」が面白い。

描いたのは北沢楽天という人であった。

「日本人の二重生活」が揶揄するのは、

・ 結婚式で新郎はモーニング、新婦は文金高島田。神前で式をあげ披露宴はホテルで洋食。

・ 小学校ではローマ字を教えながら、子供たちは難しい仮名遣いを覚えなければならない。

・ 来客を畳の間に置いた椅子に据わらせ内儀が畳に三つ指を付けて迎える。

・ 女学生は矢絣の和服の上にスカートをはき、髪を丸髷風に結び上げて足元はブーツ。

・ 宴会は背広姿で座布団に座り、前に置かれた膳で食する。

等々である。

外出のときは洋服だが、帰宅すると和服に着替えるというのが、この時代の勤め人の一般的な生活スタイルだった。和洋折衷が日常の生活に浸透したのは大正に入って——西暦一九一〇年代以後——である。東京や大阪の急速な都市化が、新しい文化のかたちを生み出したといっている。

一九一四年、東京の銀座に三越百貨店の新館がオープンした。そのビルの模型を手にした赤坂の芸妓・万龍を描いたポスターが

「今日は帝劇、明日は三越」

というキャッチコピーを生み出した。

ややのちの統計だが、銀座の町を歩く女性の服装、髪形などを調べた記録が残っている。青森県生まれの建築学者、風俗研究家である今和次郎が一九二五年に行ったもので、東京美術学校を出た建築の専門家でありながら、新渡部稲造、柳田國男と交友し、各地の風俗を見て歩くのが趣味だったこの人物らしい足跡である。

もともと彼は各地の風俗を見るだけでなく、農村の家屋の造りや小川の配置から農業社会を考え、女性の装いから都市の構造を思考した。つまり社会学者、民俗学者、考現学者でもあった。

それによると、和服姿は男性が三三％であったのに対し、女性はわずかに一％に過ぎなかった。また往来する女性八百十六人のうち、髪型が洋風だったのは三百四十四人で四二・一％だった。ということは、丸髷や島田、銀杏透し、束髪など和風の髪型に洋装という女性が半数以上だったことを示している。女性のファッションもまた、和洋折衷であった。

一九二二年（大正十一）の秋、東京で平和記念東京博覧会が開催された。そのとき建築学会の手で初めてモデル住宅というものが作られた。こんにちの住宅展示場の原型をなすものであって、庶民にとって縁遠い存在だった洋風的生活スタイルが、手を伸ばせば届くところに近づいた。

建坪は二十坪以下、坪単価は二百円以内、居間・客間・食堂は椅子とテーブル、台所にはシステム・キッチンというのが耳目を集めた。

同じ年、早稲田大学教授の山本忠興は、東京・目白に七百坪の土地を買い求め、水道以外すべてを電気でまかなう実験的な住宅「電気の家」を建設した。設計は従兄弟で住宅設計家の先駆をなした山本拙郎であった。

玄関のドアも電気で開閉し、湯沸かし器、フットウォーマー、電気掃除機、パコーレーター、トースター、電気アイロン、電気ミシン、電気オーブン、電気洗濯機、扇風機、電気ストーブなど、すべてアメリカのウエスチングハウス社から輸入した家電製品が揃えられた。

電気オーブンだけで六百五十円もした。電化製品の合計額は庶民の家が一軒や二軒は建つ金額であったと伝えられる。

外見は洋館であり、中に入っても床は板張り、椅子とテーブルの生活というのが前提だったが、であるにもかかわらず、電気座布団が用意され、台所には竈（かまど）が設置され、部屋には畳が詰め敷かれたというのが、いかにも和洋折衷である。

補注

国立歴史民俗博物館 歴博・千葉県佐倉市城内町一七。大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一組織として一九八三年に設立された。同博物館のホームページによると、事業は①研究②情報提供③一般公衆に対する教育④資料の収集・制作・保管⑤大学院教育等への協力⑥国際交流が挙げられている。

このうち研究活動では「日本の歴史及び文化を実証的に解明することを目標とし、歴史・考古・民俗資料を系統的に収集・整備し、これらの資料に基づき、歴史・考古・民俗及び情報資料の各研究系が相互に連携、協力しつつ、関係分野の研究を推進すると共に、全国の大学等の研究者の参画を得て、専門を異にする複数の研究者が共通研究課題のもとにプロジェクトを組織して、共同研究を行います」とある。

弥生時代の年代に関する発表 国立歴史民俗博物館二〇〇三年十二月発表資料「弥生時代の実年代」（二〇〇三年度の炭素年代の調査）藤尾慎一郎、「弥生時代の実年代」春成秀爾、「青銅器からみた弥生時代の実年代」宮本一夫、「世界のAMS研究の現状と課題」今村峯雄。

井上光貞 いのうえ・みつさだ／1917～1983。東京都に生まれ四二年東京帝国大学国史学科を出た。坂本太郎、和辻哲郎に師事し六一年東大助教授、六七年教授。七九年退官し文化庁を経て八一年国立歴史民俗博物館館長となった。津田左右吉の文献批判を継承し実証主義的考察をもって日本古代史論を展開した。弥生の編年 「弥生」の名は一八八四年に東京・弥生町（現東京

大学構内）から有坂鋁蔵が文様が簡素でふつくらした形状の壺を発掘したことによる。その文様が山形紋であったことから、当初は「忠臣蔵」の考え方を提唱し、これを受けて三三年に森本六爾が刊行した『日本原始農業』で総合的な編年の基盤が固まった。

有坂鋁蔵 ありさか・しょうぞう／1868～1941。一八八七年九月、東京帝国大学工科大学に入り海軍技術学生（造兵学科一期生）となり一八九〇年フランスに留学した。海軍工廠で技術畑を歩み、一九三五年海軍造兵中将で退役した。考古学に関心があり、一八八四年三月、東京・本郷の向ヶ丘弥生町で発見した素焼きの壺が、のちに「弥生式土器」と呼ばれるようになった。

水稻耕作 国立歴史民俗博物館も前記発表に際して当然反論が予想されたため、「当博物館研究チームは水稻耕作の開始をもって弥生時代の始まりと考えている」とコメントしている。

生活遺跡 住居や集落など人々の生活の痕跡を残す遺跡。毎日の暮らしに使った土器や竈跡、貯蔵食料などが出土するばかりでなく、居住空間の広さから家族構成員数、住居の位置から集落における地位や機能、共同作業のありようなどを推測することができる。このほか遺跡には埋葬地、祭祀場、工房、農地などがある。

縄文時代の米 縄文時代に稲作が行われていたことを示す例として、縄文式土器につく糊痕がある。またいくつかの遺跡から炭化した米が発見されている。最も古い時代に属するのは青森県八戸市の風張遺跡から出土した七粒の炭化米である。放射性炭素による年代測定の結果、紀元前八百年前後という数値が出た。農具や栽培跡などは発見されていないが、住居跡から出土したこと、のちの時代の遺物が混入した形跡がないことなどから、国の重要文

化財に指定されている。

津軽平野の水田遺跡 バイパスの建設に際して、一九八一・二年の両年にわたって青森県津軽地方の田舎館村垂柳で総面積三九六八平方メートル、計六百五十六枚の弥生時代の水田跡が発掘された（垂柳遺跡）。水田はさらに広域に広がっていると推測され、現在が国指定史跡となっている。さらに一九八七年には弘前市砂沢で垂柳より三百年以上古い時代に属する水田跡が発見され、紀元前後ごろにこの地で広く水稲耕作が営まれていたことが確定した。また北緯四〇度以北の寒冷地に耐える品種改良が行われていたことも類推されている。

遺跡出土人骨の測定 金関丈夫『弥生時代人』（『日本の考古学』第三卷「弥生時代」収録・一九六六・河出書房新社）。

鹿鳴館 一八八三年、東京の梶町区内幸山下町に総工費十八万円で建設された「梶町」はのち「麹町」と表記。内幸山下町は元薩摩藩装束屋敷だった。レンガ造り二階建て・建坪四百十坪、イタリア・ルネッサンス風にイギリス風を融合した洋館だった。設計したのはイタリア人建築家のジョサイア・コンドル（Joaquim Conder／1852～1920）で、鹿鳴館のほか東京国立博物館（旧帝国博物館）、ニコライ堂、岩崎弥太郎邸などを手がけている。朝のテレビ小説『おはなはん』劇中、主人公の名は「浅尾はな」だった。モデルは林はな（原作者・林謙一の母）とされる。

マドンナ 小説『坊ちゃん』中では、「遠山」という苗字だけで名前前は示されていない。松山在住の軍人の家の娘「遠田ステ」がモデルとされる。

北沢楽天 きたざわ・らくてん／1876～1955。本名「保次」。埼玉県に生まれ、福沢諭吉が主宰した時事新報に風刺漫画を

掲載した。一枚の絵で「おかしみ」を表現し、社会的な意味を持たせた功績は大きい。

今和次郎 こん・わじろう／1888～1973。青森県弘前市に生まれた。早稲田大学建築学科教授、日本建築士会会長、日本ユニホームセンター会長などを務めた。関東大震災後の都市住宅や服装について幅広い調査研究を行った。

新渡戸稲造 にとべ・いなごう／1862～1933。盛岡藩奥御勘定奉行の家に生まれた。初名は「稲之助」と言った。一八七一年叔父・太田時敏（1839～1915）の養子となって東京に出たとき、名を「稲造」に改めた。一八八四年米ジョンズ・ホプキンス大学に留学し、帰国後は札幌農学校、京都帝国大学法科大学、東京帝国大学農科大学、拓殖大学、東京女子大学などの教授を歴任した。

柳田國男 やなぎだ・くにお／1875～1962。兵庫県で生まれ東京帝国大学法科大学政治科を出て農商務省に入った。東北の農村を調査研究するなかで民俗学に関心を持つようになり、『遠野物語』を著した。エスペ란antoの普及に努めたほか、一九四六年日本国憲法審議に参加した。

平和記念東京博覧会 東京府の主催で一九二二年三月十日から七月三十一日まで、上野公園で行われた。来場者は一百万人とされる。モデル住宅が建てられたのは「文化村」コーナーで、これが「文化住宅」の由来となった。

山本忠興 やまもと・ただおき／1881～1951。高知県に生まれ、東京帝国大学を卒業して東京芝浦電気に入り、のち早稲田大学に移って電気工学部の創設に尽力した。電気学会会長、照明学会会長を歴任し、学生連連会長も兼任した。これが縁で第九回

アムステルダム・オリンピックの日本選手団総監督も務めた。
山本拙郎 やまもと・せつろう／1890～1944。住宅設計
施工会社「あめりか屋」設計部の技師長を経て、創業者・橋口信
助の死後、経営を担った。

030 興廢在此一戰

第三十

興廢在此一戰

一

幕末以来の景色や文物に「西洋」の文物が混在する和洋混淆から、和洋折衷への動きが加速された事情を考えると、やはり日清、日露の二つの戦争を無視するわけにはいかない。例えばそれは、大宅壮一がのちに満州事変を野球に仮託して評論したことに準じれば、たぶんこういうことである。

小学校にはいったばかりの子どもたちが、とにもかくにも「野球」というものをやろうとチームを作った。「野球」というのは概ねこういうものだとか分っているのだが、練習をするにもルールが分からない。ボールもバットもミットもベースもなかったもので、それぞれの家から思い思いに使えそうなものを持ってきた。

隣の町から、ちよつとは「野球」というものを知っている人に来てもらって、コーチをしてもらった。子どもたちは意外に物覚えが良かったので、どうにかこうにか格好が

ついできた。

数年たつと体も大きくなつたし、腕力、脚力もついてきた。みんなでアルバイトをしてバットやミットを買い揃えた。自前の球場もできたし、審判も養成した。

実力派草野球に毛が生えた程度のレベルに過ぎなかったが、周りの先輩たちが、「チーム」として認めてくれるようになった。この場合でいえば、差し当たり「大日本チーム」が古豪「清チーム」「露チーム」と一戦を交えることになった。

日清戦争（一八九四年）は、朝鮮半島の独立をめぐる清帝国と日本の対立が引き金になった。

歴史をたどれば、坂本龍馬が「日本は朝鮮国、中国などと連合して、大清帝国やヨーロッパ列強と対抗すべきである」と論じ、高杉晋作が上海にまで赴いて太平天国を指向したことにさかのぼる。

龍馬、晋作は朝鮮国の独立運動を、

——応援すべきである。

と論じたが、それは同じアジアの未開国としてともに連携し、西欧列強に対抗し支配から脱皮するという視点だった。ところが幕末維新の生き残りたちは、大日本帝国の領土拡張論にすり替えた。その第一は征韓論、第二は一八八五年の天津条約である。

西欧列強の圧力が強まるにつれて、朝鮮半島でも日本の幕末と同じように攘夷論が沸き起こった。当面の攻撃が開港協定と不平等条約を締結した李王朝に向けられたのも、攘夷論が倒幕論と結びついた日本における経過と等しい。ただ日本では幕府対朝廷の構図があつて、天皇という超法規的存在がある意味で緩衝役を果たした。李王朝にはそれがなかった。

ばかりでなく、李王朝は軍兵を持っていなかった。宮殿に控えていたのは門を守る衛兵と儀式を彩どる儀仗兵ばかりで、その数は二千に満ちていなかった。そういうわけで国内に反乱が起こったとき、王朝の官僚は慌てふためき、これまでの習慣に従つて中国に泣きついた。

清帝国が朝鮮国を属国とみなしていたのは、「冊封」を前提とする中華思想において当然のことだったし、事実、朝鮮の李王朝も中国中華思想の中で安穩を得ていた。

これに対して日本帝国が

——朝鮮国の自主・中立性を認め、独立を認めよ。

と清帝国に迫ったのは、すでにして朝鮮国への内政干渉にはかならなかつた。東学党の乱に際して李王朝が清帝国に援軍を求め、それを阻止せんとして日本帝国が陸戦兵一個旅団を仁川に上陸させたのが日清戦争の始まりとなつたのだが、当の東学軍は

——斥倭洋倡義。

の旗を掲げていた。彼らの目に日本は「洋」と同じように祖国を侵略しようとしている敵に見えていた。

海戦は一八九四年（明治二十七年）の九月十五日、午後零時五十分から始まつた。戦史上、日本では「黄海海戦」、中国では「仁川沖海戦」と呼ぶ。これで勝敗の趨勢が決まつた。

清朝の海軍は当時、アジア最大の戦艦「定遠」「鎮遠」を中核に、計十二隻で日本海軍と対峙した。日本海軍の主力は戦艦「吉野」「松島」「橋立」など隻数では同じだが、「定遠」「鎮遠」に匹敵する砲艦がなかった。清朝海軍が誇る二隻の戦艦に搭載されていた三十七センチ砲が火を吹けば、日本海軍の「松島」「橋立」ですらたちまち撃沈することを免れ得なかつた。

それが勝った。

子どもの草野球チームが、商店街の大人のチームに勝つたようなものである。

これが自信を植え付けた。

二

日露戦争（一九〇四）もまた、海戦が勝敗を決めた。

こればかりは誰が見ても日本の負けだった。何せ相手は実業団のチームだから、遠征で疲労が癒えていないとはいえず、子どもの草野球では敵うはずがなかった。双方の海戦兵力を見ると、そのことがよく分かる。

ロシアの第二太平洋艦隊（いわゆるバルチック艦隊）は計三千八隻である。うち最大は一万三千五百トンの戦艦三隻、さらに一万トンの戦艦が五隻。砲力は十二インチ砲二十六門、十インチ砲七門、九インチ砲および八インチ砲二十五門、六インチ砲百五十九門。

対する日本艦隊は一万五千トン級戦艦三隻が中核だが、艦船数は二十八、砲力は十二インチ砲十二門、十インチ砲一門、八インチ砲三十四門、六インチ砲二百四門。

砲力においてロシア艦隊が勝り、かつ戦闘経験では圧倒的な優位にある。

——ロシア艦隊の勝利は動かない。
とするのが国際的な見かただった。

このために日本帝国陸軍は、ロシア艦隊が到着する前に何が何でも旅順港を制圧しようとし、乃木希典をして無慮な攻撃を繰り返した。日清戦争のとき、乃木が率いた軍団は一日にして旅順を攻略したが、それから十年が経っている。

その間にロシア軍は大量のコンクリートを打ち、壕を掘

り、そこに大砲と機関銃を持ち込んで、東洋一の要塞を造り上げていた。しかも山の本を伐り倒し、攻撃してくる兵に身を隠す場所を与えない工夫を施した。

帝国陸軍がそのことを知らなかったわけではなかった。しかしどれほどの装備であるかまでは計り知れなかった。このために悲劇的な戦闘が繰り返された。

突撃する日本の兵士は屍を越えてさらに突撃して斃れていった。元込めの旧式銃と機関銃では勝負にならなかった。あまつさえロシア軍は要塞の周りに二重三重の鉄条網を張り巡らし、そこに高圧電流を流してもいた。

——港が見える。

という報告がもたらされた。

軍略地図上に「二〇三」と符号が打たれた小高い山の頂から、はるか遠方に旅順港が望まれた。出入りするロシア旅順艦隊の姿も目視できる。

——ここから港を砲撃してはどうか。

要塞の頭越しに、ロシアの艦船に砲弾を落とすのである。結果として、これが陸戦の趨勢を決めた。旅順港のロシア艦隊はほぼ全滅し、黒海から遠来のバルチック主力は帝国海軍を撃滅しなければ疲れを癒す寄港地がなくなった。これを得るために帝国陸軍が失った兵士は三万を越えた。

三

バルチック艦隊にとつて旅順艦隊の全滅や遼東半島におけるクロボトキン軍の敗退は、なるほど暗雲に違いなかった。しかし艦隊を率いる中將ロジエストヴエンスキーは

——艦隊決戦では、勝つ。

と信じて疑わなかった。黒海を出てから六か月にも及ぶ無寄港遠征に兵は疲れていたが、士気は盛んだつたし、三十八隻もの艦船が従っているのである。

一九〇四年五月二十七日午後一時五十五分から始まつた艦隊決戦では、日本艦隊がとつた敵前回頭という離れ業が功を奏した。真正面から進んでくるバルチック艦隊に、腹を見せたのだ。

ロシア艦隊は艦首の砲しか使えないが、日本艦隊は側面の全砲塔から轟音を発することができ、その代わり敵の砲弾を受ける確率も高くなる。

当時の世界の戦術からすると非常識極まりないことだつた。

——一か八か。
であつた。

連合艦隊司令長官・東郷平八郎が乙旗を掲げ、全艦船に

向けて

——皇国の興廢この一戦にあり。

と訓令したのは有名な話だが、つまるところこの戦いに勝たなければ後がない、という切羽詰つた決意表明でもあつた。出撃を知らせる電文にあつた「天気晴朗なれど浪高し」のところが、東郷の本心に近かつたのであるまいか。

海戦は翌日も続き、ロシア艦隊は戦艦六、巡洋艦四、海防艦一、駆逐艦四、特務艦四を撃沈され、白旗を掲げた。

日本はますます自信を持つた。

——オレは存外に強い。

と素直に思つた。

新興国として、それはそれで当然であつたろう。日本人が「日本」というものに自信を持つたとき、表立つてではないにしても「西洋」への反動が起こつた。それが世相において、和洋折衷を促した。

筆者は、和洋折衷を揶揄しているのでなく、「西洋」というものがどういふかたちで日本の社会に浸透していったのかを眺めている。ここでの「西洋」とは、都市化であり、消費経済であり、脱亜細亜であり、煎じ詰めれば「新しきを援け古きを挫く」という考え方であつた。

これを思想・精神でとらえれば、一つは自由主義であり、

また一つは資本主義であり、なおかつ軍事力と経済力が一体となったところに政治があるという帝国主義と言い換えることができる。明治初年において、それは一部の特権階級ないし、知識階級の独占物だった。

彼らは不平等条約の改正と富国強兵を旗印に「西洋」を模造した。東京のど真ん中に出現した鹿鳴館は、まさにテーパークのような滑稽なものでもあった。

大日本帝国憲法と同期するように、「西洋」は物珍しいものではなくなった。田舎のちよつとした名家の子女は革靴をはき、西洋風の日傘をさし、人力車（これまた和洋折衷の典型だが）に乗った。商人や農夫は荷車の代りに鉄パイプの枠とゴムタイヤをはいたりヤカーを曳き、商家の奉公人は和服に烏打帽で都会の町を駆けた。

「コロッケ」という和洋折衷の食べ物が登場し、トンカツやカツ丼が発明された。ボート遊びや海水浴といったレジャーが開発され、修学旅行や社員旅行というものが始まった。カフェーやバーでは割烹着姿の女給が働き、子どもたちは駄菓子屋の店先にあるパチンコで遊んだ。

以下は雑学だが、パチンコという遊具は一九二〇年にアメリカで考案された「ガルバルデイ」という名のゲーム機だった。サーカスや興業団が町々に運び、見物人から小銭を稼いだのである。日本でいえば、温泉地にある射的場の

ようなものであろう。

これが日本に上陸して「コリントゲーム」という名前で輸入されるやたちまち普及し、「玉遊菓子自動販売機」として百貨店の屋上などに設置された。現今の大人を相手にしたパチンコ店の第一号は一九三〇年に愛知県に出来たのが最初とされている。

パーマ、劇場、レビュー、ダンスホール、活動写真、週刊誌、地下鉄、電気ブラン、竹久夢二、安田講堂、帝国ホテル、宝塚少女歌劇、チンドン屋、あんばん、大正琴……という中の一に、計算機も入っていた。矢頭亮一、逸見治郎、川口市太郎、大本寅治郎もまた、そういう時代を生きていた。

補注

太平天国 中国の清朝末期、宗教結社「上帝会」の指導者である洪秀全（一八一四～一八四一、本名「仁坤」）が貧困階層の支持を得て一八五一年に建国した。南京を都として版図は華中・華南にわたり、共産的軍事組織を基盤として一八六四年まで存続した。

国号は「太平天国」が一般的だが、「真命太平天国」「天父天兄天王太平天国」とも称した。孔子の教えとキリスト経を混交した新興宗教教団であって、「天国」はキリスト教に由来している。

征韓論 一八七三年（明治六）、西郷隆盛、後藤新平らが唱えた。国内に充滿していた土族の不满をもって朝鮮国への開国圧力に転じようとしたが、国内の改革を優先すべきとする大久保利通らが強く反対した。この論争に敗れた西郷らは政府を去り、不平土族の決起に結びついた。最大の騒乱は一八七七年二月十五日に始まった西南の役（同年九月二十四日）だが、西郷隆盛が明確な外交方針を持って決起したわけではなかった。

天津条約 十九世紀の天津は清帝国の外交窓口であったため、前後十七件の国際条約が同地で締結されている。史上最も著名なのは一八五八年に英仏露米四か国との間に結ばれた条約であって、これによって清帝国は①キリスト教の布教の自由②列強四か国の使節団の北京駐在③四か国人の国内往來の自由④開港・公益場所の拡大——などを約束した。

日本と清帝国が最初に結んだ天津条約は一八七一年の「日清修好通商関係条約」次いで一八八五年に伊藤博文と李鴻章の会談で交わされた朝鮮国への干渉協定がある。

東学 一八六〇年に崔濟愚（チェ・ジェウ／1824～1864）が創始した新興宗教で、儒教、仏教、道教を基礎に「万民平等の太平天国を具現する」とした。キリスト教（西学）に対して「東学」と称した。教義は迷信的だったが、民衆に広く支持を得て反体制運動に発展した。危機感を覚えた李王朝は一八六三年に崔濟愚を「惑世誣民」の罪で処刑し沈静を図った。しかしそれが逆効果となって二代教主・崔時亨（チェ・シヒョン／1827～1898）のとき、ついに反乱（一八九四年、東学党の乱）となった。

斥倭洋倡義 倭（日本）と洋（欧米列強）を斥け義を倡（とな）えよ。ここでのいう「義」は朝鮮国としての独自性ないし自尊意識を意味する。

ロジェストヴエンスキー Zinovii Petrovich Rozdestvenskii／1848～1909。ニコライ2世の侍従武官のち海軍参謀長、軍令部部長をへて太平洋第二艦隊司令長官となった。日本海海戦で重傷を負い捕虜となった。

Z旗 国際信号旗ではアルファベットの「Z」を表わし、一字信号では「引き船を求める」または漁船が用いる場合は「投網中」を意味するに過ぎない。アルファベットの最後の文字であることから、ロシア・バルチック艦隊との決戦し際して東郷は「背水の陣」の意味を付与した。以後、大日本帝国海軍ではZ旗がその意味でのみ掲げられるようになった。

031 電信

第三十一

電信

一

殖産興業の原点ともなった小栗忠順は、慶応四年閏四月六日、故なく上野・烏川水沼河原で斬首されてしまった。朝廷に恭順を示す徳川慶喜に抗戦を建議したことが薩長强硬派の恨みを買った。生きてあれば、明治維新の様相はいまひとつ違ったものになっていたかもしれない。

一方、最後まで叛旗を降ろさなかった榎本武揚はどうだったか。

大政奉還から五稜郭陥落まで、薩長の急進派、强硬派にとつてこの人物ほど「小癩な奴」はいない。

阿波沖で薩摩艦隊を砲撃し、幕府艦隊を率いて仙台、函館に逃れ、五稜郭に立て籠もって「蝦夷政府」の樹立を宣言した。ばかりでなく、維新政府軍一万を引きつけて七か月を戦い、彼我合わせて千三百人超の戦死者を出した。

小栗と同様、斬首・梟首に処されてもおかしくなかった。しかし黒田清隆、福沢諭吉らの嘆願で助命され、一八七

二年一月、特赦により辰の口牢獄から出獄した。同年三月放免隣、黒田清隆の尽力で開拓使四等官として出仕し、炭田の開発を試みた。次いで一八七四年から海軍中将と駐露公使を兼ね、サンクトペテルブルグにおいて千島・樺太交換条約を締結した。

一八七九年九月外務省二等官、同年十一月外務大輔、八〇年二月海軍卿、八二年五月皇居造営事務副総裁、同年八月駐清特命全権公使を経て、八五年の第一次伊藤博文内閣、八八年の黒田清隆内閣で通信大臣、八九年文部大臣、九一年五月の天津事件で外務大臣、九四年第二次伊藤内閣で農商務大臣を歴任した。

いや、榎本武揚のことを書くのは、貧乏旗本の出世物語のためではない。維新政府にとって大罪人であっても、その能力を評価して活かした明治元勲の度量を語るためでもない。数え三十九歳で中將となり、七十六歳のロシア帝国外務大臣アレクサンドル・ゴルチャコフと対等に領土問題を議論した豪胆さこともない。

話というのは榎本武揚がオランダ留学中に電信術を学び、フランス製のディエ電信機を二台持ち帰ったことである。郵政博物館によると、

一八六〇年ごろに製作された印字式モールス電信機で、イ

シクのついた円盤にテープを軽く押し付けるとテープ上に符号が印字される仕組みで、ゼンマイ駆動の時計仕掛けが使われています。

とある。

武揚がオランダに留学したのは文久二年九月から慶応三年三月までの四年半である。一八三六年の生まれだから、数えて二十八歳から三十二歳までということになる。この間、武揚はハーグで下宿生活を送り、第二次シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争を観戦し、デンマーク、フランス、イギリスを巡行した。

本邦における電信は、一八五四年二月、再航した米合衆国海軍東インド艦隊のマシュー・ペリーが幕府に寄贈し、横浜で実演したのが最初とされている。サミュエル・モールズが「神のなせる術」というメッセージを送信することになった十年後のことだった。

また、文明開化の嚆矢として東京―横浜間で電信が始まったのは一八七〇年だから、武揚はそれよりはるか以前に電信の効用を理解した。もとより武揚は、軍事への適用を視野に入れていた。

以下に記すのは電信ケーブルの開通状況である。それは殖産興業と富国強兵の一環で行われたことであって、必ず

しも榎本武揚の業績ではない――のだが、駐露公使、海軍卿、通信大臣という経歴からすれば、一八七四年以後については浅からぬかわりがあったことは疑いを得ない。

一八七一年 長崎―上海

一八七二年 長崎―ウラジオストク

一八七三年 東京―横浜―長崎

一八七四年 東京―青森

一八七五年 津軽海峡

一八七九年 万国電信連合会議に加盟

一八八三年 呼子―釜山

一八八八年 電気学会が発足

一八八九年 明治丸が海底ケーブルを敷設

一八九一年 通信省電務局電気試験所が発足

一八九五年 海中ケーブル敷設船を英ロブニッツ社に発

注

一八九六年 海中ケーブル敷設船を「沖縄丸」と命名

一八九七年、鹿児島―基隆（台湾）

榎本が二台の電信機をロッテルダムから持ち帰って三十年、電信ネットワークはまず上海から長崎・シベリア経由で西欧諸国とつながり、次いで全国に張り巡らされ、さら

に本邦の權益拡大に連動して朝鮮、台湾をカバーした。

並行して電信技手の養成も行われた。東京・汐留と大阪・高麗橋に電機修技学校が設置され、一八七二年から一八八九年までに計一千四百八十五人が陸・海軍、鉄道および通信省などに配属されている。

榎本が電信を「我がこと」ととらえていたのは、一八八八年五月に電気学会を発足させ、自ら会長に就いたこと、および一八九一年に通信省電務局に電気試験所を設置したことに示されている。名譽職的な色合いが強かったにしても、電信が時代を変えると信じていたのに違いない。

二

電信について、紙幅を割く。

英語「*Electrical telegraph*」を「電信」と翻訳したのは福沢諭吉とされる。

現今のわれわれは

——電気通信の「電」と「信」を合わせたのだから。

と想像するぐらいだが、慶応二年に刊行した「西洋事情」初編の口絵に

蒸氣済人電気伝信

蒸氣人を済け電気信の伝う

とある。

そこである「信」は「真」に通じ、真であればこそ「頼り」となる。

一八七四年の小学読本にも

伝信機は鉄線に機を設けて一瞬に信を万里に伝ふる器なり

とあって、当時でいえば「便り」、こんにちにあつては「情報」のことと言つていい。

初期の電信は、いわゆる「トンツー」「ツートン」の信号だった。「トンツー」「ツートン」の信号を解読して文字に変換した。つまり最初の電信は「電報」と呼ばれた。

一八七二年の当時、長崎からロンドンの電信料金は、欧文二十語の基本料金が二十六・五円だったという。「殖産興業」で触れたように、官営工場で働いていた熟練工の月給が十円から十五円だった時代である。

本邦初の電信ケーブルは、一八五四年、アメリカ東インド艦隊の技術者が東京・お台場に敷設した実演用の一・六キロ、実用に供されたケーブルは一八六九年の横浜弁天灯明台役所―横浜裁判所間約八百メートルである。同年、東

京―横浜間にも敷設されたが、国内より先に上海―長崎、長崎―ウラジオストックの海底ケーブルが敷設されたのは事情がある。

それというのは、当時、清帝国には攘夷ないし外資排斥の機運があつて、海底ケーブルの揚陸を許可しなかった。そこでデンマークのザ・グレート・ノーザン・テレグラフ社（大北電信・GNTC）が本邦を中継し、ウラジオストック経由で信号を送受信する通信路を設定した。

上海―ウラジオストックの電信路が日本を経由したのは、つまるところ日本列島が地勢的に都合のいい位置にあったに過ぎない。しかし結果としてそれは国内産業の輸出入に重要な役割を果たした。外交においても同様だった。

ただし軍事となると事情が変わってくる。

GNTC社を現在に置き換えれば、私設インターネット事業者ということになるだろう。私企業であるかぎり通信網の維持管理に不安が出る。それと同じように、海外の民間企業に電信ケーブルの敷設と運用を任せておくことは、どう考えてもリスクではないか。実際、GNTC社はロシア帝国と連携して、グローバルな電信ケーブルのネットワークを構築する計画を持っていた。

一八九五年のこと、通信省はイギリスのロブニッツ社にケーブル敷設船を発注した。明治政府が自身の責任でケー

ブルを敷設・運営するのである。その背景には、第一は旧幕府がGNTC社に与えた三十年のライセンス契約が切れること、第二は日清戦争で獲得した租借権と台湾島の割譲があつた。西欧列強の一角に割って入るには、情報を密に共有しなければならぬ。

ロブニッツ社に発注したケーブル敷設船は一八九六年二月に進水し、「沖縄丸」と名付けられた。全長八十八・六メートル、型幅（内径）十二メートル、総トン数二千二百七十八・四二トン、航海速力十二・四五ノット（時速約二十三キロ）。その名は沖縄県に由来するという説と、「沖に縄を張る」の意味とする説がある。

沖縄丸は同年六月二十七日に長崎港へ到着し、通信省の船ながら陸軍省の臨時台湾電信建設部の配備となった。最初の仕事は鹿児島県肝属郡大浜から奄美諸島、琉球諸島を経由して台湾の台北市淡水までケーブルを敷設することだった。全長千四百五海里（千九百三十五キロ）である。工事は八六年八月に始まり、翌年五月に終了した。

このあと通信省は民間の輸送船「伊吹丸」「奉天丸」「第三辰丸」を改装してケーブル敷設力を強化した。一八九一年のシベリア鉄道着工を、明治政府はロシア帝国のアジア地域における南進政策と受け止めた、さらに日清戦争後の三国干渉で、ロシアは旅順口の租借権を獲得した。ウラジ

オストックに続く不凍港をロシアは手に入れたことになる。旅順口はロシア海軍太平洋艦隊の根拠地となり、町全体が要塞化されていた。山の傾斜地を削って岩とコンクリートで固め、堀の外に高圧電流が流れる鉄条網、地下に迷路のような長い連絡通路を張り巡らした。なかでも東鶏冠山北堡壘は総面積が九千九百平米もある大規模な要塞だった。

明治政府は朝鮮半島における利権が脅かされると考え、ロシアは満洲および関東州の租借権・鉄道敷設権などを確保するねらいがあった。大韓帝国がロシアに咸鏡北道の鉾山採掘権や森林伐採権を与えたことが、明治政府の危機感を増長させた。

——戦争になるかもしれない。

明治政府の軍部がそのような想定をしたことは疑いを得ない。電信ケーブルの敷設力が強化され、秘匿化されたのはそのような事情によっている。

三

一九〇四年二月に日露間で戦端が開かれた。

日本陸軍先遣部隊である第十二師団の木越旅団が仁川に上陸したのは二月八日だった。日本政府がロシア政府に宣

戦を布告したのは二月十日だった。ロシア政府がハーグ陸戦条約にある

「武力行使の前に第三国による調停を依頼する努力」を日本が怠った、と非難したのは当然だった。以後、戦況は日本優位のうちに展開した。

一九〇四年

・八月十日・黄海海戦（ロシア太平洋艦隊敗北）

一九〇五年

一月二日・旅順開城（ロシア軍旅順要塞司令官ステッセ

ル中将降伏）

三月一日・奉天会戦（ロシア陸軍司令官クロパトキン大

將撤退）

五月二十七日・日本海海戦（ロシア海軍バルチック艦隊

壊滅）

という経過をたどる。

開戦前の交渉で明治政府はロシアに「満韓交換」を、ロシアが北緯三十九度線分割案をそれぞれ提示した。交換や分割の対象となった清帝国、大韓帝国が蚊帳の外に置かれているのは、軍事的優位性が帝国の版図拡大を担保するという植民地主義であって、民族優生論・選民思想と同期・

一体の關係にあつた。ポーツマス条約は日本が外形的な名乗りではなく、心身ともに「大日本帝国」に變つてゆく発射台となつた。

話を戻すと、一九〇三年の末、沖繩丸に朝鮮半島の木浦（八口浦）―佐世保、馬山浦（鎮海湾）―對馬への電信ケーブル敷設の命令が下された。主導したのは兒玉源太郎である。

彼は臨時台灣電信建設部で部長を務め、台灣総督・内務大臣を経て日露戦争で陸軍満州軍総參謀長となつていた。兒玉もまた電信の軍事的効用を理解していた。明治政府は八口浦や鎮海湾を日本海軍の艦隊根拠地にすることを予定していたためである。

この作業の通じて、沖繩丸は佐世保の海軍工廠でマストの位置を変え、船体の色を白から黒に塗り替えるなどの偽装改造を施された。さらにのち再び白色に塗り替えられ、船名を「富士丸」と改めたのも偽装だった。ケーブル敷設だけでなく、ロシア側のケーブルを遮断・回収する仕事もした。

新しい技術として、一九〇〇年代初期には無線通信が実用化されている。先駆となつたのは、一八九六年に五百メートルの空間で情報の送受信に成功したグリエルモ・マル

コーニである。その成功に米英の海軍が飛びついた。すべの艦船に通信機を搭載すれば、海上でも情報を交信することができる。

マルコーニの成功を知つて、英国公使だった加藤高明が軍艦に装備することを構想した。たまたま六六艦隊計画に基づいて発注された戦艦四隻がロンドンのテムズ鉄工造船所で建造中だった。その四隻に搭載する交渉をマルコーニ社が行っていたが、埒があかなかつた。

そこで加藤は一八九九年に交渉を打ち切つて、海軍に無線電信を研究するよう指示を出した。

海軍は一九〇二年、三十四キロの空間での信号送受信に成功した。これとは別に通信省の電気試験所も研究に着手していて、一八九七年のこと、東京・芝の金杉橋と東京湾上の船舶、直線距離で約三キロの無線通信に成功した。ちなみに海軍が開発した無線通信機は一九〇三年から安中製作所が量産し、海軍はこれを「三六式無線電信機」として採用した。

海軍はまた、一九八四年の「海岸望楼条例」に基づいて、列島の沿岸に二百以上の望楼を設置した。通過する艦船との通信、気象の観測、海難報告などが主な目的だったが、ロシア帝国を仮想敵とするようになった一八九六年以後、玄界灘や五島列島、済州島などの望楼には無線機を配置し

た。海底ケーブルを引き込んで有線・無線の機能を備えた望楼もあった。

日本海海戦のとき第一艦隊参謀として活躍した海軍大尉・秋山真之は、英国駐在中に清帝国、大韓帝国に無線局の用地租借を要望したが実現しなかった。そこで海軍は無線装置を実装した艦船を港湾に接岸させ、望楼の通信機能と連携させたのである。

四

さて、日本海海戦である。

バルチック艦隊（バルト海艦隊）は司令長官ロジェストヴェンスキー中将麾下、戦艦八、海防戦艦三、装甲巡洋艦三、巡洋艦六、その他三十八。ラトビアのリエパー港からマガダスカル島のノ・シベ港、インドシナのカムラン湾を経ての長駆である。

図体は大きいが第二艦隊と第二艦隊の混成で、指揮命令系統が一本化できていなかった。戦隊の航行速度にも大きな差があった。加えて石炭や弾薬の過積載でスエズ運河を通過できないのすったもんだがあった。挙句、インド洋に入った直後に旅順陥落の知らせが入った。

旅順口の第一太平洋艦隊は前年八月の黄海海戦で機能不

全に陥っており、陸と海から日本軍を挟撃する構想はすでに崩れていた。真つ直ぐウラジオストックに入り、そこを拠点に日本を攻撃する作戦しか残されていなかった。

このときロジェストヴェンスキー中将が案じていたのは、無線電波が自分たちの位置を知らせることになることだった。実際、日本軍は総力を挙げてロシア艦隊の居場所を探索していた。東シナ海を抜け、黄海に入ると日本軍の通信が活発になった。それを傍受した五月十六日、中将は全艦船に通信封止を命令した。

五月二十七日午前四時四十七分、

敵艦隊ノ煤煙ラシキモノ見ユ

の報が入った。

それは日本郵船の仮装巡洋艦「信濃丸」が発信し、その十キロ近傍にいた巡洋艦「和泉」が受信、対馬島神山の望楼が取り次いだ。

これを受けて連合艦隊は

敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ

聯合艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス

本日天氣晴朗ナレドモ浪高シ

と打電した。

「午前六時ごろ」とされるのは戦艦「三笠」から大本営に無線で直接でなく、手交を重ね、海中・陸上の専用ケーブルで東京に送られたためであるらしい。連合艦隊もまた自分たちの位置を知られなくなかったのだが、ロシア艦隊とは情報の扱いに違いがあった。軍事関係者にあつては、その違いが勝敗を分けた一因と分析する向きもある。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

榎本が持ち帰った電信機 榎本はアムステルダムから持ち帰った電信機を箱館まで持って行き、函館港の関税倉庫に預けていた。政府軍との戦いで忘れ去られ、そのまま所在が分からなくなっていた。

一八八一年、明工舎の沖牙太郎が東京・愛宕山の古道具屋の店頭に並んでいるのを見つけて購入した。一八九一年の第三回電気学会講演会で通信省の技官・吉田正秀が紹介し、会長だった榎本が確認、再会することとなった。この電信機は現在、郵政博物館に収蔵されている。

電信修技学校 入学試験(筆蹟・論書・英語またはフランス語)を経て電信技術のほか数学、電機学が習得科目だった。電信技手になると、その妻に「電信助手」の月給五〇十円が支給されるほど高待遇だった。一八八七年「東京郵便電信学校」、一九〇五年「通信官吏練習所」となった。

沖縄県 一八七二年、琉球藩が設置され、琉球国王の尚泰を「琉球藩王」に封じて東京に藩邸を置いた。一八七九年三月、明治政府は琉球藩を廃して沖縄県を設置、尚泰は東京の藩邸に居を移し華族となった。

臨時台湾電信建設部 一八九五年六月二十四日公布の官制で陸軍大臣の監督下に設置された。電信ケーブルの敷設と並行して、臨時台湾燈標建設部による灯台の整備が行われ、これによって鹿児島―台北の航路が確保された。部長は児玉源太郎少将だった。技師として大井才太郎、浅野応輔、青木大三郎、梶浦重蔵、岡本桂

次郎、河合幾次、西方七郎の名が残っている。

児玉源太郎 こだま・げんたろう／1852～1906。

台湾総督、第一次桂太郎内閣で内務大臣、文部大臣などを経て日露戦争で満洲軍総参謀長と務めた。最終階級は陸軍大将。

グリエルモ・マルコーニ Guglielmo Marconi／1874～1937。イタリアのローニャで生まれ、早くから数学と物理学を学んだ。一九〇九年、無線通信の発展に貢献したとして、ブラウン管を発明したフェルディナント・ブラウン (Karl Ferdinand Braun／1850) とともにノーベル物理学賞を受賞した。

マルコーニ社 一八九七年に設立され二〇〇六年ゼネラル・エレクトリック(GE)社に吸収された。邦訳では「マルコーニ無線電信会社」とも。

旅順口 現在の大連市旅順口区。清帝国の北洋艦隊が本拠港としたことから町が発展し、日清戦争では日本の陸軍が占拠した。下関講和条約で大連を含む遼東半島は日本に割譲されることに決まったが、仏・独・露の三国干渉で旅順はロシア帝国の租借地となり、ロシア太平洋艦隊の基地となった。

大韓帝国 一八九七年から一九一〇年まで李氏朝鮮が用いた。日清戦争の下関条約で、李氏朝鮮国と清帝国との宗属関係が消滅したことに伴い、第二十六代高宗が皇帝に即位し、国号を改めた。

六六艦隊計画 一八九六年から一九〇五年に策定された海軍軍備拡張計画。二期で構成され、このとき戦艦「敷島」「朝日」「初瀬」「三笠」がテムズ鉄工造船所で建造されていた。

電気試験所の無線通信機 一八九六年、マルコーニの公開実験の記事を読んだ石橋純彦(いしばし・あやひこ／1853～1932)が通信省電気試験所長の浅野応輔(あさの・おうすけ／18

59(1940)に無線の話をし、浅野が電信主任の松代松之助(まつしろ・まつ)のすけ/1866(1948)に研究を命じた。松代は少ない文献をもとに送信機などを作成した。

松代は明治三十年十二月、東京の築地海岸に送信機を設置し、東京湾沖一・八キロに浮かべた小船の受信機との通信に成功した。次いで明治三十一年十二月、月島と第五台場間三・三キロの双方向の通信実験に成功した。

秋山眞之 あきやま・まさゆき/1868(1918)。日本海海戦における出撃の報告電報「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」の作者。兄・好古(よしふる・1859(1930))とともに小説『坂の上の雲』の主人公でもある。

バルチック艦隊の損害 沈没二十一、拿捕六、抑留六、戦死者五千八、捕虜六千六百六人だった。捕虜の中には総司令官ロジェストヴェンスキー中將も含まれていた。

信濃丸 日本郵船のシアトル航路用貨客船として一九〇〇年四月イギリスグラスゴウのデビット・ウィリアム・ヘンダーソン社で竣工した。日露戦争のときは海軍に徴用され、軽装備を施され海上を航行する船舶を護衛する任務に就いていた。

巡洋艦「和泉」 元はチリ海軍所属の巡洋艦「エスメラルダ」。これをCTR社のチャールズ・フリントが買い受けて日本に転売した。

出撃電 電文は符号化されていて、当事者にしか理解できなかった。電文二文字目が有意の文字で、それを符号表に照合して解読したとされている。電文は「アテヨ」(敵)「イカヌ」(艦隊)「ミユトノケイホウニセツシ」「ノレツ」(連合艦隊)「ヨハイ」(は)「タダチニ」「ヨシ」(出動)「ス」「コレヲ」「ワケフ」(撃沈)「ウ

メル」(滅)「セントス」の本文のあと、平文で「ホンジツテンキセロウナレドモナミタカシ」と続いていた。

連合艦隊 その構成は東郷希典乗座の旗艦「三笠」を含め戦艦四、装甲巡洋艦八、巡洋艦十五、砲艦・水雷艇・通報艦など百八隻で成っていた。日本海海戦における連合艦隊の沈没は水雷艇三のみで、死者は百十七人、負傷者は五百八十三人と記録されている。

032 大日本帝国

第三十二

大日本帝国

一

ここまでのおさらい。

『西洋』とのかかわりを軸に「明治」を区切ると、次のようになる。

- ・半舷上陸から鹿鳴館開館まで＝学習期
- ・鹿鳴館時代＝模倣期
- ・日清・日露戦争＝和洋折衷期

日清・日露戦争をきっかけに、日本は西洋の模倣から、和洋折衷の段階に入った。一九〇一年に矢頭亮一が「ヤズ・パテント・アリスモメートル」を、一九〇四年に川口市太郎が「川口式集計分類装置」を製作したのは、まさにその時期に当たっている。しからば日露戦争の次に置かれる節目とは何であるかといえ、やはり第一次大戦であろう。

では日露戦争から第一次大戦までの十年間はどうのように定義されるだろうか。

おそらくそれは

——『西洋』との擬似同化期。

とでもいうべき時期に当たっている。

東北アジアの片隅に位置する島国が自尊心を込めて、天皇＝皇帝を奉載しているがゆえに「帝国」を名乗っているうちはよかったが、戦争に勝つたびに版図を広げ、ついに本當の帝国をかたち作り始めた。

その帝国は『西洋』を範として学習するところから始まったために、『西洋』の模倣にならざるを得なかった。国の概観はイギリス風の立憲君主国家、軍制と経済はプロシア風の富国強兵という具合である。

これも「まことに不思議な話」の一つなのだが、この時期、『西洋』で著わされた洋書——経済論であれ小説であれ——の多くは、アメリカ合衆国で翻訳されて舶載されていた。ゆえに明治初期の日本が学んだ『西洋』とは、多分にアメリカナイズされているか、アメリカ人の解釈が入っていた。

徳川幕府二百五十年の鎖国に風穴を開けたのは星条旗を翻した黒船であった。鳥羽伏見に始まる戊辰戦争も、アメリカから舶載された大量の銃に依っていた。にもかかわら

ず、なぜか維新の志士たちは合衆国に憧憬しなかった。立憲君主国でありつつ大統領制に似た政治機構を模索することとはついになかった。

繰り言に近いが、筆者はそこで、一八六七年十一月十五日に、風神のごとく世を去った人物のことを思う。生きてあれば一九〇四年現在で七十歳になっていたはずの彼は、維新回天が実現した暁のことを尋ねられて

—— そうさな、海に乗り出して商売でもするか。

と語り、政治への迷惑を否定したが、そのような自由を時勢が許すとは考えていなかったであろう。

船中八策および新政府綱領八策のどこまでが彼の独創になるかという議論は措くとして、このとき彼が想定したのは土佐藩主・山内容堂を首班とする上下議會制であつて、そう遠くない将来にアメリカ合衆国大統領制に近い体制を指向したものだつた。ところがその意味を、明治の元勲たちは理解できなかった。

なるほど天皇を西洋の皇帝に位置づければ、立憲君主制の議會で国家を運営するのが順当に思われる。しかし雄藩が並立する産業革命の後進国であれば、道州連邦制への移行が模索されて然るべきであつたかもしれない。もしそうであれば、「西洋」に擬似的に同化した高圧的な、ないし植民地と同一視する朝鮮支配は回避できていたかもしれない。

い。

だが歴史に「もし」は存在しない。

二

日露戦争が勃発した一九〇四年の八月二十二日こそ、大日本帝国が擬似的西洋に転換したときだった。ロシア軍が要塞を築いていた旅順口をめぐる攻防に際して、大日本帝国政府は大韓帝国政府の局外中立声明を無視した。

朝鮮半島内に軍を進め、だけでなく駐留して圧力をかけ、併せて日韓議定書の締結を強要した。銃刀をちらつかせながら他人の家に土足で上がりこみ、その部屋を無償で貸与する契約を結ばせたに等しい。

これには前史がある。

一八七五年に朝鮮領海を侵犯した日本の軍艦「雲揚」である。長州藩がイギリスから購入した砲艦であつて、一八七一年、明治政府に帰属することになった。

この船が漢江河口の江華島砲台から射撃を受けたとき、それを口実に「日朝修好条約」の締結を迫った。日本の艦船および朝鮮半島における日本の資産、日本人の生命財産は朝鮮国の法規適用外に置くとともに、日朝間の取引きには関税を課さないというものだった。すでにして擬似的な

西洋同化が始まっていた。

日清戦争に勝利した第日本帝国は朝鮮半島から中国清王朝勢力を一掃して親日政権を擁立し、これに対して朝鮮独立派がロシアの力を背景に排日を図ろうとしたのが日露戦争の遠因である。つまり日露戦争に大日本帝国が勝利したとき、朝鮮の植民地化は規定の事実となった。

一九〇五年の八月、アメリカ合衆国ニューハンプシャー州ポーツマス島の米海軍工廠で日露講和条約が結ばれたとき、大日本帝国は南樺太の領有と満州東支鉄道、大韓帝国保護権を獲得した。この鉄道がやがて「南満州鉄道」（いわゆる「満鉄」）となり、日中戦争、第二次大戦における政治的・軍事的な戦略を担う。

余談がある。

ポーツマス条約が締結されたとき、日本の国内で講和反対の声が上がった。東京の日比谷で講和反対国民大会が開かれ、集まった民衆が暴徒化して新聞社や交番を襲った。

史上「日比谷焼打ち事件」と名付けられる。

九月六日から十一月二十九日まで二か月半にわたって東京市内に戒厳令が敷かれたというから、なまじの反対運動ではなかった。

この暴動には明確な指導者がいなかった。

政府は戦争の詳細な実情を秘匿し、勝利の部分だけを強

調する報道しかさせなかった。

民衆が

「勝った、勝った」

と浮かれ騒ぎ、提灯をかざして祝勝会を開いていたとき、実は旅順要塞に取り付いた乃木希典は死屍累々の苦戦を強いられていた。ともあれそのようなわけで、民衆は大勝利を信じていた。

八万人に及ぶ戦死者、四十四万人の戦傷病者を出し、戦費を贖うために米を節約し、外国から七億円もの借金をして勝ち取った勝利であれば、ロシアから賠償金を取って当然ではないか——という、素朴な怒りが爆発した。

もうひとつの余談は、ポーツマス条約締結後、アメリカ合衆国の鉄道王ハリマンが来日して桂首相に南満州鉄道の共同経営を提案した。南満州鉄道をシベリア鉄道につなげ、バルト海と結ぶ。そこからオリエント・エクスプレスを乗り継げばヨーロッパへの道が開ける。

——さらにアメリカ東海岸を結ぶ世界一周鉄道を作ろうではないか。

というのである。

この案に伊藤博文や井上馨は乗り気だった。ロシアは北満州に大軍を擁している。これをアメリカ合衆国の力で牽制する。桂はハリマンと共同経営の覚書を交わしたが、帰

国した小村寿太郎は血相を変えて反対した。

「一滴の血も流さなかったアメリカに、なぜ満鉄の權益を渡すか」

小村はすぐさま北京に飛び、日清条約に満州に第三国が資本投下することを阻止する条項を盛り込んだ。桂—ハリマン覚書は反故となり、これがきっかけとなつてカリフォルニアで日本人の排斥運動が活発になった。またアメリカ連邦政府が日本を仮想敵とする戦略構想「オレンジ計画」を策定する引き金になった。

話を日韓關係に戻すと、とまれポーツマス条約で大韓帝国の外交権が大日本帝国に移管することが決まったが、それは帝国主義を是とする欧米列強諸国の了解を取り付けただけの話であつて、大韓帝国が承知したわけではなかった。一九〇五年秋、枢密院議長伊藤博文は大韓帝国を訪問して韓国皇帝・高宗に

「我が政府、今や確定案として此の協約案を提出せるものなれば、寸毫も変改の余地なし」

と告げた。

さらに韓国駐留の日本陸軍司令官を伴つて韓国政府閣議に出席し、大臣一人ひとりに条約締結の賛否を質した。二人の大臣が

「絶対に否なり」

と答え、外部大臣は黙し、他の四大臣はしぶしぶ同意を示した。

果たしてこれが正当な二国間条約と認められるかどうか。この協約によつて大日本帝国政府は大韓帝国の外交権を篡奪し、あまつさえ内政にまで口をはさむ韓国総監府を漢城に置くことになった。

次いで一九〇七年六月、オランダのハーグで開催された国際平和會議に韓国皇帝高宗が特使を派遣して日韓協約の無効を訴えると、伊藤は皇帝の退位と軍隊の解体を断行した。このような横暴は現今とうてい許されることではあるまい。

三

このように書くと、大日本帝国は国際ルールを無視した非道外交をやつてのけたかに見える。

ところが實際はそうではなく、大日本帝国政府は国際ルールに則つて大韓帝国を支配下に置いたのである。といつてもそこであるという国際ルールとは、欧米列強諸国が互いに闘ぎあいながら、相互にその利権を承認し合う帝国主義的互恵主義に基づいていて、支配を受ける側の理論は端から無視されていた。二十世紀に入つて列強が交わした条約の

多くは、それに類するものである。

・一九〇一年 ハイ・ボンスフォート条約…イギリスがアメリカ合衆国に対し、中米で運河を建設・運営することを認める。(一九〇三年、アメリカ・パナマ共和国が運河工事について調印)。

・一九〇四年 モロッコに関するフランス・スペイン協定。
・一九〇五年 カールスタッド協定…スウェーデンからノルウェーを分離。

・一九〇六年 チベットに関する英清条約。

・一九〇七年 英露協商 ベルシア、アフガニスタン、チベットの勢力範囲を決定。

このうち相互対等のもとで国境や支配権を取り決めたのはカールスタッド協定だけではない。

カールスタッド協定というのは一八一三年にデンマークとスウェーデンの間で取り交わされたキール条約を破棄するもので、これによりノルウェーはスウェーデンとの連合を解消して独立国家となった。それ以外はみな、条約・協定を結んだ当該国以外の地域や国にかかわることである。

欧米列強が勝手に乗り込んできて、それぞれの言い分を主張し、話し合いをするのだが、パナマ共和国、モロッコ、

チベット、ベルシア、アフガニスタンさらにはアフリカやカリブ海の諸地域は、列強の話し合いに参加することが許されていなかった。

自分が所有する庭に井戸を掘るかどうかを他人に決められたのでは、憤懣やるかたないであろう。

大韓帝国の扱いについても同様だった。

一九〇五年の七月二十七日、アメリカ合衆国は陸軍長官ウィリアム・タフトを「フィリピン視察」の名目で日本に派遣し、桂太郎首相との間である合意を取り付けた。それは

・フィリピンをアメリカが統治することは日本にとっても利益であり、日本はフィリピンに対していかなる侵略的意図をもたない。

・極東の全般的平和の維持にとっては、日本、アメリカ、イギリス三国政府の相互諒解を達成することが、最善であり、事実上唯一の手段である。

・アメリカは、日本が韓国に保護権を確立することが極東の平和に直接に貢献すると認める。

というものだった。「桂・タフト協定」がそれである。

同年八月、今度はイギリスが日英同盟の見直しに際して

——貴国の大韓帝国を保護国とするのを容認する代わりに、わが国のインドにおける権益を保障してほしい。

と申し入れた。

対して大日本帝国政府は

——ロシアに対してはフランス、ドイツ、イタリアが好意的だが、貴国は同調されないように。

とタギを刺した。イギリスはこれを了解した。

こうしてアメリカがアジアに保有する唯一の植民地であるフィリピンは日本の人質になり、中国におけるイギリスの権益は日本の軍事力を背景に保障されることになった。

そのしているうち、アメリカ合衆国は「桂タフト協定」だけでは安心でなくなつた。三年後の一九〇八年、今度は國務長官エーリヒュ・ルートが駐米全權大使高平小五郎と協議を再開した。

このときアメリカ合衆国が示したのは、フィリピンだけでなくハワイにおけるアメリカの権益を日本に保障させることだった。「太平洋方面の現状維持に関する日米協定」がそれである。

このとき

——ハワイ。

という文字が大日本帝国海軍に記憶された。

むろん日本に否応はなかつた。なぜならアメリカ合衆国

政府はそれと引き換えに、満州における日本の権益を保全するといふのである。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

大日本帝国 明治政府が正式に「大日本帝国」を使つたのは一八八九年二月十一日に発布された「大日本帝国憲法」においてだった。外交上の正式名称と定まつたのは一九三五年七月である。

大韓帝国 朝鮮李王朝は一八九五年、中国清王朝を宗主とする旧来型外交(中華帝国の藩屏・冊封国)から脱し「独立国」を宣言した。その二年後に新しい国号として「大韓帝国」を名乗った。

日露講和条約 日本全権小村寿太郎とロシア全権セルゲイ・ウィッテ(Sergei Yuljevich Witte/1849~1915)の間で調印が成され締結された。会議が開かれた地名を取って「ポーツマス条約」とも呼ばれる。仲介したのはアメリカ合衆国大統領セオドア・ルーズベルト(Theodore Roosevelt Jr./1858~1919)だった。

南満州鉄道 日露戦争後、ポーツマス条約によって我が国が南満州鉄道株式会社を設立(明治四〇年)して経営した鉄道。大連・長春間の本線と幾つかの支線があった。鉄道経営のほか、炭鉱・港湾等の経営、或いは鉄道府属地の行政をも担当した。

日比谷焼打ち事件 東京市内の交番の七割が焼打ちや破壊にあり、死者十七人、負傷約二千人を出した。同様の事件が横浜や神戸でも起こった。

鉄道王ハリマン Edward Henry Harriman/1848~1909。ワイオミング州に産出する石炭を輸送するためユニオン・パシフィック鉄道を建設し、これを機に軍および連邦政府に接近した。のちカリフォルニア州で採れる野菜や果物を冷蔵して東海岸

に輸送する方法を編み出し、莫大な財を成した。ハリマンは投資銀行ブラウン・ブラザーズ・ハリマンを設立したのち国務長官に拔擢され、共和党政権を支えることになる。

小村寿太郎 こむら・じゅたろう/1855~1911。日向国(宮崎県)飢肥に生まれ、開成学校を出てハーバード大学に留学した。一八八〇年帰国し司法省に入り大審院判事。九三年外相・陸奥宗光に拔擢され清国公使館一等書記官、九四年日清戦争のとき政務局長、九五年駐朝鮮弁理公使、九六年外務次官、九八年駐米公使、一九〇〇年駐露公使、〇一年外相となり〇四年日露戦争に伴う一連の外交を一手に収めた。駐英大使ののち〇八年から再び外相に就任し日露協約、韓国併合などを手がけた。

日清条約 正式名称は「満州に関する日清条約批准の件並に附属協約」。満州におけるロシア資産を大日本帝国に移管するについて、その方法や移管後の措置などを清王朝と日本との間で取り決めた。オレンジ計画 一九〇四年からアメリカ連邦政府は総合戦略「カラープラン」の策定に入っていた。この戦略でイギリスは赤、ドイツは黒、メキシコは緑、日本はオレンジ色で示された。当時のアメリカ合衆国にとって最大の仮想敵はイギリス、ドイツだった。

高宗 コ・ジョン/1852~1919。一八六三年朝鮮王朝第二十六代国王に即位し、大韓帝国となった一八九七年、「高宗光武皇帝」を称した。

ウィリアム・タフト William Howard Taft/1857~1930。オハイオ州シンシナティ出身で七八年エール大学を卒業して陸軍に進んだ。フィリピン総督を経て一九〇四年陸軍長官に就任、〇九年第二十七代大統領となった。

高平小五郎 たかひら・こごろう/一八五四~一九二六。岩手県

一関の田崎家に生まれ。一関藩士・高平真藤の養子となった。開成学校卒業後、一八七三年工部省に出仕、七六年外務省に転じた。欧州各国の公使を歴任し、九九年外務次官、一九〇〇年アメリカ公使。ポーツマス講和会議に小村寿太郎とともに全権委員として出席した。○六年男爵、のち貴院議員に勅選され、○八年アメリカ大使となり、国務長官エーリヒ・リュートとの間に太平洋方面の現状維持と清国における機会均等主義を定めた。

## 033 火事場泥棒

第三十三

火事場泥棒

一

前節を書いていて筆者は、日中戦争が始まる前の時代を描いているような錯覚にとらわれた。朝鮮、満州、満鉄、フィリピン、ハワイ、仮想敵といった言葉が続くためであろうけれど、だが間違いなく時代は明治なのである。

そしてもう一つ間違いないことは、日中戦争とそれに続く太平洋戦争の遠因は日露戦争ないしポーツマス条約の後に、ひっそりと仕込まれていたということである。

ここで筆者はこの書籍の主旨に立ち返って、計算機の話に戻ることを欲するのだが、そのことを語るには一九一四年から十年間の出来事、すなわち第一次大戦の前後を見ておかねばならない。

一九一四年（大正三）の六月、ボスニアの州都・サラエボでセルビアの二人の民族主義者がオーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻を暗殺する事件が発生した。史上いうところの「サラエボ事件」である。その報復としてオーストリア・ハンガリー帝国がセルビアに宣戦を布告し、オーストリア・ハンガリー帝国と協定を結んでいたドイツ帝国も八月に参戦した。

これに対してセルビアを支援していたロシアがオーストリア帝国とドイツ帝国に宣戦を布告、するとドイツ帝国はロシアと協調関係にあったフランスに対して宣戦を布告した。実力拮抗の国々が協商協定で手を組んでいたために、ドミノ倒しのように宣戦布告が連鎖した。

ドイツ帝国軍はベルギーを通過してフランスに侵入した。このときから戦争の主導権はドイツ帝国が握ることになった。

「フランスと戦うには、貴国を通過せざるを得ない」というドイツ帝国の言い分は、国際的に通用しなかった。

フランスばかりか、イギリスまでもがドイツ帝国に宣戦を布告し、またたくうちに戦火がヨーロッパ全土に広がった。騎虎の勢で進軍したドイツ帝国軍だったが、東からロシアの圧力を受けて進軍を停止した。

戦線が膠着し、両陣営は局地戦から陣地戦に移っていく。レマルクの小説『西部戦線異状なし』が描くのは、このときの事情である。

この戦争は従来の大砲と馬と兵隊による人海戦術の決戦方式から、毒ガスや戦車、飛行機といった新兵器に代表さ

れる科学・工業技術の物量戦に転換した。総合的な生産力が勝敗を決めるようになった。

日本政府はヨーロッパで始まったこの戦争を、千載一遇のチャンスととらえていた。中心となったのは、外相・加藤高明である。

彼には明確な見通しがなかったが、

「参戦すべきである」

直感的にそう考えた。

加藤がそう考えたのには、一応の理由があった。

日本は日露戦争の戦費を国債でまかなった。そのため、政府は二十五億円を超える巨額の国債未償還金を抱えていた。増税と外資の導入でからも表向きを取り繕っていたものの、金の保有高が底をつき、新たな市場を獲得しなければ経済が破綻するところに追い詰められていた。

一九一四年の八月四日、ドイツ帝国に宣戦を布告したイギリス政府に対して、加藤は駐英日本大使館を通じて、

「同盟国として対独宣戦を布告すべきか」

を質問した。

その回答は、

「イギリスは極東への戦火の拡大を希望しない」

というものだった。

ところが七日にいたって、イギリス政府から

「支那海におけるドイツ帝国の武装商船を、日本帝国海軍の力をもって撃滅してほしい」

という要請が届けられた。

ただちに加藤が首相・大隈重信に意見を具申すると、大隈はいった。

「あとのことはあとのことだ」

イギリスの要請があったことにしてドイツ帝国と戦争を始めておけば、あとはどうにでもなる、という意味だった。大隈と加藤の方針を聞いた元老の山県有朋は、

「武装商船だけに限ることはあるまい。青島を攻めるのが当然ではないか」

とぶち上げた。

「青島」は中国・山東半島の「チンタオ」のことである。青島はドイツ帝国の極東における本拠地だった。

参戦がこれで決まった。

## 二

山県有朋の意見は、軍略としては正しかった。

ところが、ただちに青島を攻撃することはできなかった。青島はドイツ帝国が中国政府から租借しているに過ぎず、中国の領土である。攻撃を行うには中国政府の了解を取ら



なければならぬ。

日本政府からの申し入れを受けて中国大總統・袁世凱はイギリスに

「日本の突出を抑制するよう、頼む」

と要請した。

それでイギリス政府は日本政府に対して

「行動は海上貿易の安全確保に専念されたい」

とする要望を發した。東洋の駄々っ子が火遊びをされてはたまらん、と言いたかったに違いない。

だが加藤は譲らなかつた。

日本が参戦するに当つては、イギリス、中国、日本の間で行きつ戻りつのやり取りがあつた。

結局、日本のゴリ押しが通つて、八月二十三日にドイツ帝国に宣戦を布告、九月二日に日本陸軍が山東省竜口に上陸を開始して山東半島を占領し、次いで十月十四日までに日本海軍が赤道以北のドイツ帝国領南洋諸島の占領を完了した。

対独宣戦は、その本拠地・青島を占領した時点で終結すべきであつた。

そもそも第一次大戦に参戦する正当な理由を日本は持つていなかったし、仮に日英同盟を根拠とする出兵であつたにせよ、山東半島からドイツ帝国の勢力を一掃するに当つ

ては、日英中の三国間で

「中国政府に還付する目的で」

という条件が合意されていたのである。

ところが日本軍はそのまま山東半島に居座り、同地最大の資産である山東鐵道を占有した。

——約束と違ふではないか。

袁世凱は、

「山東半島からの速やかな撤兵を望む」

という聲明を出した。

これに対して駐華公使・日置益が中国政府に手渡したのは二十一か条からなる要求だつた。二十一か条要求の骨子は、山東省と南滿州における日本の經濟的權益の確保にあつて、旅順・大連の租借期限を九十九年に延長するなど、一方的な内容だつた。

西欧列強が戦争に忙殺されている間に滿州における利權を確保・拡大しようと画策しようとする意図は明らかだつた。袁世凱はアメリカ政府が仲介してくれることに期待したが、アメリカ政府の関心はヨーロッパ戦線の成り行きにあつた。このため袁世凱は日本政府の強硬な姿勢に屈さざるを得なかつた。

五月二十五日、袁世凱は不承不承で日本政府との間で調印を取り交わしたが、これが中国における反日感情の遠因

となった。それだけでなく、日本は国際的に「火事場泥棒」の非難を受け、西欧列強が日本に対して猜疑心を抱くきっかけとなった。アメリカでは排日運動が起こっている。

だが、一般国民は

「勝った、勝った」

で沸きあがっていた。

日清、日露と、日本軍は向かうところ敵なしの勢いで、戦争に勝つたびに領土が広がっていった。この二つの戦争で日本は台湾を得、朝鮮を植民地とし、南満州に租借地を持った。

具体的にいえば、一八七五年（明治八）にロシア政府と千島・樺太交換条約を結んだとき、日本の領地面積は約三十八万平方キロメートルだった。それから三十年後の一九〇五年（明治三十八）には、二・三倍の八十八万平方キロメートルになっていた。維新からわずかに三十年で、大日本帝国が形成されたのだった。

ここでまた新しい戦争に勝ったことで、日本はドイツ帝国が領有していた南洋諸島をも統治することになり、また中国政府に突きつけた二十一か条要求で、山東半島の租借も可能になった。

戦後処理をめぐるベルサイユ講和会議に日本は戦勝国として出席したのみならず、イギリス、フランス、イタリア、

アメリカと並ぶ「五大強国」の一国に列したのである。ただしこのことが欧米列強諸国から嫉みを買ひ、中国、朝鮮の人民に恩讐を抱かせた。だけでなく、その版図を維持するのに、大日本帝国の実力は追いついていなかった。

### 三

産業界はこの戦争をどうとらえたか。

ヨーロッパ全土に戦火が広がったというニュースが流れたとき、まず株価が暴落した。次いで紡績業界に不況風が起こった。

一九一四年九月二日、全国蚕糸同業者協議会が操業短縮を決定し、十四日には生糸相場が暴落した。大阪・北浜銀行が支払いを停止したことから大阪証券取引所と大阪米穀市場が休業し、次いで東海地方の銀行で取り付け騒ぎが発生した。

金融不安は全国に飛び火し、周陽銀行（山口県）、村上銀行（広島県）、五泉銀行（新潟県）が休業、八十五銀行（埼玉県）、昌平銀行（東京都）が支払停止、東海商業銀行（愛知県）が破綻した。政府は日銀を通じて総額二百五十万円の緊急融資を行うとともに、蚕糸業救済のために帝国蚕糸会社を設立して買い入れを保証しなければならな

った。また米価の低落を防止するために「米価調節令」を交付したが、大きな効果は得られなかった。

当初は戦争の経済効果に否定的だった産業界は、政府の金融緩和策を機にやや投資が回復し、加えてドイツの潜水艦による貨物船の運賃高騰や、アジア地域におけるイギリス製紡績製品の流通停滞などを背景に、じりじりと上昇に転じた。一九一五年十二月にいたってヨーロッパ戦線の膠着化がはつきりしたとき、株価が暴騰した。「大戦景気」が始まった。

このかつてない好景気に、多くの「成金」が誕生し、その中の何人かがのちの国内産業の基盤を形成していくことになる。そのことは後述する。

大戦景気は一九一八年いっぱいまで、丸三年継続した。

この間に造船業、海運業が隆盛し、鉄工業が盛んになった。紡績業は空前の好況を迎え、製陶業、鋳工業、林業、商業が繁栄した。社会的な現象としては「サラリーマン」が誕生した。田園調布や軽井沢別荘地の形成、都市における消費経済の進展などもこの時期のものだった。

大本寅治郎が鉄工所の経営を近代化しようと思いつき、事務能率の向上のために計算機が必要と考え、あるいは舶来の事務機器が飛ぶように売れたのは、こうした都市型経済の発展によっていた。

一九一七年の十二月にロシアがドイツ帝国と単独講和を結んだとき、実業家や投資家の多くは、それはロシアの内政事情であるに過ぎないと考えた。

ロシア帝国では同年三月に革命が起きていた。ニコライⅡ世が退位し、さらに十月にはペトログラード武装蜂起の勝利でロシア帝国が斃れ「ソヴィエト」が誕生した。革命による政治的、経済的混乱を抱え、誕生したばかりのソヴィエト連邦政府はドイツとの戦争にかまけている余裕がなくなった。

しかし戦争はなお長期化する様相を呈していた。

六月にアメリカが参戦し、タイや中国も対独宣戦を布告していた。連合国軍の圧力は急速に強まっていた。いずれドイツ帝国とオーストリア帝国が降伏することは目に見えていた。だが、

——戦争が終わっても、ヨーロッパ諸国が復興するには相当の時間がかかるだろう。

と多くの人が考えた。

——民需品を中心に物資の不足が慢性化し、加えて復興のための新しい需要が発生する。

と予測された。政府も経済界も、戦後経済への危機感は薄かった。

実際のところというと、この予想は半分外れ、半分は当

つていた。

予想が外れた原因の一つは、「シベリア出兵」だった。寺内正毅内閣が一九一八年一月に実施した軍艦二隻のウラジオストク派遣がそれである。

名目は

「居留民の保護」

だったが、ロシアの混乱に乗じてシベリアに橋頭堡を確保し、満州の権益を拡大しようと企てたのは明らかだった。産業界はこの出兵を支持しなかった。対独宣戦布告と対華二十一か条要求で山東半島を獲得したとはいえ、新規の投資は同地にこそ集中すべきだった。ここに北部満州まで加えるには、経済・軍事の総合力から無理があった。さらに良識ある穏健な産業人は、国内で拡大しつつあった貧富の格差は正と物価の安定、工場就労者への待遇改善など「内治」を重視すべきだと考えていた。

一九一八年七月七日、ドイツが西部戦線で大敗した。

八月二日、連合国軍がアルハンゲリスクに上陸した。共産革命の崩壊をねらったイギリスやアメリカが一時的に占領したのである。

九月に入ってドイツ政府は連合国との講和に積極的な姿勢を示し、同月末にブルガリアが連合軍に単独降伏した。十月二十八日、ドイツ海軍で反乱が起き、これが引き金と

なつて翌十一月九日にドイツ帝国が瓦解した。戦争状態に全面的な終止符が打たれたのは十一月十一日である。

戦争終結のニュースが流れると、まず海運業が打撃を受けた。

一九一八年に大型船の賃借料は一トン当り四十七円だった。これが翌一九年の一月には二十九円に下落し、三月には十円にまで下がってしまった。海の航行に安全が保証されたのだから、当然といえば当然だった。福井や金沢などの和服問屋が過剰在庫を抱えて倒産し、三月には鉄、銅、綿製品などが暴落した。ここまでは「予想が外れたうち」である。

一九一九年四月を境に状況が一変した。

生糸や綿製品などの対米輸出が回復し始めたのだ。予想した通り、ヨーロッパ諸国はやはり簡単には復興しなかった。再び日本経済は上昇気流に乗り始めたが、大規模な戦争が終結したために工場の拡張計画は見直され、安定成長路線が選択されていく。

ただし、株式相場だけは違っていた。

余剰した資金が株式市場に流入し、有望株への投機が行われた。「戦後景気」と呼ばれる好況は、一九一〇年代末から九〇年代初頭に発生したバブル景気とよく似ている。実態としては、内部に労働運動や農村の貧困、輸入超過に

よる金保有高の減少といった問題をかかえていたにもかかわらず、株や不動産が高騰した。

投機に走ったのは投資家だけではなかった。一般庶民でさえ、銀行から借りた金を投機に回し、実業が疎かになった。借金を集めて膨らんだ投機は、必ず破綻するのである。

~~~~~ 補注 ~~~~~

サラエボ事件 オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子（皇帝フランツ・ヨーゼフの弟カール・ルートヴィヒ大公の長子）フランツ・フェルディナント（Franz Ferdinand von Habsburg-Johann Georg / 1863～1914）は陸軍総監として陸軍の演習を視察するために、ショテク妃とサラエボを訪れた。サラエボ駅から市庁舎に向かった自動車に爆弾が投げられたが、ここでは従者三人と市民が負傷したにとどまった。歓迎式典を終えた皇太子夫妻は負傷した従者を見舞うために病院に向かい、その途中、ピストル二発が発射され夫妻は間もなく絶命した。

フェルディナント皇太子はオーストリア帝国におけるドイツ人とマジャール人による支配がスラブ系市民の不満を助長していると考え、ドイツ人、マジャール人、スラブ人が相互に補完する「三元主義」を唱えていた。ところがスラブ系市民にとってその提案は、汎ゲルマン主義にスラブ人を取込む施策と受け取られた。

ドイツ帝国 一八七〇年八月、フランスのナポレオン3世との戦争に勝ったプロシアは、翌七一年ヴィルヘルム1世が即位して「ドイツ帝国」と称した。以後、ドイツは帝政崩壊、ナチスの台頭など激しく変化する。本書では帝政時代を「ドイツ帝国」、一九一八年から三二年までを「ドイツ共和国」、ヒトラー内閣が成立した三年から四五年までを「ナチス・ドイツ」と呼んで区別する。ちなみにヴィルヘルム1世は一九一八年十一月九日に退位して帝政に幕が下ろされた。

レマルク Erich Maria Remarque / 1898～1970。ナチ

ス・ドイツによる反戦主義者弾圧により三二年にスイスに逃れ、三八年ドイツ国籍を剥奪されたのを機にアメリカ合衆国に亡命した。アメリカで四一年『汝の隣人を愛せ』、四六年『凱旋門』を発表するなど平和主義に基づく文筆活動を展開した。

西部戦線異状なし レマルクの小説。一九一六年、ギムナジウムの級友とともに出征し、西部戦線へ配属された体験をもとに、二九年に発表した。

袁世凱 Yuan Shikai / えん・せいがい / 1895～1916。河南省項城に生まれ、科擧の試験に二度落ちたため官吏を諦めて軍人となった。一八八二年朝鮮の壬午騒乱で大院君を天津に幽閉し、八四年には朝鮮甲申事変を鎮圧した。新建陸軍の責任者に抜擢され、義和団事件鎮圧で列国に知られた。一九〇一年直隸総督兼北洋大臣、清王朝滅亡後、中華民国第二代臨時大統領に就任した。一六元年旦に皇帝の地位に就き、国号を中華帝国と改めたが、三か月で帝位を取り消し、その三か月後に急死した。

日置 益 ひおき・えき / 1861～1926。一八八八年東京帝国大学法科大学法律学科を出て外務省に入った。一九一四年中国公使に就任した。対華二十一か条要求の交渉を担当した。

ソビエト Совет…ロシア語で「評議会」を意味する。ロシア革命においてマルクス主義者もしくはマルクス・レーニン主義の理論の下で組織された労働者の会議を指した。したがってソビエトは革命後のソビエト連邦ばかりでなく、中国共産党でも組織された。

アリハンゲリスク Altangetui : 「戦う大天使…アルハンゲリ」に由来する。ロシア北西部、白海に注ぐ北ドヴィナ川の河口近くの都市。

034 成金

第三十四

成 金

一

第一次大戦は、世界史においては、「帝国主義段階における内部矛盾が世界的規模で爆発した最初の世界戦争」と位置づけられている。

「野口八郎」のペンネームで大著『日本資本主義発達史』を書き上げた経済学者であり弁護士でもあった守屋典郎は次のように記す。

資本主義は二十世紀のはじめまでに帝国主義に発展し、ひとにぎりの先進諸国によって地上人口の圧倒的多数が植民地的抑圧と金融的絞殺をうける世界体制が成立した。しかし帝国主義諸国家の発展の不均等は飛躍的に激しくなつて、国家間あるいは国家群間の対立は激化し、世界戦争への危険が強くなっていった。

大戦の戦後処理を取り決めたのは、パリのベルサイユ宮

殿で結ばれた多国間条約である。史上、「ベルサイユ条約」と呼ばれ、その条約に基づく国際的な枠組みは「ベルサイユ体制」と称される。

その史的評価は次のようである。

一、ヨーロッパ至上主義が崩壊し、太平洋が新しい基軸となった。

一、ロシアに成立した社会主義国家ソビエト連邦が国際政治の転換を促した。

一、アジアにおける日本の勢力伸張が欧米列強から警戒の目で監視されるようになった。

以上の意味で、第一次大戦は「近代史の転換点」に位置づけられている。

だが当時、日本国内でこのことに気がついている人はいなかった。なぜなら日本経済は空前の活況を呈しており、大日本帝国の弥栄（いやさか）を信じて疑わなかったからである。

日本経済が活況を呈した直接の原因は、第一次大戦でヨーロッパの産業界が重大な打撃を受け、各国が生産する製品をアジアやアメリカ合衆国に輸出する余裕がなくなったためだった。なかでもドイツ帝国に依存していた染料や薬

品、化学製品の不足が顕著だった。

その分野の製品にかかる日本の企業に注文が集中した。おのずから、それまでヨーロッパの企業が大きなシェアを占めていたアジアや南米、アフリカ、オーストラリアなどに、日本製品の輸出が伸びた。ロシアやアメリカからも、毛布や電話機、陶器などが大量に発注された。

例えば革命前のロシア政府からは、軍用毛布千七百六十万ヤードの注文があった。このため日本毛織は全工場で二十四時間の生産を行ったが、それでも受注に追いつかなかった。

同じくロシア政府は、大量の軍用電話機を大倉組に発注した。最初の発注量だけで四万台という膨大なもので、逋信省がこれを日本電気と沖電気工業に二万台ずつを割り当てた。逸見治郎が苦心の末に完成させた孟宗竹の計算尺が輸出されたのもこのときだった。

アメリカからはボーン・チャイナが日本に発注された。これはホテルやレストランなど民需用だった。ヨーロッパの陶器メーカーから輸入が激減したため、その代替として日本製の陶器が求められた。

森村組が窓口となり、日本陶器が生産した。白磁の大皿の年間受注量は、最初一万セットだったが、三年後には十万セットを上回った。このために同社はホレリス式統計会

計機械装置を設置して管理業務を行った。

生産地の名を付けた陶器は「ノリタケ・チャイナ」と呼ばれ、現今にいたっては「オールド・ノリタケ」として高価で取引されている。

企業の利益率が好況のすごさを物語っている。

一九一四年上期における主要な企業の平均利益率は一四・八%だった。それが二年半後、一九一六年下期には四四・〇%に増加し、ピーク時の一八年下半年は六三・三%に達している。何でも売れ、いくらでも儲かるという時代だった。

この間の貿易収支を見ると、一九一六年に約十二億円だった輸出額は、三年後に約二十一億円に、輸入額は約八億円から約十八億円に急増した。一九一六年から一八年まで三年間の貿易黒字は十三億円に達している。

貿易の急伸で海運業が興隆し、鉱工業、紡績業、木材業、電信・電機業などが軍需で巨利を得た。信じられないほどの富が、驚くほど短時間に個人に集中し、いわゆる「成金」が相次いだ。

二

幸運の神は、「風に乗って駆け抜けていく」といわれる。

その前髪を捉えることができた成りあがり、江戸のころは「梅ノ木分限」「にわか分限」と呼んだ。

「梅ノ木分限」という言葉には、

——梅の木は早く伸びるが大木にならない。

という皮肉な洒落が含まれている。

対置語は「くすのき分限」。

嵐の中に船を漕ぎ出したみかんで成り上がった紀伊国屋文左衛門は、それだけなら「梅ノ木」だったが、のち紀州の材木で上野寛永寺根本中堂の建立を請け負う大商いをやってのけた。

彼は徳川將軍綱吉のお側用人・柳沢吉保に接近して財を成し、吉原で黄金を撒きに撒いた。その豪遊ぶりばかりが喧伝されるが、文左衛門という人は利に聡く、清濁併せ呑む剛腹でもあった。

吉原での豪遊について、彼は、

——このことが江戸市中の暮らしにつながる。

という哲学めいた考えを持っていた。

彼の遊びは、いわば公共事業でもあった。

ただ、吉保に接近しすぎ、貨幣鑄改に関与したことが命取りになった。吉保が失脚し、新井白石が改革に乗り出すとともに没落し、最後は深川八幡近くの寓居で暮した。往時を物語るのは金時絵の椀一つであったと伝えられる。

これに対して「成金」という言葉は、新聞が作り出したらしい。折から将棋ブームだった。

西の坂田三吉、東の関根金次郎が「王将」「名人」の座をめぐって激突し、新聞各紙がこぞつてその話題を取り上げていた。前に一つずつしか進めない「歩」が敵陣に入つて「と金」に成る。庶民には分かりやすい喻えだった。大から小まで「成金」が誕生した。

その先駆をなしたのは相場師「鈴久」こと、鈴木久五郎であろう。

彼は日露戦争の最中、強気一点張りの仕手戦で、あつという間に一千万円の大金を手に入れた。今に直せば三千億円にも相当する。

高給料亭で同時に五つも六つも宴会を開き、疊に撒いた銀貨を仲居女たちに拾わせ、向島の自宅から兜町に通うため、自分と妻、使用人のために四台の二頭だて馬車を注文した。日本に亡命していた孫文を妾宅に招いて十万円を渡し、変革運動の支援者を気取ったりもした。

一九〇七年、「ガラ」がやってきた。株式相場が暴落したのだ。彼は頂点から奈落の底に突き落とされ、孫文が中華民国を樹立したとき、彼は巢鴨の借家で天涯孤独のわび住まいを営んでいたと伝えられる。このあたり、紀伊国屋文左衛門の晩年とよく似ている。

内田信也是一九一五年に三井物産を退社し、兄や知合いから借りまくった二万円を元手にして「内田汽船」を設立した。二百円の家賃が払えなかったにもかかわらず、八馬汽船が保有していた排水量四千五百トンの船を月四千二百円で借り、これを材木の輸送に月八千円で貸し出した。

内田は儲けた金で手当り次第に船をチャーターし、一方、自らも船を保有して海運を営んだ。その結果、二年後には十六隻の船舶を持ち、横浜に造船所を建設するまでになっていた。

あるとき首相・大隈重信の宴会に招かれた。

——これくらいならオレにもできる。

と考えた彼は、神戸市の須磨に迎賓用の大邸宅を建設した。洋館のほかに五百畳の大広間を備えた迎賓館は「須磨御殿」と称された。

一九二四年（大正十三）、政友会から衆院選に立候補して当選、海軍事務次官、逓信省政務次官を経て岡田啓介内閣で鉄道相、東条英機内閣で農商相を務めた。第二次大戦後、公職追放を受けたが五二年に復帰し衆院議員となり、第五次吉田茂内閣で農林相。なかなかしぶとい人生だった。

神戸に本社を構えた鈴木商店は、台湾の砂糖や樟脳を扱っていたが、大戦で軍が買い込むことを見越して米を買い

占めた。これがために米騒動で焼打ちにあった。総資産は五億六千万円を超え、系列会社は六十に及んだという。のち昭和金融恐慌のとき、渡辺銀行の破綻に連鎖して倒産の憂き目にあった。

その大番頭だった金子直吉は、その最盛時に次のように述べている。

今当店のなしおる計画は、すべて満点の成績にて進みつつあり。お互いに商人としてこの大乱の真中に生まれ、しかも世界的商業に関係せる仕事に従事し得るは無上の光栄とせざるを得ず。すなわちこの戦乱の変遷を利用し、大もうけをなし、三井・三菱を圧倒するか、しからざるも彼らと並んで天下を三分するか。これ鈴木商店全員の理想とするところなり。

彼は個人で鉄を買占め、三億円の資産を築いたと伝えられる。ただ彼の場合は出来星の成金ではなかった。一八九九年以前に台湾総督・後藤新平と結んで台湾樟脳専売法を成立させて利権を確保し、大日本塩業、日本油脂、帝国麦酒などを創立し、日本製粉、大正生命保険、日本金属、六十五銀行などの設立に関与した。

茨城県で銅山を経営していた久原房之助は、銅の急騰で

大いに儲け、その資産は一億円を超えた。敷地三万五千坪の別邸を神戸市住吉に建設し、落成式には大阪、神戸の芸者を総拵げにして、屋敷の前を通る者にご馳走を振舞った。のち、事業のすべてを義兄・鮎原義介（日産コンツェルン総帥）に譲り、政友会に参加して田中義一内閣で通信相に就いた。

彼は一方では手堅く事業を営み、日立鉱山を設立した。のちに東京電燈会社から小平浪平を電気技師として迎えて鉱山用の電動ポンプを製品化したのがきっかけで、発電機や発電機の総合メーカー「日立製作所」を興すことになる。白石元治郎は浅野商店、東洋汽船を経て、移籍した鉄工所の経営者となった。空前の鉄需要で儲けた金のすべてを会社の資本金に注ぎ込んだ。第一次大戦前に二百万円だった資本金は、大戦が終結した時には八倍の一千六百万円に増大していた。NKK日本鋼管の基盤はこうして固まった。のち白石には「鋼管王」の異名が献じられている。

三

一九一七年八月三十一日付「読売新聞」に次のような記事が載っている。

突如株式の大崩落

不正買占の取締が其の主因 一部成金の肝を寒からしむ馬鹿になって只、買へば可いと称せられてゐた兜町へ三十日の午前嵐のやうな大崩落が襲来して一部成金の肝を寒からしめた。

取引所内はワツと云ふ鯨波の声に等しい雑音と共に各仲買店員が電光の如く飛交ふ有様。

後場は立合を中止。欧州戦争の結果、供給と需用との釣合が保たずに物の相場を吊上げてゐるのも事実だが、大部分に人為的の競り上げが行はれてゐる中で、不正な買占者を嚴重に取締まると云ふ農商務省の省令が九月一日から実施されると云ふことに驚いたのである。成金連が儲けた金が思惑の買占を行つた結果、米雜穀、油、綿糸の主要品に次いで味噌醬油、沢庵、梅干、薪炭の類までも天井知らずに騰貴を告げてきた。

記事中にある「農商務省の省令」というのは、「暴利取締令」のことである。穀類、鉄、石炭、綿糸などを買い占め、暴利をむさぼる者には、戒告、三か月以下の懲役または百円以下の罰金を科すというのが、その内容だった。味噌醬油、沢庵、梅干までが高騰したというのは、バブル以外のなものでもない。

- ・ 暗い料亭の玄関を照らすのに十円札に火をつけた。
- ・ 悪くもないのに歯をすべて抜いて金の総入れ歯にした。
- ・ 吸い物の椀を開くと生きたウグイスが飛び出した。
- ・ 節分に銀の粒をまき、芸者に競って拾わせた。
- ・ 田舎の分限者が高価なラヂオを買い込んで株式相場に耳を傾けた。

・ 張り合つて高級料亭を借り上げ大宴会を開いた。

・ 鯛の目玉の周りの肉だけで蒲鉾を作らせ、一人前百円の料理を出させた。

・ 住宅四十八戸を取り壊してそこに東海道五十三次を模した庭を造った。

・ 裾模様には白金とダイヤを使った和服を仕立てた。

・ 指輪、時計、帯留め、櫛、簪は金か白金、そこにダイヤ、宝石をちりばめた。

このような悪趣味かつ愚劣をきわめた伝説を、「成金の時代」は数多く残している。

とはいえこれもまた、時代であつた。

のちにアメリカのコンピュータ・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社からホレリス式統計会計機械を輸入することになる森村商事の森村開作（六代目

市左衛門）も、この景気に乗ってしこたま儲けた一人である。森村については後に詳述する。

補 注

守屋典郎 もりや・ふみお／1907～1996。一九二九年東京帝国大学法学部を出て弁護士となった。三三年共產党に入って「野口八郎」の筆名で文筆活動を行った。

大倉組 大倉喜八郎(1837～1928)が創業した「和泉橋通藤堂門前自身番向大倉屋」が発展、一八九三年「大倉組」となり、中堅財閥となった。その建設・土木部門「大倉土木組」のちに「大成建設」と改称した。系列会社にはホテルオークラ、帝国ホテル、日清製油、日本無線、日本化学工業、大日本麦酒などがあつた。

紀伊国屋文左衛門 きのおくにや・ぶんざえもん／没年について公式な記録は残っていない。豪商・奈良屋茂左衛門と競い、権力中枢の幕府官僚を饗応し利権を拡大した。一七〇八年に十文銭の鑄造を請け負ったが一年余りで通用禁止となり、それがきっかけとなって家運が傾いた。

若いころは冒険心に富み、決断力と功名心で成り上がったのに対して、晩年の行動が一致しないことから、放蕩と家運衰退の原因を作ったのは二代目文左衛門であるという説もある。山東京伝の『近世奇跡考』(二八〇四)には、享保十九年(一七三四)四月没とある。享年六十六。「帰性融相信士」と戒名し、墓は深川浄等院にある。

坂田三吉 さかた・さんきち／1870～1946。大阪の貧家に生まれたことは確かだが、幼年期のことは伝わっていない。関西将棋界で頭角を現し、一九二五年「名人」を自称して関東将棋

界の関根金次郎と対決した。独自考案した「坂田流向い飛車」はのち関西棋流の本流となった。死後、日本将棋連盟から「名人」「王将」位を贈られている。北条秀司の戯曲『王将』、村田英雄の歌謡曲『王将』および、北島三郎の『歩』などのモデルとなった。

関根金次郎 せきね・きんじろう／1868～1946。千葉県に生まれ、第十一世名人伊藤宗印の門に入り関東将棋界を代表する存在となった。一九二一年第十三世名人となり、坂田三吉の挑戦を受けた。坂田との戦いには勝ったものの、将棋界の近代化の必要性を痛感し、三五年自ら名人位の世襲制を廃止し選手権制への移行を決断した。

鈴木久五郎 すずき・きゅうごろう／1877～1943。ガラ 株式相場の暴落をモノが崩れるときの擬音に喩えた。

内田信也 うちだ・のぶや／1880～1971

八馬汽船 はちうま・きせん／一八六一年八馬兼介(はちうま・かねすけ／1839～1918)が開業した米穀小売商を起点に、一八七八年「西尾丸」という帆船を購入して海運業に転身した。二〇二三年現在、兵庫県神戸市に本社を置き、日本郵船グループに属している。

鈴木商店 武蔵国(埼玉県)川越の下級武士だった鈴木岩次郎(1841～1894)が一八七七年に砂糖・樟脳商として神戸に創業した。岩次郎の死後、妻ヨネ、番頭の金子直吉が製鋼部門にも事業を拡大した。鈴木商店は倒産したが、その傘下にあったのは播磨造船所(のち石川島播磨重工業)、鳥羽造船所(のち神戸製鋼所)、帝国人造絹糸(帝人)、豊年製油、旭石油、帝国樟脳、信越電力(のち北陸電力)、南朝鮮鉄道、東洋燐寸、帝国汽船、帝国麦酒(サッポロビール)などだった。また金子直吉と並んで番頭を

務めた鈴木岩次郎は、鈴木商店倒産後、日商（日商岩井、のち「双日」と改称）を設立した。

金子直吉 かねこ・なおきち／1866～1944。

久原房之助 くはら・ふさのすけ／1896～1965。第二次

大戦後、A級戦犯容疑で公職追放となった。

鮎原義介 あゆはら・ぎすけ／1880～1967。

白石元治郎 しらいし・もとじろう／1867～1945。

035 米騒動

第三十五

米騒動

一

成金が湯水の如くに金を使う一方、庶民の生活は苦しくなっていた。物価の上昇に給与が追いつかなかったためだった。

一九一三年（大正二）の平均値を一〇〇とする指数で見ると、一九一八年の株価は一七九・三だった。これに対して卸売物価は二一六・六と、実に倍以上に跳ね上がった。わずか五年で物価が倍以上に値上がりしたのでは、庶民の生活が逼迫したのも当然だった。

ことに公務員がひどかった。

公務員は「社会への奉仕者」「納税者の養い人」ないし、地域の名士・富農の名誉職という位置付けだった。中央官庁の上級職は別格であって、行政職員や教員、警邏など現業部門の一般職員は民間企業の勤め人より給与が低かった。

——何も作っていないのに給料がもらえる楽な仕事。

——というのが一般の感覚だった。米を作ることが最もたい

せつな仕事と考えられていた時代である。

インフレで庶民の生活がいかに圧迫されていたかを端的に示す投書が、一九一八年（大正七）二月の「東京朝日新聞」に載っている。投書の主は小学校の教員であった。

自分は月俸二十円の小学校教員である。家族は自分等夫婦のほか、親一人、子供二人の五人ぐらし。米は平均一人前三合として日に一升五合、一カ月四斗五升は要る。一升二十四銭として月十一円二十五銭、野菜、味噌、しょう油、マキで三元。冬季は炭が二十貫要るとすると、十貫目三元として六円。石油が二升、一升三十銭として六十銭。すなわち必要欠くべからざる生活品だけでも二十円八十五銭になる。しかも互助会といって四十銭を天引かれ、茶話会費といつては二十銭を引かれるので、実際手に入る金は十八円余。これでどうしてくらしてゆけようか。

——何ともみみっちい。

と責めてはいけない。

地方の教職員は現今のように公務員として扱われず、給料は低く預貯金もなく、かつ第一次大戦後のインフレと不況で給料が未払いというケースが続出していた。教員だけのことではなかった。また、都市地域に限った現象でもな

かった。

農村地域では毎月の安定した現金収入がなかったために、生活費の高騰はさらに悲惨な事件を起こしていた。日吉明助という人が書いた『貧の研究』という本には、当時、実際にあった様々な出来事が記されている。

米は豊作が続いていたにもかかわらず、値上がりに歯止めがかからなかった。標準米の価格は、一九一六年に一石（十斗＝百升＝千八百リットル）当り十三円二十六銭だったが、一七年には十九円三十五銭に、一八年には三十一円八十二銭に高騰した。

都市部における白米の平均売価は、一八年一月現在で一升三十銭前後であったから、新聞に投書した教員の妻は必死に安い米を探し回ったのかもしれない。

米価が高騰した原因としては、都市人口がにわかに増えた結果であるとする説がある。

農村部の働き手が都市に流出し、生産に従事する労働力が減少した。これに対し、消費する人口だけが増え、需給バランスが崩れた、という。

また一九一六年の米が天候不順による不作という事実もあった。

だがそれだけが原因ではなかった。山東半島や満州での緊急時に備えて、軍隊が米を大量に購入したのである。こ

のため、少しでも高く売ろうと農家や仲買人が出し惜しみをした。加えて寺内内閣は地主階級が主な地盤であったため、思い切った米価安定策を講じなかった。

そのために米もまた、第一次大戦後の投機の対象となつたといわれている。「物価騰貴に処する中流主婦の覚悟」と題した評論を、雑誌「主婦之友」が掲載したのはこのころである。

寺内内閣が示した「シベリア出兵」計画は不評だった。その原因は、世界規模で政治・経済の構造が変化していることへの警戒心ではなく、苦しい生活を余儀なくされていた庶民が、無駄な戦費の自粛を求めたことによっていた。

二

一九一八年。

この年の米は、前年までと打って変わった天候不順のため、かつてない凶作が予測されていた。農家や米問屋が出し渋った。加えて北陸地方の漁師の家は、北海道のニシン漁が振るわなくなつたため、出稼ぎの場所を失っていた。そこにシベリアへの出兵が追い討ちをかけた。

こうした中で、その年の七月二十三日、富山県の魚津でちよつとした騒動が発生した。

発端はその前夕、魚津の漁師の女房たち三、四人が井戸端会議で、

「米が、この港から積み出されているそうな」

「そりゃ、ますます米が足りなくなつて値上がりするわ」

「富山の米を、どうして富山の人間が食えんのか」

と話したことにあつた。

事実、魚津港には伊吹丸という輸送船が停泊していて、県内産の米を次々に積み込んでいるさなかだった。

翌日、米の県外積出しを阻止しようと四十六人の主婦が海岸に集まつた。駆けつけた警官が説得してこの日は何ごともなかった。魚津での出来事が近隣の村々に伝わると、それぞれの地域で小規模な集会が開かれ、

「米の県外持ち出しを阻止すべし」

という声が自然に形成されていった。

それから六日後、東京の店頭で販売される米の値段がいちだんと吊り上がった。一円で二升四合というから一合が四十二銭である。三十一日、ついに東京米穀市場は取引の立会いを停止するにいたつた。

八月三日になると、近隣の漁師の女房も参加して、総勢約百八十人が魚津の西水橋町の海岸に集まり、やがて隊を組んで米屋や有力者の家などに押しかけた。翌四日夜、隣接する東水橋町で漁師の家族など六千七百人が米屋などに

押しかけた。

八月三日付「東京朝日新聞」記事。

富山県中新川郡西水橋町民の大部分は出稼業者なるが、本年度は出稼先なる樺太は不漁にて、帰路の路銀にも差支ふる有様にて、生活頗る窮迫し、加ふるに昨今の米価暴騰にて、困窮愈其極に達し居れるが、三日午後七時漁師町一帯の女房連二百名は海岸に集合して三隊に分れ、一は浜方有志、一は町有志、一は浜地の米屋及び米所有者を襲ひ、所有米は他に売らざること及び此際義侠的に米の廉売を嘆願し、之を聞かざれば家を焼払ひ、一家を襲殺すべしと脅迫し、事態頗る穩かならず。斯くと聞きたる東水橋警察署より巡查数名を出動させ、必死となりて解散を命じたるに、漸く午後十一時頃より解散せるも、一部の女達は米屋の附近を徘徊し米を他に売るを警戒し居れり。

地元紙「高岡新報」は八月五日付で次のように報じている。

朝来、同町の女房子供は三々五々なにごとかひそかに語りあいて不穩の模様ありしが、がぜん薄暮七時頃にいたるや、おのおの家をでて海岸に集合する者六、七百名の多数

におよび、町長、町議に瀕死の窮状を訴え、ともに米屋、地主の家に押しかけ、署員全部この女軍の解散につとめたるも、多勢に無勢にて警官の制止に耳をかさず、全町わきかえるが如き騒擾のうちに夜半十二時すぎにようやく鎮静。当夜なかならず喧騒をきわめたるは新上町高松長太郎方にて、目下白米千俵を所有せるにより、数百名の女軍の一隊は同家をおそい、居合せたる長太郎妻に対して米を売るなどというや『私の所は商売だから売るも売らぬも勝手なり』と言放ちしことから女軍はおおいに怒り、悪罵をあげせかけ、殺氣立ちて一時はいかなる椿事を出来せんかはかりがたき形成。

米を売れと迫る女軍に

「うちは商売だからね。誰に売ろうが売るまいが勝手じゃないか」

と言いつ返しした米屋の女房の気魄がすごい。

この勢いは翌日も続き、制止した警官が負傷したことから、男一名、女三名を検挙したところ、警察署をデモ隊が包囲して釈放を求め、さらに東京に向けて動き出した貨物列車から米数百俵を荷降ろした。

翌七日になると東西水橋町の町民と滑川町の町民が合流して一万人を超える暴徒となり、伊吹丸に米を積み込もう

としていた船員、沖仲士などに暴力をふるい、夜半にいたって二千人が米屋を襲撃して破壊行為に及んだ。

米騒動の発端であつた。

三

八月初旬にこの騒動は富山全県に広がり、收拾がつかないうち全国各地に飛び火した。

「大阪朝日新聞」八月十日付記事。

岡山精米会社の特等白米は、暴騰また暴騰ついに五十円七十銭（一石）となり、市民一般さんたんたる状態におちいりたる折柄、岡山市内山下吉田石蔵（三八）、森下町水沢三太郎（三六）らは十数名の若者と語らい隊を組み、九日午前九時半岡山米穀取引所におしかけ、立会の終わるのを待伏せ、貧乏人の敵だ、たたき殺せとわめきたて、鉄拳をふるって仲買人らに喰ってかかり、客筋連はろうばいして逃げまよう騒ぎに、数百人の群衆、喧嘩の渦にまきこまれ、口々に『仲買人は人類の敵だ』と絶叫し、アワイ一大事に及ばんとしたり。急報に接し、岡山署にては各駐在巡查を召集し、署員また現場へかけつけ、ようやくにして取りしずめ、警察署へ連行した。

同じ八月九日には、岡山県津山町、香川県高松市などでも類似的デモがあった。

大がかりで深刻だったのは、京都、名古屋など大都市で発生した騒動——ほとんど「暴動」といいいい——だった。

京都市で八月十日に起こった騒動は、買い占めによる米不足と米価の高騰に怒る民衆の蜂起とは趣が異なった。中心になったのは、そのころ京都市郊外にあった被差別部落だった。

戸数は一千六百戸、人口は七千余人を数えていた。日ごろから何かと差別を受けていたために、その半数以上は「貧」を通り越し、「極貧」というべき生活を送っていた。米価の高騰をきっかけに、日ごろの鬱憤が爆発したといっている。

夜八時すぎ、一団の群衆が市内東七条の巡査派出所を襲った。重さ四キロに近い石を投げつけて派出所の表戸を破壊した後、七条高瀬川下ルに店を構えていた沼田米店の表戸を壊して乱入した。沼田米店は米の売り惜しみで市民から疎まれていたので、観衆が騒動に参加し始めた。

数を倍以上に増やした群衆は誰いうともなく数隊に分かれ、沿道の市民をさらに加えながら、その夜のうちに三十

軒以上の米屋に石を投げ、「白米一升三十銭で売ります」と半紙に書かせてこれを表に貼り出した。

鎮庄に出動した警察が十四名を逮捕したが、数十名が七条署に押しかけて釈放を強要した。このため、遂に京都憲兵隊が出動した。

翌日夜には市内の十数か所で暴動が起こった。

その数は二万人に達したという。

もはや警察力では抑えきれないと判断した京都府は、知事の名で陸軍第十六師団に出動を要請した。伏見から歩兵二百、騎兵六十三が出動した。

西三条北小路地域の四囲をすきまなきまでに包囲し、戸毎に同夜の暴動に関係ありとみとめたものを拉致し、三十余本の竹槍、棍棒、その他の利器に付着したる血痕目じるしを根拠に、強烈なる検挙をはじめ、六十余名を逮捕。

と「京都日出新聞」は記す。

この京都の騒動から、米騒動が質的に変わった。

政府は十三日に

——米穀を強制的に買い上げるため、一千円程度の国庫支出を行う。

と決定し、翌十四日、米騒動に関する報道を控えるよう

新聞各社に要請した。しかし民衆の意識は米の問題から離れていた。

市民や労働者の暴動は米問屋の打ちこわしにとどまらず、米不足とまったく関係のない地方の豪農・豪商が焼打ちにあったり、警察署が攻撃されたりした。米の暴騰そのものでなく、経済の不安定と社会の格差を誘発した資本家、資本金家をなすがままに放置した政治への不信、差別への怒りが折り重なり、政治的な運動に転換していく。

京都市で被差別部落の住民を中心に騒動が起こっていた八月十日、名古屋市中では

——鶴舞公園で集会のあと、米買占めの仲買人を懲らしめるような。

という噂が流れていた。

その根拠ははっきりしなかったが、午後八時過ぎまでに、噂を聞きつけた市民六千人が鶴舞公園に集まった。公園に向かう電車は超満員で、午後九時には参集者が二万人を超えた。しかし警察が総動員で米屋町への通路を遮断したため、群集は午前一時過ぎに散りじりになった。

翌日夜、同じ鶴舞公園には前夜をはるかに上回る群集が集まっていた。

このときのデモは、とうとう警官隊ともみ合いになり、三十三人が騒擾罪で逮捕されている。暴徒化した民衆の鎮

圧には、旧士族や元軍人・警官などで組織する郷士会がその一翼を担った。日の丸の鉢巻を締め、剣道着の袴の裾をからげた五十年配の男たちが、白刃や木刀で武装してデモ隊に立ち向かった。そういう写真が残っている。

首相・寺内正毅は最後まで米騒動の本質を理解できなかった。シベリア出兵を強行したことが政治家寺内の命取りとなった。憲政会が政府の対応を非難し、近畿関西新聞記者大会が内閣弾劾を決議し、その波が東京に及んで初めて、彼は二進も三進も行かない袋小路に追い込まれたことを察知した。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

北海道のニシン漁 一八九七年に九十七万トンの漁獲高を記録したのをピークに、道南地区から順次、漁獲高が低迷していった。北陸地方は江戸期、松前船を通じて北海道と深い関係があり、この地方の農民や漁民がニシンの季節になると北海道に出稼ぎに行った。田植えが始まる前のひと稼ぎという意味で都合が良かった。現在、北海道各地に残る「ニシン御殿」はいずれも大正期に建てられた「記念碑」的な存在が少なくない。

なぜニシンが北海道の海から消えたのか、その原因には①乱獲②太陽黒点の活動の影響③海水温度の上昇④森林の伐採——などが指摘されている。このうち「森林の伐採」説が最近になって有力視されている。ちなみに北原ミレイ唄うところの『石狩挽歌』（なかにし礼作詞、浜圭介作曲）は、なかにし礼自身の体験でもある。

騒動の波及 富山県で発生した米騒動は一都三府三十八県三十九市百三十四町百四十五村に及んだ。うち七十以上の市町村で軍隊が出動した。

京都日出新聞 一八七九年「京都商事迅報」として創刊され、「商事迅報」「京都新報」「京都滋賀新報」「中外電報」など紙名が様ざまに変わり、一八九七年「京都日出新聞」となった。一九四二年、戦時下の新聞統合で「京都日日新聞」と合併して「京都新聞」となった。

米騒動の質的变化 七月二十二日から八月十日前後までの騒動は米の売価高騰と売惜しみに対する庶民の怒りが爆発したかたちだ

った（第一期）。しかし八月十二日、名古屋市の騒動に軍隊が出動した時点で騒動は「労働者対資本家」の関係に変質した（第二期）。次いで八月十七日にいたって山口県宇部市の沖ノ山炭坑における騒動で軍隊が実弾を発射し死者十三、重症者十五人を出した時点で「庶民対国家権力」の構図に変化した（第三期）。福岡県峰地炭坑の騒動で抗夫たちは炭坑からダイナマイトを持ち出して対抗した。

## 036 大正デモクラシー



第三十六

大正デモクラシー

一

一九一八年七月二十三日に富山県魚津に端を発した米騒動は、八月十二日、神戸市に飛び火した。三菱造船所の労働者八千人が蜂起し、鉄棒やレンガを使って工場の購買部倉庫を破り、機械装置などを破壊したのだ。夜になると市民三万人が加わり、いったん湊川公園に集まったあと、鈴木商店の打ちこわしに走った。

鈴木商店は後藤新平と親密な関係にあつて、台湾の利権でのしあがった。米七十一万俵を輸出し巨利を得たほか、寺内内閣では外米、朝鮮米の買付け指定商人となっていた。こうしたことから、市民が「米商人」として思い浮かべる筆頭にあつた。

「報知新聞」の特派記者として米騒動の様子を取材していた新聞記者がいた。その記者の名は鈴木茂三郎といった。一八九三年（明治二十六）、愛知県蒲郡の貧しい人力車夫の家に生まれた。一九二二年（明治四十五）に東京に出て、

人力車製造業で小僧として働き、働きながら早稲田を出て新聞社に入った。

その取材遍歴がすごい。

ロシア革命（一九一七年）

米騒動、シベリア出兵（一九一八年）

朝鮮万歳事件（一九一九年）

原敬暗殺（一九二二年）

日本共産党結成（一九二二年）

関東大震災（一九二三年）

治安維持法公布（一九二五年）

金融恐慌（一九二七年）

初の衆議院議員普通選挙（一九二八年）

と、二十世紀初頭の大事件にことごとく関わっている。

鈴木的能力ばかりでなく、記者の数が限られていて、一人で何役もこなさなければならなかった、ということである。であるにしても、大正期の激動に立ち会った伝説の人物であることに違いない。

第二次大戦後、一九四六年に衆議院議員となり、一九五一年から五九年まで日本社会党委員長を務めた。

その鈴木が、神戸騒動の模様を書き残している。

栄町四丁目の鈴木商店の元本宅が焼かれ、細民をいじめ

つけていた貸家管理所の兵神館、鈴木 of 兵庫精米所が焼かれ、鈴木 of 代弁新聞「神戸新聞」の三層楼が焼け落ちた。

群集は、建物の前を遠くからこんで、石を投げつけている。するとガラランとガラスが破れて落ちる。電灯が消える。二つ三つの黒いかたまりが鉄砲玉のように飛び込んだと見るまに、なから格闘らしい雄叫びの声が聞える。

「やれッ、やれッ」

と群集がどなり合う。まもなく建物のなから真赤になつて燃え上がった。

十三日になつて兵庫県知事は陸軍姫路師団に出動を要請かつ警官に「抜剣差支えなし」の許可を出した。斬つてもいい、というのである。

暴徒と化した民衆と警官・歩兵隊との衝突は十四日になつても収まらなかつた。県当局は遂に市民に外出禁止令を出すとともに、軍隊の増派を要請した。警察、軍隊との衝突による死者は、確認されただけで四名を数えた。

以後、八月十三日・大阪、十四日・東京と続き、十七日に山口県宇部で発生した騒動で、鎮圧に出動した軍隊がついに実弾を発砲した。死者十三、重傷十五を出し、十七日から二十日夜に起こつた静岡の暴動では死者二、負傷数十

名が出た。

宇部の騒動については次のような記録が残っている。

坑夫軍のほうでは「日本軍が日本人を撃つわけがない」といつて突進した。両軍の先頭どうしの距離わずか一間。実に息つまるような光景であつた。坑夫軍の正當かつ正直すぎる確信にもかかわらず、軍隊は実砲をぶつ放した。

一間、つまり二メートル足らずの至近距離から実弾を发射されてはたまらない。死者十三、重傷十五が出た。文面以上に阿鼻叫喚の光景が展開されたに違いない。朝鮮でも、もう一つの米騒動が起こつていた。

大日本帝国政府は日本国内での米不足や陸軍の食料調達需要を満たすため、朝鮮で「産米増殖計画」を推進し、半島南部の農村部に多額の資金を投下して土地改良や農業技術教育などを行つた。

その結果、朝鮮における米の生産量は大幅に伸びた。にもかかわらず、大半が日本列島に運ばれて行つた。これが反日感情を刺激し、抗日独立運動につながっていく。大日本帝国政府は国内における批判勢力や朝鮮独立運動に対して共通に軍事的武力圧力で鎮圧することになった。

かつての新左翼風にいうと

——権力がその本性をむき出しにした。  
ということになろうか。

市民運動を力でねじ伏せたという意味で、米騒動は、市民生活に官憲と軍隊の圧力を強めるきっかけになったともいえる。

## 二

「大正」という年号は、明治天皇の代が長かったこともあって、わずか十五年（実際には十四年と五か月）しかない。一九一二年七月三十日に明治天皇が薨去したのに伴って皇太子・嘉仁王が踐祚したのだが、即位はそれから三年四か月ののち、一九一五年十一月十日までできなかった。

しかも翌年十一月には、皇后節子との間に誕生した廸宮（みちのみや）十六歳をもって皇太子（このとき名を「裕仁」と改めた）とし、二二年十一月、病を理由に皇太子を摂政に任じた。

まず前例がない。

大正天皇の即位がずっとあとだったのは、「明治大帝の諒闇」（服喪）のためであったとされている。だがそれは表向きの理由に過ぎない。明治天皇が即位したのは孝明天皇薨去から二年後の一八六八年八月二十八日だったし、昭

和天皇の即位も踐祚から二年後の一九二八年十一月十日だった。

嘉仁王が即位の式典を三年四か月も待たされたのは、「大正政変」と呼ばれる平和的クーデターが起こっていたためであった。それは、政党と軍部の駆け引きのかたちで展開された。

明治末の十余年は、桂太郎と西園寺公望が交互に政権を担った。

- ・一九〇一年六月二日—〇五年十二月二十一日 桂太郎。
- ・一九〇六年一月七日—〇八年七月四日 西園寺公望。
- ・一九〇八年七月十四日—一一年八月二十五日 桂。
- ・一九一一年八月三十日—一二年十二月五日 西園寺。
- ・一九一二年十二月二十一日—一三年二月十一日 桂。

桂太郎は弘化四年（一八四七）長州に生まれ、幼名を「寿熊」といった。「寿熊」は「ながくま」と訓む。

文久三年（一八六三）、高杉晋作の下で馬関戦争に従軍し、明治に入ってドイツに留学した。帰国して陸軍大尉、のち参謀本部でドイツ兵制に準拠した軍令・軍政を整え、陸軍次官として山県有朋、大山巖（いわお）を補佐した。なかなか憎めなかった人であつたらしい。

三省堂『日本人名辞典』には、

巧妙な人心収攬策はその肥満福相とあいまって（ニコボン内閣）とあだなされ、官僚と政党内、大ブルジョア間の橋渡しを果たした。

とある。

笑顔で「頼むよ」、ポンツと肩を叩かれると、反対派も懐柔された、ということであろう。一九一三年十月没。

一方の西園寺公望は嘉永二年（一八四九）、九清華家の一である徳大寺公純の次男に生まれ、西園寺家の養子となった。フランスのソルボンヌ大学に学び、維新政府では参与。一八七一年に再びフランスへ渡り、このとき中江兆民と親しく交わった。

八一年に帰国して明治法律学校（のちの明治大学）を創設し、同じ年に「東洋自由新聞」を興した。第二次、第三次伊藤博文内閣で文相、一九〇〇年政友会創立に参加し〇三年総裁。一九四〇年十一月に没し、国葬が執り行なわれた。

コトは第二次西園寺内閣の一九一二年十二月二日に起こった。

かねて陸軍が強く要求していた二個師団増設の案件を、

議会が否決した。このため、陸軍大臣・上原勇作が辞表を提出したのである。

西園寺は事態の收拾を図ろうとしたが後任大臣が決まらなかったために瓦解し、陸軍は内大臣に退いていた桂を起用した。

陸軍の師団増設には、財界が反対だった。

東京の新聞・雑誌記者が「憲政策振会」を結成して、師団増設反対のキャンペーンを張り、桂が第三次内閣を足させる二日前には第一回の憲政擁護大会が東京・歌舞伎座で開かれた。

翌一月十七日、全国記者大会が催され、ここで「憲政擁護・閥族掃蕩」が決議され、同月二十四日の第二回憲政擁護大会を経て二月十日、議会を数千の民衆が包囲して暴徒化した。

彼らは警官隊と衝突したばかりでなく、当たるを幸いに騎虎の勢いで新聞社や交番を襲撃した。一九〇五年九月五日に発生した日比谷焼き討ち事件が再現された。この動きは大阪、神戸、広島、京都などにも広がり、このために桂は総辞職に追い込まれた。

民衆の力が内閣を倒したという意味から、「大正デモクラシー」を象徴する事件とされている。

だが果たして、真のデモクラシーであったかどうか。

三

憲法擁護運動は米騒動が起る五年前の出来事だが、民衆が集団をなして暴徒化し、これがたちまち全国に波及するところなど、共通するところが少なくない。憲法擁護の集會は大阪、香川、福島、宮城、岩手など全国で開かれていたから、火の手が上がるのも早かった。

しかしこの運動が純粹に民衆によつて起こされたかという、甚だ疑問が残っている。

そもその発端は陸軍が要求した師団増設問題であつて、それに反対だったのは財界であつた。特に三井財閥は交詢社を中核に桂内閣の打倒と元老の排除を決意し、新聞記者と政党政治家を動員して一大キャンペーンを展開した。

第一回憲法擁護大会では、

閥族の横暴跋扈今や其極に達し憲政の危機目睫に迫る。吾人は断固妥協を排して閥族政治を根絶し、以て憲政を擁護せんことを期す。

という声明を決議した。だが実態としてその内容は、交詢社の意思を反映したものだつた。

大久保利通の孫で候爵・貴族院議員でもあつた大久保利謙は、

——ブルジョアジーと政党が手を結んだ同盟戦線の成果にはかならない。

と厳しく断じている。

桂に代わつて政權の座に就いたのは薩州閥を背景にした海軍の山本権兵衛で、政友会を味方に取り込むことに成功した。陸軍はすぐさま反撃を開始した。翌一四年二月二十三日、横浜毎日新聞の創業者で立憲同志会の議員である島田三郎をして、ドイツのシーメンス社が海軍高官に贈賄していた事実を暴露、次いでイギリスのニッカーズ社および三井物産と海軍との癒着を攻撃した。

三井物産ならびに交詢社、政友会はここで防戦に回らず、山本内閣と物産役員を犠牲にしてなお憲法擁護運動を盛り上げた。結果としてライバル政党であつた立憲同志会（一九一五年十月「憲政会」に改称）に政權は譲つたものの、旧藩閥、軍閥の抑制に成功した。

山本権兵衛のあとを受けて首相に就任した大隈重信は、多分に帝国主義的色彩の強い思想の持ち主であつて、三菱財閥との関係が強かつた。しかし第一次大戦で対独宣戦を布告した手前、連合国軍が一樣に標榜する「デモクラシー」に賛同せざるを得なかつた。

こうした状況の下で、一九一六年（大正五）、東大教授の吉野作造が、雑誌『中央公論』一月号に長論文「憲政の本義を説いて其有終の美の済すの途を論ず」を発表した。

彼は第一次大戦直前のヨーロッパ留学で得た体験をもとに、「政治とは、一般民衆の利福を目的としなければならぬ」「政策の決定には一般民衆の意向を反映しなければならぬ」と説いた。

これに対して社会主義者の山川均が

——吉野論文は主権の所在を曖昧にしている。と指摘し、批判した。

今日の視点に立てば当然の批判であった。

だが吉野論文は、封建的制度や慣行を平和裏に、かつ積極的に改革する現実的な思想としてインテリゲンチヤに広く受け入れられた。資本家と政党と軍部が利権をめぐって三つ巴で足を引っ張り合う際の道具として使われてきた「デモクラシー」は、ここにおいて初めて思想的骨格を与えられることになった。

真つ先に反応したのは学生たちだった。東京帝国大学の進歩的學生が「新人会」を結成して社会改造運動をスタートさせたのははじめ、早稲田大学で「民人同盟」「建設者同盟」が発足し、これがのちの学生運動につながったほか、第一次大戦をきっかけとする空前の好況に反して一向に改

善されない就労環境への意識改革を促した。

労働組合の結成とストライキの多発と並行して、吉野が唱えた「民本主義」は農民運動とも結びつき、テーマは政治改革から社会問題に広がった。鈴木文治が結成した労働者組織「友愛会」は、労働者の品性・教養を高めることで労使の協調を訴え、資本家は労働問題の「安全弁」としてこれを歓迎した。

その友愛会の思想的骨格をなしたのは、賀川豊彦である。一九一七年にアメリカ留学から帰国し、神戸の貧民窟に入ってキリスト教の伝道をしている中で鈴木文治と知り合った。一九二〇年（大正九）に刊行した『死線を越えて』がベストセラーとなり、以後、友愛会の指導的地位にあった。しかし第一次大戦後の不況が、労使協調路線を変えた。

一九二一年に神戸で起こった三菱内燃機工場および、川崎造船所、神戸三菱造船所、三菱電機工場のストライキで、労働者を暴力団が襲撃して数十人の負傷者を出し、さらに歩兵二個大隊と水兵二百人、憲兵数十人が出動するに及んで、労働組合は闘争的組織に変質していく。

軍隊が出動し実弾を発砲するというのは、一九一九年三月一日から三か月にわたって繰り広げられた朝鮮半島における抗日・反日暴動（三・一独立運動）と無縁ではない。政府は日本人であろうと朝鮮人であろうと、抵抗を強く示

す者たちを武力で沈黙させる手法を採用したのだ。

この手法は最初は「止むを得ない措置」として実行されたかもしれないが、やがて政府や軍の常套手段となり、そのうち手段でなく体質になっていく。

一方、人道的見地から貧困問題に取り組んだ河上肇は「大阪毎日新聞」に連載した『貧乏物語』でマルクス主義的唯物史観を提示し、農本主義の立場から大地主と小作の問題を論じるうち、マルキシズムを鮮明に打ち出すようになる。

## 補 注

山本権兵衛 やまもと・ごんべえ／1852～1933。薩摩（鹿児島県）に生まれ、一八七四年にドイツ戦艦で世界一周を果たした。九〇年「高千穂」艦長となり日清戦争に従軍、一八九八年第二次桂太郎内閣で外相、日露戦争では戦争回避論を唱えた。一九一三年首相、二三年に二度目の首相に就任し外相を兼務したがアーキストの難波大助が起こした皇太子狙撃事件の責任を負って辞任した。伯爵。

島田三郎 しまだ・さぶろう／1852～1923。江戸（東京都）に生まれ、昌平黌に学んだ。一八七四年（明治七年）「横浜毎日新聞」を興し、主筆として活躍した。一八八一年大隈重信らと立憲改進黨を結成し、九〇年から連続十四回、国会議員を務めた。雄弁家であつて、あだ名は「鈴木しゃべ郎」だった。足尾鉾山鉾毒事件の被害者を支援するなど社会活動家でもあつた。

大久保利謙 おおくほ・としあき／1900～1995。大久保利通の孫で貴族院議員を務めた。母方の祖父は日清汽船、日本郵船の社長を務めた近藤廉平（1848～1921）。

交詢社 こうじゅんしゃ・一八八〇年、福沢諭吉の提唱で結成された社交機関で、その目的は「知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スル」とある。創立当初から學術研究者、官吏、商業・農業など広範な分野の会員が参加した。慶応義塾大学卒業生が多く就職した三井財閥との関係が強まった。

吉野造 よしの・さくぞう／1878～1933。宮城県に生まれ、東京帝国大学を出て清王朝に招かれ政治機構の近代化を指

導した。帰国後、東京帝大助教授、一九一四年教授。「中央公論」を中心に文筆活動を展開した。

山川 均 やまかわ・ひとし／1880～1958。岡山県に生まれ、同志社大学中退後、上京して雑誌「生年の福音」を創刊した。一九〇六年「日本社会党」の結成に参加し、「平民新聞」を創刊した。一九一六年、堺利彦などと雑誌「新社会」を創刊、一八八一年に荒畑寒村（1887～1981）と「労働組合研究会」を発足、二〇年「日本社会主義同盟」に参加するなどボルシェビズムに傾いた。二三年「共産党」（第一次）に参加、二三年に逮捕・起訴され、「思想的危険人物」のレッテルを貼られた。第二次大戦後は社会党左派の思想的指導者となった。

鈴木文治 すずき・ぶんじ／1885～1946。宮城県に生まれ、東京帝国大学を出て出版社「秀英社」をへて「東京朝日新聞」に勤めた。一九一一年（明治四十四）ユニテリアン教会の社会事業部長となり、労働者を対象にした共済事業組織「友愛会」を結成した。これが一九年の「日本労働総同盟友愛会」を経て二一年「日本労働総同盟」に発展した。第二次大戦後は反共主義の立場で労働運動を指導したが、四六年の第一回総選挙の遊説中、仙台で没した。

賀川豊彦 かがわ・とよひこ／1888～1960。兵庫県に生まれ、アメリカ・プリンストン大学を出て一九一七年に帰国した。中学時代にキリスト教の洗礼を受け路傍伝道を行うなど宗教者としての体験から、帰国後も神戸の貧民窟で無料の巡回診療を行った。友愛会に参加し、一九一九年発足の「関西労働同盟」で理事長、川崎・三菱神戸造船所の労働争議を指導した。第二次大戦後、勅選議員となり、日本社会党の結成に参加した。川崎・三菱



神戸造船所の労働争議のとき、労働組合と関西労働同盟事務局の間をつなぐ連絡係を大宅壮一が務めていたという逸話もある。

河上 肇 かわかみ・はじめ／1879～1946。山口県に生まれ、東京帝国大学を出て農科大学（のち東京大学農学部）や学習院講師となった。一九〇五年（明治三十八）に発表した論文「社会主義評論」（ペンネーム「千山万水楼主人」）で論壇にデビューし、田口卯吉の自由貿易論に対して保護貿易論を展開した。『貧乏物語』はヨーロッパ留学から帰国し京都帝国大学教授だったとき、「大阪朝日新聞」に連載したものだ。

## 037 女性は太陽

第三十七

女性は太陽

一

大正デモクラシーを彩取ったのは、女性の社会進出だった。

男子による相伝が社会契約の了解となったのは十二世紀から十三世紀にかけてであって、長い人類の歴史にあつてはぐっと近世のことである。

女性は実名を残してはいないだけであつて、起居を差配し、文芸を創作し、家督の継承を左右した。

女性が表立つて活躍した時代は歴史が動いたときである。例えば飛鳥・大和における推古、皇極、斉明、持統、元明、元正の歴代女帝をはじめ、橘大郎女、額田王、蘇我倉山田石川麻呂、平城京における藤原光明子、橘三千代、阿部内親王、藤原薬子などがある。

戦国乱世の終局には、信長にあつて道三の一人娘・帰蝶、秀吉にあつて木下寧々、あるいは信長の妹・市の忘れ形見である茶々、徳川家康にあつて瀬名姫あるいは阿茶、前田

利家にあつて松などの名前を挙げるができる。

二十世紀に入つて女性の意識を変革した法制度は、おそらく普通選挙法であろう。選挙に際して財産・納税額・身分・教育・信仰や教養などによって制限を設けず、一定の年齢に達した者全員が平等に選挙権・被選挙権を有するという、こんにちの目からすると至極当然のことが明治末期から大正にかけては国家の大事として議論された。

衆議院議員選挙法の第五条に

①帝国臣民タル男子ニシテ年齢二十五年以上ノ者ハ選挙権ヲ有ス。

②帝国臣民タル男子ニシテ年齢三十年以上ノ者ハ被選挙権ヲ有ス。

と明記されたのは一九二五年のことだが、女性はその対象から外されていた。しかしそうであればこそ、女性たちはより強く自身の拠つて立つ場所を求めた。

われわれは前節でその実態をすでに見た。

米の高騰に立ち上がったのは、まず主婦たちであつた。

——米を安く売れ。

と迫る「女軍」に

——うちは商売やけん、売るも売らぬも勝手じゃろう。

と言いつ返したのも米屋の女房だった。

彼女たちにとって毎日の食事と子どもの養育は他に代えることができない大きな至上命令だった。中には米や野菜の入手に悩み果て、真冬というのに襟元をはだけ、冷水を浴びる母親まで出た。土饅頭を茶碗に盛って子どもに食べさせようとした女房もいた。精神に異常をきたすほどに死に物狂いであつたといつていい。

都市で暮らす女性にも意識の変化が起つていた。表面的な装いに限つたことではあつたにせよ、封建的な制度や慣習からの離脱を象徴してゐたといつていい。全国的にみれば大半が長髪を髷に束ね和装で下駄であつた中で、銀座の街を歩く女性の九九%までが断髪で洋装・革靴だつたといふ調査が、端的にそのことを物語つてゐる。

## 二

都会で暮らす若い女性の洋装化が一般的になつたということは、彼女たちが生む次の世代は最初から洋装で育つことを意味してゐた。一九二四年（大正十三）に文化服装学院、二六年にドレスメーカー女学院が創立されたのは、こうした状況を背景にしている。あるいは女性化粧品の資生堂が業績を伸ばし、『婦人倶楽部』『主婦之友』といった雑

誌が創刊された。

都市部では江戸以来「呉服店」を名乗つてゐた三越や松屋などが「百貨店」に姿を変え、カフエーやバーが誕生し、レビユーや少女歌劇が大流行した。「モダン」「ハイカラ」といふ言葉は、すなわち底辺で女性の解放と結びついてゐた。

この下地となつたのは、明治政府が外貨を稼ぐために奨励した紡績業の振興にあつた。そこで働いた女性たちは『女工哀史』が示すように、すべてが恵まれた環境にあつたわけではなかつた（片や個室を与え学問を受けさせ婚禮道具を持たせて送り出した紡績工場もあつた）が、女性が働くことで賃金を得るといふ社会的認識を定着せしめたことは間違いない。

それまでの家父長制の中での女性は、家庭に入つて炊事洗濯育児に従事し、舅・姑に仕え、夫に従う家庭内労働力としてしか、その存在価値を認められなかつた。ところが都市の発展が女性に職場を与え、その女性たちが都市の消費経済を支える構図が形成され始めた。

男が兵役に取られたので、電話交換や郵便配達、車掌、外交員、事務員、販売員、教員、記者などに女性が起用された。美容、洋裁、看護、タイピストなど女性ならではの仕事も発生した。のちに記すパンチカード式計算機の利用

においても、主に女性がカードパンチの仕事に従事した。こうした社会の動きを背景にしている。

さらに高等女学校への進学率が高まり、女性の知的欲求が刺激された。一九一八年（大正七）に東京女子大学が開校し、北海道帝国大学が初めて女子の入学を認めている。ただ、こうした動きは個々に展開されていて、女性の意識改革を定義し方向性を示す思想的骨格は用意されていなかった。

ここに三角錫子という女性が鎌倉女学校で教鞭を執っていた。

一八七二年（明治五）、石川県金沢の生まれというから、このとき三十八歳であった。女子高等師範学校（のち御茶ノ水女子大）を出た才媛であって、のち一九一六年、常磐松女学校（のちトキワ松学園）を設立した人物である。

その年の一月二十三日、逗子開成中学校（のち逗子開成学園）の生徒十二名が乗ったボート「箱根号」が、鎌倉七里が浜の沖合いで転覆した。学校に届出をしていなかったために、遭難の事実が判明するのに時間がかかった。

波間に浮かんでいた乗船者の一人、木下三郎を通りかかった漁船が救助し、小坪港に運んだ。彼は間もなく息を引取ったが、その末期の言葉から初めて事実が知られた。

小坪の昌平寺に救援本部が設置され、葉山警察署逗子駐在所、鎌倉警察署らが捜索活動を始め、横須賀警察や地元の多数の漁夫も捜索に加わった。しかし遭難者を発見することはできなかった。翌二十四日には横須賀鎮守府から駆逐艦も派遣されたものの、何も発見されなかった。

二十五日の午後になって行合川の沖約二キロの波の底に、徳田勝治が弟の武三を両腕にしっかり抱き、小学生だった末弟が兄の首にまわりついて横たわっているのが引き上げられ、その近くからさらに二遺体が発見された。北風が強まり、雪と濃霧で捜索は難航したが、天候が回復した二十七日、遭難から数えて五日にして全員が遺体で収容された。

事故から十五日後の二月六日は日曜日だった。

逗子開成中学校の校庭で行われた合同慰霊祭で鎌倉女学校の生徒達が鎮魂を歌った。三角錫子がジェレマイア・インガルス（のち「真白き富士の根」の詩を添えた。由来は忘れられつつあるが、その曲と詩の美しさがいまなお歌い継がれている）。

### 三

もう一人、奥村明という女性がいた。「明」は「はる」

と訓む。ただし「奥村」の姓は洋画家・奥村博の伴侶となつた一九四一年からの名乗りで、生家の姓は「平塚」である。

のち、「平塚らいてう」のペンネームで知られる。

一八八六年（明治十九）、東京に生まれた。父・定次郎は会計検査院の官吏だった。一九〇六年（明治三十九）、日本女子大を卒業したが、併せて津田英学塾に通い、国文学、哲学、宗教、英語、英文学になみなみならぬ才能を示した。五年後の一九一一年九月、日本女子大の同窓生四人と同人芸誌『青踏』を創刊した。

その創刊の辞に彼女は

「元始女性は大陽であつた」と書いた。

この言葉から筆者などは邪馬台国の女王卑弥呼を連想するのだが、彼女がこう書いた由来も、あるいはそうであつたかもしれない。自身、才能と能力にあふれ、自ら以て「新しい女性」を認じていた。

女子大を卒業した年の冬、東京帝大卒の小説家森田草平と駆け落ちし、那須塩原の尾頭峠に逃げた。当時、森田はすでに「夏目漱石の弟子」として知られていた。

——新進気鋭の小説家が、女子大を出たばかりの良家の子女と心中に走った。

マスコミにとつてはこのうえない好餌だった。平塚らいてうを語るとき、この「塩原事件」が必ず引き合いに出されるのは、のちの森田に対するらいてうの態度によっている。

森田は一九〇九年、逃避行の様子を小説『煤煙』として発表した。これが好評となつて、長編『自叙伝』をものし、戯曲『袈裟御前』などで作家の座を確定した。これに対して彼女は臆することなく所信を述べ、自分との恋愛事情を小説と称して暴露した行為を痛烈に批判した。その批判が彼女の名声を高めた、ともいえる。

青踏社は自我と自立の意識ある女性や女性解放の賛同者から熱烈な支持を受けた。この結社が支持を得たのには与謝野晶子や長谷川時雨が参集したことが要因として挙げられる。のち、市川房枝、奥むめお、高群逸枝といった女性解放運動家を育て、女性の社会的地位向上を果たすべく、治安警察法改正など法制度の改革に尽力した。

青踏社に参加した女流作家のことを忘れることができない。

まず記すべきは小手川ヤエである。

一八八五年（明治十八）の六月、大分県臼杵市の造り酒屋の長女に生まれ、一九〇〇年（明治三十三年）に上京して明治女学院に学んだ。二年後、同郷の野上豊一郎が一高に

入学してより以後、豊一郎を介して寺田寅彦、夏目漱石の知己を得た。女学院を卒後、ロンドン留学から帰国した豊一郎と結婚して姓を「野上」に改め、〇七年に漱石の紹介で『ホトギス』に短編『縁』『七夕のま』を発表した。

「野上弥生子」のペンネームで知られる彼女の白眉は、一九二二年に発表した『海神丸』であらう。

漁船が時化にあい、漂流する。飲み水もなく、食糧が絶え、死んだ僚友の肉を食べて生き残った漁師の話を、骨太に描く。おそらく男であれば、あままで簡潔には描けまい。そこには夫豊一郎とともに探究した能の美学が潜んでいる。女性趣味的なロマンティズムを拒否し、荒々しい人生を直視した筆致もまた、大正の精神であったかもしれない。

ちなみに野上豊一郎は東大卒後、九州帝国大学教授を経て法政大学教授、四十六年学長、四十七年総長に就任し、五〇年二月に六十六歳で没した。妻・ヤエは長寿を得て、百歳まで一と月余を残して他界。

野上弥生子と入れ替わりに青鞥社に加わった奥むめおは、父親の教育姿勢を『野火あかあかと』に次のように書き残している。

がんこな父だったが、わたしに女だから勉強しなくともよいとはひとことも言わなかった。

「東京では女ばかりで立派な本を出している者たちもいる。頭がよければ文学者にだってなれるし、器量が良けりゃ女優にだってなれる。ムメオがもう少し美人だったら女優にでもするのだがなあ」とも言っていた。

貧しい行商人の家に生まれ、定まった家もなく、旅の空で住み暮らす中からも、女流作家が誕生した。野上にやや遅れて文壇に登場した林芙美子である。

明晰な頭脳をもつて尾道高女を卒業した彼女は、貧困の中で創作に打ち込み、長谷川時雨の目に止まった。女性による女性のための『女人芸術』に掲載した小説『放浪記』がベストセラーとなった。暗い人生経験を日記体で記した小説が文学として評価される時代でもあった。

この章で筆者は、政治や経済や文化が、初めて大衆によって動かされた時代を描こうと考えた。政治や経済や文化は、かみよのかみから十九世紀末まで一貫して、一部の特権階級に属する人々のものであった。彼らは大衆を常に、「無知蒙昧である」と規定することから出発し、また大衆も無知蒙昧でいるほうが楽であることを知っていた。

それが大正デモクラシーで変わった。「大衆の時代」が到来した。このことは、本書のテーマとは直接の関係を持

たないが、多くの読者は、「大衆の時代」が計算機を需要を顕在化したことを知っている。その端緒がこの時代にあった。

もう一つ、この時代は、次の歌どもにとどめられる伸びやかな精神を残した。

清水へ祇園をよぎる桜月夜

こよひ逢ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血汐にふれも見で

さみしからずや道を説くきみ

あるいは次の詩は、当時の男性から発されることがなかった。

あゝをとうとよ 君を泣く

君死にたまふこと勿れ

末に生まれし君なれば

親のなさはまさりしも

親は刃（やいば）をにぎらせて

人を殺せとをしへしや

人を殺して死ねよとて

廿四までをそだてしや

与謝野晶子がこう謳った精神のことを、この節で書いた。



## ~~~~~ 補 注 ~~~~~

起居 ききよ…中華帝国における皇帝の日常生活の場。皇帝への面談（拝謁）が公式に認められない場合、起居の差配者や妃の側近者を介して私的に情報を提供したり文書を手交するなど、政治的な場として使われるようになった。

橘大郎女 たちばなノおおいらつめ／生没年未詳。万葉仮名の表記では「多至波奈大郎女」。敏達Ⅱ推古天皇の孫で厩戸王（いわゆる「聖徳太子」）の妃。厩戸王の没後、「天寿国曼荼羅繡帳」を作ったとされる。

額田王 ぬかたノおおきみ／生没年未詳。大海人王の妃となり、次いで葛城大王（天智天皇）の妃となった。万葉集を代表する女性歌人として知られるが、皇極朝から持統朝にかけて常に大王の傍にあった点で、決して装飾的な存在でなかったことがうかがわれる。

蘇我倉山田石川麻呂の娘で、中大兄王（のち葛城王…天智天皇）の妃となり、阿閉女王（元明天皇）を生んだ。

藤原光明子 ふじわらノこうみょうし／701～760。藤原不比等の娘で聖武天皇の皇后となった。母は橘三千代。藤原一族が天皇家の外戚として権力中枢を占めるきっかけとなった。悲田、施薬院などを創設した。聖武天皇没後は皇太后として発言権を増し「中台天平眞仁正皇太后」の尊号が贈られている。

橘三千代 たちはなノみちよ／？～733。県犬養氏の出自で美

努王の妻となり橘諸兄を生んだ。のち藤原不比等の妻となり安宿媛を生んだ。安宿媛が首皇子に嫁いで皇后（光明皇后）となるに及んで「大夫人」の地位を得た。

阿部内親王 あべないしんのう／717～770。聖武天皇の娘で七四九年即位して孝謙天皇、のち七六四年重祚して称徳天皇。重祚後は道鏡を重任し藤原一族をはじめとする官僚貴族の反発を買った。

藤原薬子 ふじわらノくすこ／？～810。藤原種継の娘で平城天皇の寵愛を得て権勢を握り、兄の仲成と共に謀して平城旧都への遷都を図った。八一〇年官位を剥奪されるに及んで平城上皇とともに東国に向かい兵を起こそうとしたが失敗し服毒した。

帰蝶 きちよう／1535～1612？「胡蝶」のほか、「濃姫」（美濃の姫「鷺山殿」（父・斎藤道三の鷺山城にちなむ）「安土殿」（安土城にちなむ）とも。斉藤道三の娘で織田信長に嫁いだ。尾張・美濃の連合を図ったが道三の後を継いだ斉藤龍興（さいとう・たつおき／1548～1573）に見切りをつけ、ついに美濃を織田家が制圧する画策に協力した。

本能寺で明智光秀軍と戦い信長とともに自刃したとされるのは後世の創作であって、天正十七年（一五八七）、織田信雄家中における高位な女性「あつち殿」、安土惣見寺蔵「泰厳相公縁会名簿」鷺山殿に「養華院殿要津妙玄大姉 慶長十七年壬子七月九日 信長公御台」と記されている。慶長十七年は一六二二年に当たる。

寧々 ねね／1548～1624。尾張織田氏の下級武士杉原家の娘として生まれ、木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）に嫁いだ。秀吉の出世とともに発言権を持つようになった。子がなかったため、秀吉没（大阪城から退き京都の高台院に遁塞した。しかし秀吉子

飼いの郎党への影響力は絶大で、徳川家康は彼女の支持を取り付けるのに大変な努力をした。正夫人を意味する「北政所」、隠居地の名を取って「高台院」の異称がある。

市 いち／1547～1583。織田信秀の娘、信長の妹。東海一の美貌とうたわれ一五六三年近江浅井長政に嫁ぎ、茶々姫ら二男三女を生んだ。八二年越前柴田勝家に嫁いだが翌年秀吉軍が越前北の庄に攻め入ったとき勝家とともに自刃した。

茶々 ちゃちゃ／1567～1615。幼名は別に「野々」ともいう。秀吉の側室となり淀城に住んだので「淀君」と称された。一五九三年秀頼を生んだことから実権を握り、大阪城落城・豊臣家滅亡の原因を作った。

瀬名姫 せな・ひめ／？～1579。「築山殿」の異称がある。駿河今川氏の家臣関口家の出自で松平元信（のちの徳川家康）の正室となった。家康が岡崎に自立後、信長から甲斐武田氏に内通している嫌疑をかけられ、家康は抗しきれず殺害した。

阿茶 あちゃ／1555～1637。武田信玄の家臣飯田久右衛門の娘で今川氏家臣神尾弥兵衛に嫁いだ。一五八八年徳川家康の側室となり大阪夏の陣で徳川方使者を務めた。のち一位の位を受け「一位の尼」と異称された。「二位の尼」と異称された。

松 まつ／1547～1617。一五八八前田利家に嫁ぎ、秀吉による柴田攻めのとき夫利家に代わって秀吉との和睦に臨んだ。秀吉没後、徳川家からかけられた嫌疑を晴らすため自ら進んで人質となり十五年間も江戸で暮らした。加賀前田家百万石の基礎を築いた女傑とされる。利家没後、落飾して「芳春院」。

資生堂 一八七二年（明治五）、福原有信（ふくはら・ありのぶ／1848～1924）が日本初の洋風調剤薬局「開陽院診療所」

として東京銀座に創業した。このとき併設して「薬局資生堂」を開いたのが起りである。福原は海軍病院藥局長だったときに得た西洋の知識をもとに、医薬分業を実践した。資生堂の名称は中国古典『易経』の一節「至哉坤元万物資生」に由来する。この福原から大日本製薬、内国製薬、帝國生命保險が誕生した。

女工哀史 一九二五年、細井和喜蔵著。日清・日露戦争後、工場労働者の需要が急増した結果、貧農出身の若年女性が工員として採用された。女工は全工場労働者の六割を占めたといわれる。彼女たちは低賃金、苛酷な労働条件、粗末な寄宿施設と食事、罰金制度や強制貯金といった過酷な環境で労働に従事した。その実態を赤裸々に描写し、のちの労働条件改善運動の象徴となった。

日本女子大の同窓生四人 保持研子、中野初子、木内錠子、物集和子。

保持研子（やすもち・よしこ／1885～1947）は俳人として活躍した。

木内錠子（きうち・ていこ／1887～1919）は雑誌『婦人世界』記者だった。

物集和子（もずめ・かずこ／1888～1979）は二葉亭四迷、夏目漱石の指導を受け小説を発表した。

青踏 この名の由来には二つの説がある。一つは俳句の春の季語「青き踏む」で、新緑にあふれた春の野を歩くことを指す。「女性にとって冬の時代は終った」という意味が込められているという。

もう一つはヨーロッパで流行していた女性用靴下「ブルー・ストッキング」を直訳したとする説である。鹿鳴館時代に貴婦人たちが着用し、そもそも男性の礼装だったブルー・ストッキングを女性が着用することをもって婦人解放の旗印にした、という。

「面説とも一定の説得力があるが、平塚らいてうはブルー・ストッキングから「青踏」の名を思いつき、これに与謝野晶子が俳句の季語の意味を重ねたものらしい。

**青踏社の参加者** このとき与謝野晶子はすでに歌壇で名を成しており、平塚らいてうは三顧の礼をもって青踏社への参加を要請した。晶子をはじめ平塚の申し出を辞退することも考えたが、「女性の自立」という平塚の言葉に動かされた。雑誌『青踏』創刊号には、晶子の文章が冒頭を飾っていた。

**森田草平** もりた・そうへい／1881～1949。本名は「米松」といった。与謝野鉄幹が主宰する女子学生向けの「閨秀文学講座」で講師を務めたとき、平塚明と知り合った。

**与謝野晶子** よさの・あきこ／1887～1942。旧姓は「鳳」本名は「志よう」といった。「与謝野」姓は夫・鉄幹（本名「寛」1873～1935）の父・礼蔵（れいごん／1823～1898）が京都府与謝郡の出身に由来する。「志よう」は「晶」の音（し）ようで、それを筆名とした。歌人としてデビューした当初は「鳳晶子」の名だった。政治評論もしばしば行い、シベリア出兵については「日本の領土的野心を猜疑され、日露戦争の外債による国民生活の疲弊を再び起こす」、教育改革では「各府県市町村に民選の教育委員を設けること」を提案した。

**長谷川時雨** はせがわ・しぐれ／1879～1941。本名は「やす」（康子という説もある）といった。嫁ぎ先の「水橋」を名乗ったこともある。劇作家として活動し、一九二三年、女性による女性のための文芸誌『女人芸術』を発刊、のちタブロイド判新聞形式の機関紙『輝く』を創刊した。

**市川房枝** いちかわ・ふさえ／1893～1981。一九一七年

名古屋新聞記者となり、一九一九年「新婦人協会」を平塚らいてう、奥むめおなどとともに設立、併せて女性の結社を禁ずる治安警察法の改定を求めた。婦人参政権運動を主導したが、日中戦争・太平洋戦争の期間、国政に協力して女性の政治的権利を獲得するべきとして第日本言論報国会に参加、四七年公職追放のち五三年の第三回参院選で当選した。

**奥むめお** 1895～1997。旧姓は「和田」、本名は「梅尾」で「むめお」と訓む。新婦人協会のと一九二三年に「職業婦人会」、二八年「婦人消費組合協会」を立ち上げた。一九四七年参院議員となり、四八年「主婦連合会」（主婦連）の会長に就任した。**高群逸枝** たかむれ・いつえ／1894～1964。本名はカタカナで「イツエ」といった。一九三〇年平塚らいてうらと無産婦人芸術連盟を結成し、『婦人戦線』を創刊した。女性運動の傍ら、『母系制の研究』『招婿婚の研究』などをまとめた。

**小説『海神丸』** 実際にあった遭難事件をもとに描いている。野上は第二次大戦後、事件の人物と面会し『後日物語』を書いた。**林芙美子** はやし・ふみこ／1903～1951。本名は「フミコ」といった。恵まれない家庭環境で、幼少期から少女期に下関、長崎、佐世保、鹿児島、直方と転々し、十四歳のときようやく尾道に落ち着いた。二十五歳のとき長谷川時雨が雑誌『女人芸術』に掲載した小説『放浪記』が世に出るきっかけとなった。尾道本通り商店街（通称「芙美子通り」）西口に、芙美子のブロンズ像がある。

**君死にたまふこと勿れ** 一九〇四年（明治三十七）雑誌『明星』掲載。日露戦争のとき、新妻を残して旅順包囲戦に招集された弟・鳳壽三郎に送った。

## 03 未剖篇

# 卷之五 變遷

038 国勢調査

039 能率増進

040 絡繰

041 世界へ

042 森村商事

043 水品と岩田

044 展示会

045 黒澤村

## 038 国勢調査

第三十八

国勢調査

一

やや時間をさかのぼる。

タイガー計算器が世に出る二十年ほど前、一八九二年のこと、国勢院の審査官だった高橋二郎は「人口調査電気機械の発明」と題した論文にまとめた。一八九〇年に行われた米合衆国人口調査にならって、我が国でも最新鋭の機械装置と近代統計学の手法を国勢調査に持ち込む必要があると訴えたものだった。これがホレリス式統計機械の有用性を紹介した、日本で最も早い論文であった。

次いで一八九五年九月、国際統計協会 (International Statistical Institute : ISI) から、

——一九〇〇年に行われる世界人口センサスに日本も参加しないか。

という働きかけがあった。

すでに官界を引退していた杉亨二はただちに行動を開始し、貴族院の知己に法律の整備を訴えた。翌年、貴族院が

ら「国勢調査ニ関スル建議」が提出され、衆議院で可決された。この順調であれば世界人口センサスに参加することも夢ではなく、そうなれば大日本帝国も世界の先進国に仲間入りすることができる。

ところが松方正義、伊藤博文、大隈重信、山県有朋、伊藤博文と短命内閣がめまぐるしく交代したことから、法律の審議が事実上停止してしまった。杉や高橋らが焦燥の思いで法律の成立を見守っていたことは想像に難くない。

世界人口センサスへの参加は見送られ、それから六年後の一九〇二年にいたってようやく「国勢調査ニ関スル法律」が成立した。

同法では、

「国勢調査は十年ごとに実施し、第一回は、明治三十八年に行う」

となっていた。ところが明治三十八年（一九〇五）は、折り悪く日露戦争の勃発で実施できなかった。その十年後の一九一五年も、第一次大戦で見送られた。

一九一七年、衆議院で「国勢調査施行ニ関スル建議」が可決された。翌年には国勢調査の経費が認められ、ここに第一回国勢調査へ実施体制が整った。実施の実務は国勢院に委ねられた。

このとき国勢院は

「実施は三年後とする」

と決定した。

同じ年に世界人口センサスが行われるのである。初期の計画から二十年遅れたことになるが、世界主要国入りを果たす意味は変わっていない。

このとき国勢院で、国勢調査の基本方針について若干の議論があった。

横山雅男を中心とするグループが

—— 経済調査を併せて実施すべきである。

と強く提案した。

これに対し、高橋は「もつともである」と一度は認めたが、最終的に

—— 人口調査に限定すべきである。

と、限定論を押し通した。

所得額や消費性向などを調べれば、経済政策の貴重な資料となることは分かっていた。だが、それよりも先に、初の国勢調査が円滑に実施され、その効用を政府諸機関に認知させることが、より重要だと高橋は考えていた。

国勢調査実施日をいつにするかについても、国勢院はさまざま配慮を払っている。

年末・年始は、諸取引の決算や、年賀の風習がある。日本海側や北海道では積雪が多く、調査をする時期としては

不適當である。

夏季は暑いため調査員に負荷がかかる。

そこで春か秋かだが、春は就職・就学、転勤などで人口の移動が多い。このために不適當とされ、降雪前の十月一日が選ばれた。

かくして第一回国勢調査は一九二〇年十月一日に実施されるのが正式に決まった。

そのことが伝わると世評は不信感や警戒心を訴えた。当時、国がすることに庶民は強い猜疑心を抱いていた。ことに米騒動のとき、警官がサーベルを抜き、騎馬の憲兵が群集を蹴散らし、ついに歩兵が実弾を発砲したことが尾を引いていた。

このため政府は市町村の名で全国にポスターを貼り出し、誤解を解き、調査の目的、申告の方法、調査する事柄などを周知させた。国勢調査はこうしたことにまで気を配らなければならなかった。

## 二

第一回国勢調査を前に、勅令が出た。

大正十年の勅令第二七二号「第一回国勢調査記念章制定ノ件」がそれである。

記念章は径一寸の青銅製メダルに白と紫の綬を施し、調査に協力した者、調査事業に関与した者に贈附された。よほどの名誉だったのか、第六条に

「記念章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ遺族之ヲ保存スルコトヲ許ス」

と謳っている。

なるほど、お上の大事業であれば、協力を賞されるのは名誉に違いない。

だけでなく、様々な記念品が作られた。各地の民俗館や博物館に所蔵されているものを見ると、南部鉄瓶と精工舎製の置き時計が知られるが、このほかにも都道府県ごとに花瓶や額、寺社の社票などが配られた。また記念章の図柄をそのまま写し取った額面一銭の記念切手も発売されている。

こうした物の中に、鹿島市が市中に貼り出したポスターが、総務省統計局に今も残っていた。

そこには、「如何に調べるか」「何時調べるか」「何を調べるか」「何の為に調べるか」の四項目が大きく掲げられ、国勢調査は社会（よのなか）の実況（ありさま）を知る為に行ふので課税（ぜいきん）でも犯罪人（ざいにん）を探す為でもありません。（カッコ内の訓みは原文ママ）

という説明書きが見える。

総務省の係官によると、

「漢字に振り仮名が付けられ、庶民にも分かりやすかった。役人的な命令口調や、ただの事務的な文章ではなかったので、好評だったようです」

という。

こうした周知徹底の努力が功を奏し、国民の不信感や警戒心は薄れていった。反対に

——日本も本当の近代国家、文化国家の仲間入りができる。

と歓迎ムードが高まった。

伊藤博文が強引に協約を締結させ、大日本帝国に併合されていた朝鮮半島でも、国勢調査を歓迎する空気があった。親日派は大日本帝国との一体性がより強化されるものとして、反日派・抗日派は民族独立に備えるために。

各地で講演会が開かれ、旗行列や花電車が催された。チンドン屋まで出る騒ぎになった町村もあった。実施の当日、十月一日の午前零時になると全国でサイレンや大砲、寺や神社では鐘、太鼓を打ち鳴らした。

並行して国勢院は、アメリカ合衆国のコンピュータイング・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社に



ホレリス式手動穿孔機と手動検孔機を発注した。川口式集計分類機械装置は実用化実験の段階を終えていたが、アメリカ合衆国の人口調査に使われた。本家本元を手にしたかったのであろう。

『情報処理産業年表』は

一九二〇年八月、国勢院、ホレリス式パンチカード装置、検孔装置を輸入。

と記す。

これは現物が輸入された年紀ではなく、実は、三井物産に発注を依頼（指示）したときにはかならない。

三井物産はただちにニューヨーク駐在事務所に注文書を送り、吉澤番三郎という所員がCTR社と交渉を始めた。

当初、CTR社は「了解した」と返事をした。

ところがしばらくして、

——検討の結果、貴意に沿うことができない。

という返事がきた。

——当社は新しい営業方針に則って、マシンはレンタル契約となる。

賃貸契約のほかは受け付けることができない、という。

吉澤は同じくパンチカード式統計会計機械装置を製造しているパワーズ・アカウント社にも問い合わせた。

回答は一緒だった。

何度か太平洋を越えて電信がやり取りされるうち、パンチカード装置やベリファイ装置であれば売り渡すことが可能であることが分かった。そこで国勢院は統計会計機械装置本体の輸入を断念し、翌年八月、改めてパンチカード装置とベリファイ装置を発注した。これと川口式集計分類機械装置を組み合わせるのである。

### 三

紆余曲折を経て、CTR社のホレリス式手動穿孔機と手動検孔機を載せた船が横浜港に着いたのは一九二三年（大正十二）八月二十一日だったと記録されている。個々の家庭を調査員が訪問したのは一九二〇年の十月一日で、それから三年が経ち、全国から集められた調査票は事前処理が終了するところだった。

いよいよ集計作業に着手できるであろう。

荷揚げしようとした当日、大地が揺れた。

幸いなことに、機械装置一式はまだ陸揚げされていなか

った。

被災を恐れて、船は神戸港に避難しなければならなかった。ただであれば、国勢院は慌てふためきはしなかった。実はこのときのために作製した川口式集計分類機械装置十台のうち、十台までが震災で焼失してしまったのだ。この話はすでに書いた。

再び船が横浜港に戻り、ホレリス式パンチカード装置が国政院に設置されたのは、同年十二月のことだった。震災からの復興が旧ビッチで進められる中で、職員たちはアメリカ製パンチカード装置による集計作業に取り掛かった。操作方法は英文の手引書があったからよかったにしても、集計・分類のための配電盤の設定はほとんど手探りで行われた。

このとき国勢院は国勢調査の集計作業にパンチカード・システム（PCS）を使う際の手順を次のように定めた。

- ① 調査票の策定
- ② 記載事項の審査
- ③ 符合の統一
- ④ 実査
- ⑤ 調査票の回収
- ⑥ 記入内容の確認と前処理

⑦ 穿孔

⑧ 検孔

⑨ 分類・集計

⑩ 統計原表の作成

この方式は、第二次大戦後のPCSによる処理でも基本的に継承されている。ただし第一回の国勢調査でパンチカードを適用したのは八百三十万人についてであった。全人口の七分の一に過ぎなかったが、その先取性と実行力は高く評価されている。

調査の結果は以下のようなだった。

- ・ 総人口は七千六百九十八万八千三百七十九人
- ・ 内地五千五百九十六万三千五十三人
- ・ 外地二千二百二十五万三千二百二十六人

その後の分類作業によって、国勢院は以下のように報告した。

- ・ 内地に居住する者のうち何らかの職業に就いているのは二千六百四十四万人
- ・ 産業別では農林水産業が一千四百四十四万人（有業者

の五六・四％）

・鉦工業は五百五十八万人（二一・一％）

・商業は六百四十二万人（二四・三％）

なんらかの職業についていたのは、全人口の四七・二％だった。過半数が仕事に就いていないのに内地五千六百万人が暮らしていたのだから、考えようによつては素晴らしいことだった。

しかし一部の政治家や軍人は

——これでは、国力もへったくれもあるものではない。  
と考えた。

政府はこの調査から、近代化のためには全体の有業者数を増やして生産力を高め、農林水産業から鉦工業への就労の移動を促す必要があることを読み取った。すなわち、明治政府が取り組んだ「殖産興業」施策ではまだ足りない、というのである。

殖産興業の施策は都市への人口集中を促した。一方では日本独特の「財閥」という偏った民間資本を蓄積し、多くの成金を輩出した。農村は食糧の供給源としてだけでなく、鉦工業・商業への労働力の供給源となつていった。加えて租借地と財閥系の生産拠点が中国大陸に展開した。その権益を守るための軍隊を必要とした。

ヨーロッパ列強に比べて、日本の資本は脆弱だったにもかかわらず、政府は肥大化の道を選択した。それはあたかも、細い骨をわずかな筋肉が覆っているに過ぎない肉体に、過重な鎧を着て列強と張り合うのに等しかった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

国際統計協会 I S I / International Statistical Institute.

一八五五年に発足した統計学社の国際組織で、オランダのヴォーブルグに本部を置いている。

十月一日 年末、年始は、諸取引の決算や、年賀の風習がある。日本海側や北海道では積雪が多く、調査をする時期としては不適當である。夏季は暑いため調査員に負荷がかかる。そこで春か秋ということになったが、春は就職・就学、転勤などで人口の移動が多いために不適當とされ、降雪前の十月一日が選ばれた。

勅令第二七二号 条文は以下のようなだった。

第一条 第一回国勢調査実施記念ノ表章トシテ特ニ記念章ヲ設ク
第二章 記念章ノ図式左ノ如シ

章 青銅円形径一寸表面菊花輪廓内ニ戸籍ノ巻物ヲ手ニセル大化年間ノ国司ノ立像ヲ表シ裏面ニ国勢調査記念章大正九年十月一日ノ文字ヲ識ス

綴 織地幅一寸二分中央白左右紫両縁白

2 記念章ハ綬ヲ用ヰテ左肋ニ佩フ

第三条 記念章ハ左ノ各号ノ一ニ該当スル者ニ之ヲ授与ス

一 第一回国勢調査ノ事業ニ直接関与シタル者

二 第一回国勢調査ノ事業ニ伴フ要務ニ関与シタル者

第四条 左ノ各号ノ一ニ該当スル者ニハ記念章ヲ授与セス但シ処

刑、免官又ハ免職ノ後前条ニ該当スル者ニ付テハ此ノ限

ニ在ラス

一 禁錮以上ノ刑ニ処セラレタル者

二 懲戒ノ裁判又ハ処分ニ依リ免官又ハ免職セラレタル者

第五条 記念章ヲ授与セラルヘキ者ニ対シテハ其ノ授与前死亡シタルトキト雖仍之ヲ授与ス

第六条 記念章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ遺族之ヲ保存スルコトヲ許ス

横山雅男 よこやま・まさお／1861～1943。広島県師範

学校を出て小学校教員を務めたのち上京し、一八八三年共立統計学校の第一期生となった。一九一三年内閣統計局兼任統計官として第一回国勢調査の実現に尽力した。一九三五年から『統計学雑誌』を刊行する傍、大学や専門学校、団体などで統計学の講師を務めた。

吉澤審三郎 よしざわ・しんざぶろう…三井物産機械部の社員として米国の機械式統計会計装置、作表機などを調査していた（政府の委託を受けていた、とも）。一九四八年、三井物産からUNIVACコンピュータの代理店契約を引き継いで吉澤会計機（のち「吉沢ビジネス・マシンス」と改称）を設立した。

039 能率増進

第三十九

能率増進

一

第一回国勢調査が行われた前後の社会はどうだったか。

一九一八年の米騒動はとりあえず収束したもの、大正デモクラシーと女性の社会進出が労働運動と結びついていった。また大地主のもとで労役に使用されていた小作農の蜂起をも促した。

都市と農村部の格差が資本家と労農階級の対立を促し、さらに対決として表面化した。その対決はこんにちのような平和的、友好的なデモではなく、デモ隊は真剣を帯びダインマイトに火をつけ、官憲は実弾を発射した。暴徒、鎮圧という言葉が飛び交った。

一九二一年に起こった主な労働争議、小作争議をあげると次のようになる。

- ・北海道蜂須賀農場で小作争議（二月）
- ・足尾銅山で労働争議（三月～四月）

- ・大阪電燈社で労働争議（四月）

以後、阪神地区で団体交渉権要求争議が続発。

- ・神戸の三菱・川崎両造船所でスト（七月～八月）

神戸製鋼、台湾精糖、ダンロップ・マッチ工場などが

「同情スト」

- ・藤田農場で小作争議（八月）

日本政府が直面していた問題は、国内の騒擾ばかりではなかった。

財政が逼迫していたのである。

日本銀行が発行する紙幣は、金の価値に裏づけされた兌換制度に基づいていた。

明治初期、日本国内での金と銀の交換レートは一對五だった。対して国際レートは一對十五だった。安政五年の通商条約でこれが定まった。たために、西欧諸国はせっせと金を銀貨に換え、日本に持ち込んで金と交換した。

日本ばかりでなくアジア諸国は、ヨーロッパ諸国に比べ銀の価値を高く見ていた。このため外国商人は金と銀を交換するだけで三倍の利益を得ることができた。実はこの仕掛けは中国の銀本位制に遠因がある。

安土桃山の時代にも、南蛮の商人はその仕組みを利用して富を得た。徳川秀忠が国を閉ざしたのは、そのためでも

あった。

同じ理屈で江戸末期、日本から信じられないほど大量の金が西洋に流出した。元治、慶応の一年で日本から海外に流出した金は、三十万両に及んだとされている。

加えて日本政府の経済政策は、原材料を輸入し製品を輸出する「貿易立国」にあった。国際的な工業国に成長したものの、個人消費の拡大を後回しにしたため、経済基盤は脆弱だった。その結果、日本の産業界は海外市場の変動に振り回されることになる。

一九二〇年の三月、株価が暴落した。

大戦後の経済恐慌が始まったのだ。

「虎大尽」の異名で知られた山本唯三郎のように一夜で没落した成金もいたし、内田信也のように売り抜けて政治家に転進した成金もいた。

八幡製鉄所は溶鉱炉の火を落とし、二万三千人の従業員がストを敢行した。日銀は財界救済を目的とする非常貸出を宣言し、労働者側は五月のメーデーで「失業の防止」と「最低賃金法制定の要求」を決議した。

輸出の不振は深刻さを増し、入超額はその後も増え続けた。貿易赤字は二三年に六億一千三百万円、二四年に七億三千万円に達していた。国の財布がパンクしつつあった。

国内の鬱積を無視して内閣の意地を通したシベリア出兵

は、十億円の歳費を投入したものの、得るところがないままに撤退することになったし、ワシントン軍縮会議で海軍主力艦の保有比率がイギリス、アメリカに対し、日本は六割に抑制された。このことはとりもなおさず、日本経済の発展を牽引してきた軍事予算の縮小を意味していた。

一九二三年に竣工した丸ビルは第一期黄金時代の記念碑だった。この時期を演出した加藤高明が、一九二六年一月二十八日に六十六歳で没したのは、その終焉を告げる象徴的なできごとだった。

二

一九二三年九月一日午前十一時五十八分、東京が揺れた。
「関東大震災」である。

第一回国勢調査のために川口市太郎と二代目・田中久重が製作した統計会計機械十一台のうち十台が燃えた。アメリカから横浜港に着いていたホレリス式手動穿孔機と手動検孔機の荷揚げ作業が中止された。被災を避けるために、急遽、神戸港に回送された話はすでに書いた。

昼時であったことが被害を大きくした。家々の台所から火災が発生し、道路を避難する群衆が喚き走った。ために

消防や警察はなすべきことができなかった。下町に発生した火災はたちまち広がり、本郷、雜司ヶ谷、日本橋、銀座、新橋、芝のあたりまでを燃やし尽くした。

警視庁が炎上し、東京帝国大学図書館の蔵書七十万冊が焼失した。銀座の三越百貨店、黒澤商店のビルも燃えた。

煉瓦造り十二階建ての「凌雲閣」が、紅蓮の炎の中で七階までを残して崩落した。浅草六区の興業街もすべて焼亡したが、隣接する浅草寺のみがなぜか焼け残った。

人々は

——観音様のご加護。

と信じた。

科学的には、五重塔や伽藍の大屋根、境内の樹木が火難を退けた、といえなくもないが、堂宇が倒壊しなかったのは不思議としかいいようがない。これがために、雷門の前に「尋ね人取次所」が設置されることになる。

北区王子にあった印刷局のレンガ造りの建物は、跡形もなく崩れ落ちた。市ヶ谷の外濠通りには幅五十センチ以上の地割れができ、市電の線路は飴のようにひん曲がった。九段坂上のお濠では、石垣が崩落した。

被害は東京にとどまらなかった。

鎌倉では鶴岡八幡宮の鳥居が倒壊し、高德院の大仏が六十センチもせり出した。横須賀の軍港では、備蓄してあつ

た重油に火が移って炎上し、これが海に流出して大火流となった。現在、ちょっとした水遊びの場所となっている油壺の岩場は、このとき海底が隆起してできた。

小田原では片浦村根府川で土石流が発生した。国鉄根府川駅南の字「白糸川」の百二十三戸（八百五十八人）を襲った土石流は、六十四戸を埋没し、四百六名の命を奪った。

このとき根府川駅に停車しつつあった小田原午前十一時四十分発の真鶴行き普通列車は、機関車もろともはね飛ばされ、乗客二百人、ホームで列車を待っていた四十人および、駅員などの生命が瞬時に失われた。

この地震は、政治・経済の混迷を決定的にした。死者不明十四万二千八百七人、焼失家屋五十七万五千三百九十四戸を出したこの大地震は、東京ばかりでなく、川崎、横浜のビジネス街にも大きな被害をもたらした。横浜、川崎にあった企業の書類が風に乘って房総にたどり着き、漁村にときならぬ紙吹雪を降らせたという逸話もある。

のちの調査で、東京では前後三回の大きな揺れがあったことが判明した。最初が本震、あとの二回は余震である。本震は二つの大きな断層の滑りが短時間に連続した「双子地震」であった。

本震の双子地震では、最初の大きな断層の滑りが神奈川県小田原の直下で発生し、十一十五秒後に三浦半島の直下

で二度目の大きな滑りが起こった。震源から離れた東京では三十秒から約一分にわたって激しく揺れ、そこに本震に匹敵する第二、第三の余震が襲いかかった。本震の規模はマグニチュード8、二度の余震はそれぞれマグニチュード7程度であつたろうと推定されている。

業種別の被害額は、紡績業七社で二千四百六十一万円、製作工業八社で千七百二十九万円、毛織業四社で千七百三十万円など、主要九業種で約一億円に達した。

三

国勢調査におけるパンチカード式計算機の適用は、情報を計数化し、それを集計し分類することが、いかに経営を近代化するか、組織の運営に役立つかを示すことになった。産業界、特に契約者の増加に伴って経営の計数化が不可欠となった保険業界で計算機への関心が急速に高まった。この動きは産業界に「事務の機械化」「機械化による事務能力の増進」という認識を広めていく。

一九二一年のこと、横浜にあつた日本事務機製造という会社が「IDEAL」という計算機を製作した。コルマーの手廻式計算機を模倣した国産品だった。これを丸善が販売した。大本寅次郎が「虎印」を「TIGER」に変えた

所作に等しい。

翌二二年の九月、東京商工奨励館で「商工事務能力増進講習会」が開催され、一九二三年五月には逓信省が逓信省式電気式集計機の一号機を完成させている。第一回国勢調査の集計に使うためだった。

関東大震災で一台だけ燃えずに残った川口式集計分類集計機械装置を發展させたのである。しかし国産の計算機を開発する動きは、これが最後になった。時計の原理を応用した川口式が發展していれば、計算機の歴史はまた違ったものになっていたかもしれない。

この年、鉄道省が三井物産を通じてパワーズ式統計会計機械を輸入している。国産より外国製をありがたがる明治以来の西洋信奉が根底にあつた。

一九二四年。

三月に神長倉真民が『科学的に研究した執務能力増進法』を著した。

四月には工政研究会が雑誌『マネジメント』を創刊した。六月になると、鉄道省経理局調査課の職員・秋山登利男が「鉄道省で購入した最新式集計機に就て」と題する報告書を『鉄道時報』に掲載した。

同月、電気試験所の技師・高橋保次郎と臨時電信電話建設局の技師・庄司茂雄が「電気統計機に就て」を『電気試

驗所研究報告』に発表した。

その年の八月十一日、首相の加藤高明が示した「官庁能率増進訓諭」が産業界に大きなインパクトを与えた。

官庁能率増進訓諭には「執務に当りて、務めて機械の使用を図ること」の一項目が加えられた。高橋二郎が主張し続けたパンチカード式統計会計機械装置の効用を政府が認めたことにほかならない。

九月には上中甲堂が『ナショナル金銭登録器販売の方法』を刊行した。また経営者向けの雑誌『マネジメント』が「執務能率の霸王」のタイトルで、パワーズ式とホレリス式のタビュレーターを取り上げ、鉄道省におけるパワーズ式統計会計機械装置の実用例を紹介した。

こうした状況の中で、大本鉄工所のタイガー式計算器が認知されるときがやってきた。海軍の呉工廠が、最高モデル三台を発注したのである。これをきっかけに、同社の計算器はようやく「国産機」として広く認知されるようになった。

さらに二五年には、金子利八郎が統計会計機械装置や金銭登録機などの事務機械を紹介する『事務管理』を出版した。その結果、黒澤商店や日本事務器商会など、事務用品・機器の販売業が勃興した。

タイプライターやタイムレコーダー、金銭登録機、分類機、

仕分機、電送装置といった事務機器が脚光を浴び、バインダやルーズリーフ、クリップ、ステープラ（「ホチキス」の名で知られる）、複写用のカーボン紙、書類を分類して保管するファイル棚といった事務用品・器具が企業に導入された。

三井物産は一九二四年、ニューヨーク駐在の吉澤審三郎の奔走でパワーズ・アカウンティング社と東洋総代理店契約を結んだのを機に、政府に計算機の輸入関税引き下げを強く要望した。

事務機器を輸入していた黒澤商店、日本事務器商会、丸善、日本金銭登録機および、コンピューティング・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社と代理店契約の交渉を行っていた森村商事などが同調して政府に圧力をかけ、大合唱になった。ために政府はこれに屈し、翌二五年三月に関税の撤廃が実現した。

しかしそれでも海外から輸入される計算機は、一般の企業や商店が購入するには高価でありすぎた。ばかりでなく、まず英語を理解しなければならず、そのうえで難しい操作手順を覚えなければならなかった。

その代わりに普及したのは、タイガー計算器だった。数字をセットして、ハンドルを奥に回すか手前に回すかすれば、加減乗除の結果が得られるのである。

輸入商社がパンチカード式統計会計機械装置の効用を宣傳すればするほど、タイガー計算器が売れた。ともあれ一九二四年という年は、第二次大戦前における「計算機元年」といっていい。

補 注

金と銀の交換比率 当時、欧米世界で通用していたメキシコのドル銀貨は天保一分銀三枚を同等として交換された。また金と銀の交換比率は日本や中国では一対五、欧米では一対十五だった。すなわち欧米の貿易商たちは銀建てで決済するだけで多大な利益を得ることができた。『ドルと円―世界経済の新しい構造―』(宮崎義一、一九八八、岩波新書)に詳しい。

山本唯三郎 やまもと・たださぶろう／1873～1927。第一次世界大戦時の大戦景気で成功した。「船成金」と称された。内田信也 うちだ・のぶや／1880～1971。戸籍上「信也」

の訓みは「のぶなり」。三大船成金の一人だが、衆院議員に転進して一九四三年岡田内閣で鉄道大臣、一九四四年東条内閣で農商務大臣、一九五三年吉田内閣で農林大臣を務めた。

シベリア出兵 一九一八年から一九二二年まで、第一次世界大戦の連合国(イギリス、日本、フランス、イタリア、アメリカ、カナダ、中華民国の七国)が「ソヴィエト革命軍に囚われたチェコの将兵を救出する」の名目でシベリアに共同出兵した。しかしイギリス、フランス、イタリアは帝国＝オーストリア＝ハンガリー帝国同盟軍との戦争に忙しく出兵に及び腰だった。太平洋側から上陸する日本、アメリカ、中華民国の三国とソヴェト革命軍を戦わせることによって、ドイツ帝国とソヴィエト革命政府を同時に倒す地球規模の政略だった。

日本は陸軍七万三千人をウラジオストクに上陸させ、ハバロフスクを中心とする東シベリアを占領した。ドイツ帝国が崩壊した

一九一八年十一月以後も日本軍は侵攻し、イルクーツクまで進撃した。しかし日本の露骨な領土的野心に国際社会が強い警戒と批判を示したことから、一九二二年十月、日本軍は得るものがないまま撤退することになった。

加藤高明 かとう・たかあき／1860～1926。一九〇〇年第四次伊藤内閣、一九〇六年第一次西園寺内閣、一九一三年第三次桂内閣、一九一四年第二次大隈内閣で外務大臣、一九二四年六月二十四日から二六年一月二十八日まで内閣総理大臣(第二十四代)を務めた

東京商工奨励館 一九二一年に創立され、一九七〇年まで続した。東京都電気試験所と合併して「東京都立工業技術センター」となり、東京都立アイソトープ総合研究所と合併して「東京都立産業技術研究所」、さらに二〇〇〇年四月東京都立繊維工業試験所と統合して「東京都立産業技術研究所」(TIIRI)となった。

神長倉真民 かなくら・まさみ…幕末から明治・大正にかけての日本経済を歴史的に考察した。主な著作は「仏蘭西公使ロセスと小栗上野介」「日本資本主義由来」「明治維新財政経済中考」など。高橋保次郎 たかはし・やすじろう…正六年発足の電信電話学会の大正八年～十年「庶務委員」を務めた記録がある。

上中甲堂 うえなか・こうどう／1882～1964。大正・昭和前期に業務改革を中心とする経営コンサルタントとして活躍した。『勤労訓練二十日間』『個人能率増進法』『八年間米国を覗て居た眼で五十日間支那を覗て』などの著作がある。

ナショナル金銭登録器 アメリカのナショナル・キャッシュ・レジスター(NCR)社の金銭登録機のこと。機械を売るのでなく、商店主や企業経営者に経営手法や在庫管理のコンサルティングを

行いながらマシンの有用性を訴えたことから、上中はそのユニークな販売方法に着目した。

金子利八郎 かねこ・りはちろう／1884～1957。大正・昭和前期に書籍や講演と通じて会計簿記の啓蒙活動を行った。『商学全集』『会计学全集』『簿記の理論と実践…会計事務管理の基本問題』『簿記新論』などの著作がある。

040 絡繰

第四十

絡 繰

一

表題「絡繰」は「からくり」と読む。

糸やゼンマイ、バネ、歯車などを組み合わせ、一定の（あるいは特定の）動きをする装置、仕組みを指す。「唐繰」「機巧」とも書き、「機」「械」の一字でそう訓ませることもある。

祭礼の山車の上で賑やかしく身振り手振りをする人形を思えば、まず間違いはない。

十八世紀、本邦に計算機のアイディアはなかったが、絡繰を作る技術はあった。山車人形のほか、足踏みで自走する陸舟車、足踏み式の三輪車、空気銃、蒸気船（模型）、萬年目鳴計、茶運び人形、からくり御籤（みくじ）などの現物ないしレプリカが残っている。

逸見治郎が東京の猿楽町でマンハイム計算尺の複製に苦心し、矢頭亮一が東京・雑司ヶ谷の工場で「自動算盤」の開発に取り組んでいた一九〇二年の十二月、「国勢調査法」

が成立した。

国勢院の審査官・高橋二郎はそれ以前から、逓信省に対して調査に使う計算機を開発するよう働きかけていた。現役を引退したとはいえ、学术界と政府内に影響力を持っていた杉亨二が後押ししたことは、すでに書いた。

逓信省はこのため、アメリカからホレリス式計算装置に関する文献を手に入れた。それをもとに、パンチカード式集計装置を国産しようというのである。製作を指示されたのは、同省の電信燈台用品製造所の技師であった川口市太郎である。

川口は福岡県久留米に生まれ、幕末の発明家で「からくり儀右衛門」の異称を取った初代・田中久重に師事した。当時は「同郷」ということが、免罪符あるいは通行手形のように機能した。安政元年（一八五四）に師匠の田中とともに佐賀鍋島藩に招かれ、精錬所で蒸気機関や鉄砲の製造に従事した。

のち幕府に取り立てられ、お台場に設置する大砲の製造を行い、明治初年に三輪自転車を独自に開発したことも知られている。ただ一介の職人の扱いであったために、詳細な履歴が残されていない。

ちなみに田中久重の弟子に当たる金子庄右衛門が田中の養子となり、「田中久重」の名を襲った。その二代目田中

久重が一八七三年、東京・麻布に機械工場「田中製作所」を建設し、八二年にいたって工場に「芝浦製作所」の名称をつけた。

川口は二代目田中久重の協力を得て計算装置の製作に着手したが、英語の文献のみを頼りに実用に耐える機械装置を作るのだから、その辛苦は推測して余りある。作業はまず、アメリカから取り寄せた技術資料の翻訳から始まった。

- ・水銀を張った箱にゴム板の封をする。
- ・ゴム板の上に、穴を穿った厚紙を置く。
- ・厚紙には穴を穿つ場所が整然と並び、ここに同じ数の針を植えた板を押し当てる。
- ・針は伸縮自在になっていて、障害物があれば下に下がり、穴があれば上に上がる。
- ・水銀液と針板に、プラスとマイナスの電極を取り付ける。
- ・厚紙に穴が開いている場所は針が水銀に接し電流が流れる。
- ・針の数だけスイッチがある。
- ・さらにスイッチの数だけ、時計の形をした回転式集計器を用意する。
- ・円周を百に区分し、長針が一回転すると短針が一目盛

進む。

長針が一回転すると短針が一目盛進むのは、大小の歯車を組み合わせた時計の原理にほかならない。秒・分・時の時計は一巡で八万六千四百を刻む。川口が作った計算絡線の集計器は一器あたり一〇〇×一〇〇だったので一万を数えることができた。さらにもう一つの回転式集計器を取り付けることで一万×一万倍の集計が可能になる。

理屈が分かれば、あとはお手のものだった。

彼は持ち前の器用さを生かし、一九〇四年、試作機を完成した。外観は「アリスモーター」に類し、前面に複数の回転式集計器が備えられた。パンチカードを読み取り、それで桁上がりを算出するのである。

国勢院はテストを兼ねて「川口式集計分類機械装置」を部内の計算業務に使ったが、最大の難問は厚紙（パンチカード）の設計だった。

初期のホレリス計算装置が使っていたパンチカードの大きさは三×五・五インチ（七十五×百四十ミリ）、そこに一列四十五個の穿孔欄があった。情報処理用語でいえば「カラム」ということになる。男、女で二カラム、年齢を十歳刻みにすれば十一カラム、五歳刻みで二十二カラム、職業を二十職種として二十カラム。これで最初の一列が終

る。

大規模な調査の集計に適用するには信頼性の点で問題があった。機械装置の動作ではなく、パンチカードの製法と穿孔の技術が未熟だった。薄くひいた紙を重ねて張り合わせるのだが、墨と筆を前提とした和紙の材料（楮、三桠、雁皮など）は向いていなかった。加えて日本には湿度という難敵があった。

実際、昭和に入って設立された「日本ワットソン統計会社機械」（日本IBMの前身）という会社が横浜の本社二階でパンチカードを国産化する作業に努力した。そのときでさえ実用に耐えうる厚紙を作るには相応の苦心が要った。国勢院と通信省は、パンチカードに使う紙の製法まで研究しなければならなかった。

部内の計算業務に適用しつつ改良を加え、「川口式集計分類機械装置」は「通信省式電気式集計分類装置」の名で制式に採用された。一九二〇年の第一回国勢調査を目指して、芝浦製作所において十一台が製作されている。十一台あれば、おおむね内外地の人口を計算するのに充分と見積もったのであろう。実際、第一回国勢調査では一台で八百三十万人分のデータを処理しているから、通信省、国勢院の見積りは正しかった。

一斉調査が終了し、いよいよ集計作業に入ろうとした一

九三年（大正十二）の九月、大地が揺れた。

関東大震災である。

深川あたりに発生した火災は隅田川を越え、虎ノ門にあった芝浦製作所の工場を襲った。このために十一台のうち十台までが焼失した。

国勢院の職員が受けたショックは大きかった。

このとき国勢院は、ホレリス式の手動カード穿孔機と検孔機をアメリカに発注していた。それと亀の甲穿孔機と川口式集計分類装置を連動させて、集計作業を行う計画だった。十一台のうち十台までが焼失したのでは、集計・分類の計画を大幅に変更せざるを得ない。

ただ一台のみ残った川口式集計分類装置は、東京・新宿の総務省統計センターに保存されている。概観は飛騨春慶の塗りのような高級感があり、アンティークなアップライトピアノと見まごうばかりである。これほど大きな装置が、よぐぞ震災と第二次大戦の空襲を免れたものであった。

二

第二次大戦前の国産計算機として最も成功したのは「タイガー計算器」である。初期のモデルは手廻しの機械式だったが、のち電動式となり、国内ばかりでなくアメリカ、

ヨーロッパにも輸出された。戦後にいたつてもなお、最もポピュラーな計算機として販売され、戦前からの累計出荷台数は五十万台を超えている。

発明したのは大本寅治郎といった。

一八七八年、大阪に生まれ、一九一二年の九月に「大本鉄工所」を大阪府西成郡豊崎町南浜に設立した。同じ年に日本鋼管が設立されている。

鉄鋼業の確立は明治政府が

「国家の基盤である」

として、最も力を入れた分野だった。だがそのためには、巨大な投資が必要なうえ、生産した粗鋼を消費する産業を育てなければならなかった。その第一は、いうまでもなく軍需である。銃砲、重機および、艦船が中心だった。中でも四面を海に囲まれたこの列島の条件から、鋼鉄製の艦船の建造が手っ取り早かった。

このため政府は一八九六年に「造船奨励法」を定めて、総排水量七百トン以上の鋼鉄製艦船を建造する場合、補助金を交付して造船業の育成・振興に努めた。その成果を代表するのは一八九八年に竣工した総排水量六千トンの貨客船「常陸丸」である。ただこの船の運命ははかなかった。就航からわずか六年後の一九〇四年六月、日本海を航行中にロシア海軍の砲撃を受けて沈没している。

一八九七年、政府は北九州八幡に「八幡製鉄所」を建設した。操業を始めたのは一九〇一年である。中国の大冶鉄山——張之洞がドイツの資本を引き入れて掘削し、伊藤博文と会談して鉄鉱石とコークスを交換輸入することで合意した——から輸入した鉄鉱石を原材料に、銑鉄から粗鋼までを一貫生産する体制がこうして整った。

造船業の勃興を受けて、月島製鋼所、大阪鑄鉄所などが操業を開始し、一九〇五年には広島県・呉海軍工廠で一万三千トンの戦艦「筑波」「生駒」が、翌〇六年には横須賀造船所で一万九千トンの戦艦「薩摩」「安芸」の建造が始まった。世界で最初にガスタービンを搭載した「安芸」は、竣工当時、大型戦艦として世界最速を誇った。

加えて、東京や大阪などでビルが建ち、道路交通が増加した。それに伴って鉄製の橋が建築されるようになった。鉄筋コンクリートのビルは、一九〇七年に完成した銀座・三越デパートがその最初であったといわれる。

製鉄業の発展とともに鉄工業も盛んになったが、大本鉄工所が受注するのは単品生産の特注品が多かった。設計図に従って鉄を切断し、折り曲げるのである。受注は順調に伸びたが、彼は、

——やみくもに受注をこなしているだけでは、企業として発展は望めない。

と考えた。

図面を読み違えるたいへんな損害が生じた。長さ、厚さの異なる鉄の加工品を効率よく仕上げていくには、工程管理と原価の把握が欠かせなかった。

一九一〇年代の後半に入ると、産業界で「事務能率の増進」が啓蒙された。折から計数的経営手法がもてはやされ、彼も講習会などに参加して近代的企業経営の手法を学んだが、アメリカ製の統計会計機はべらぼうに高価で、とても購入できない。そこで彼は、簡易に計算できる安価な機械を作ろうと思い立った。

——それは一九一九年のことであつた。
とタイガー計算器資料館は記す。

三

一九二三年、四年五カ月の歳月と多額の資金を投入して一号機が完成した。オドナーの手廻し式計算機を模倣したものだったが、十進法を採用し、計算する数字をカウンターに表示するなど、随所に使いやすさの工夫を凝らしていた。

計算の能力は最大二十桁である。二十桁といえは最大九千九百九十九京九千九百九十九兆九千九百九十九億九千九

百九十九万九千九百九十九までの集計ができることになる。

大本寅治郎の「寅」を取って「虎印計算器」と命名して発売しようとした。ところが、持ち込んだ販売会社から

「まず売れますまい」という返事を得た。

「それは不審な。これほど精緻なマシンは世界広しといえどもありませんぞ」

「いやいや、さようなことはこの際、どうでもいい」

「まずまず不審である。理をうかがいたい」

「しからば」

と係は言った。

「虎印という名前では、国産品であることが明らかではありませんか。国産の計算器など、信用されませぬ。信用されねば売れぬのが商売」

やりとりの一々は定かでないが、大筋はこのようなことだった。

そこで型式を少し直し、「虎」を英語に置き換えて「TIGER」のブランドで売り出した。輸入モノのごとき名前に変えたとなん、その初日に二百四十五円の機械が売れたという。いかにも当時からしい。

手廻し式計算機は、多くのメーカーが「時代遅れ」として手を出さなかった。ところが、大本は電動式への転換をひそかに考えていた。その研究は一九三七年に実を結び、

特許を取得することができた。

すなわち、

- ・ 廻転計算器ニ於ケル廻転表示ノ桁送り装置
- ・ 廻転計算器ニ於ケル廻転表示輪ノ廻転装置

である。この特許はイギリス、ドイツ、アメリカでも認められている。

アメリカのニューヨーク、サンフランシスコで開催された万国博覧会に出品したところ、各国の産業界から注文が殺到した。これに自信を得た大本は、一九四〇年十月、計算器の販売を専業する「タイガー計算器販売株式会社」を資本金十八万円で創立した。本社を東京に置き、大阪をはじめ、札幌、仙台、名古屋、広島、福岡、京城、大連、台湾、新京、奉天、北京・上海などに出張所を設けた。

第二次大戦の勃発で、「計算装置の製造は不急の事業」とされ、軍需工場への転換が強要されたが、大本は一方で軍の要請にこたえつつ、終戦まで計算器の生産を続けた。アメリカ空軍の空襲で東京、大阪、名古屋の本社・事業所を焼失し、さらに敗戦で京城、大連、台湾、新京、奉天、北京、上海の事業所を連合軍に接収されたものの、戦後復興の需要をいち早くつかみ、一九四七年には早くも東京・銀

座西二丁目に鉄筋コンクリート造の本社を建設して、事業を再開している。

手軽な事務用計算装置として一九七〇年まで生産され、ピーク時は年間四万台を売りまくった。電子計算機を使って計算業務を行っていた専門家さえ、検算にタイガー計算器を用いた。電子計算機を購入できなかった設計事務所や研究所、大学などでは、もっぱらこの装置を利用していた。

ハンドルを回し、チンと鐘が鳴れば答えが出た。

その後、多くのメーカーが類似の計算器を生産し、一九六〇年代まで、事務処理に欠かすことができない機器とされた。だが、ICを搭載した電子卓上計算機が登場した。電子がその命脈を絶った。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**陸舟車** 武蔵・児玉郡の庄田門弥という農民が独創した。陸上の舟の意味。ペダルを踏むと動力が歯車で車輪に伝わる構造だった。足踏み式三輪車 彦根藩士の平石久平次(ひらいし・くへいじ)／1696〜1771。諱は「時光」が庄田門弥の陸舟車にヒントを得て製作した。ハンドルとペダルを備えていた。

**萬年自鳴計** 嘉永四年(一八五二)、田中久重が製作した。京都における太陽と月の動き、月齢、時刻、曜日、二十四節気、干支などを自動的に模型または針で示した。設計上は一回のゼンマイ巻で一年間動く構造だった。

**茶運び人形** 人形が持つ茶托に茶碗を乗せると客のいるところまで運び、茶碗の取ると止まる。飲み終わった茶碗を茶托に置くと元の場所に戻る。寛政九年(一七九六)刊の『機巧図彙』に内部構造の詳細図が掲載されている。

**からくり御籤** 人が近づくと神楽が鳴って機械仕掛けの獅子舞がはじまる。それにつられて硬貨を投入して御籤(みくじ)の種類を選ぶと、獅子が舞いながら御籤を届ける。京都市錦小路の錦天満宮で現在も動いている。

**川口市太郎** かわぐち・いちたろう… Wikipedia は「松太郎」とするが、本稿は一九〇六年二月二十五日刊行『統計集誌第二九九号』掲載の統計局片・花房直三郎の解説に従う。

「川口式電気集計機は通信技師川口市太郎氏の発明せる所なり」  
「此の機械の研究に当り最も困難を感じたるは一方に於て川口氏は独りホルレリス氏の機械を目撃したることなく且つ其の機械の

内部の構造を知るべき材料を有せざるのみならず統計製表の技術に至りても曾て之を見聞せしことなきが故に機械の製作に重要な計器の配当、分類函の用否は予等之を立案せざるべからず而して予及関村重両属は機械並に電気の知識を欠けるを以て双方共に暗中物を探るの感あり然るに川口氏は終に能く此の暗中より之を案出し而して其の成る所の機械は之をホルレリス氏の新式に比すれば遠く及ばずと雖其の旧式並び奥国式に比すれば或る点に於て優れる所あるが如き結果を得たり即ち此の機械を以て之を川口氏の発明とし特に川口氏の名称を附するに躊躇せざる所以なり」

**田中久重** たなか・ひさしげ／1799〜1881。父親は鼈甲細工師だった。通名は儀右衛門。久留米紆の織機や様ざまなからくり人形を考案した。京都で天文学、大阪で蘭学を学び、鍋島藩で蒸気船「電流丸」の蒸気機関を製作した。

**金子庄右衛門** かねこ・しょうえもん／1846〜1905。本名は金子庄八。二代目田中久重。初代久重とともに一八七三年(明治六)東京・京橋に田中製作所を設立した。これが芝浦製作所(のち東京芝浦電気、東芝)の前身となった。

**大本寅治郎** おおもと・とらじろう…寅次郎」とする表記もある。本書は株式会社タイガーの資料に依った。

**大冶鉄山** 中国・湖北省大冶(〇ど)にある。張之洞がドイツ資本で採掘した。伊藤博文とで意気投合し、日本からコークスを輸入する代わりに八幡製鉄に鉄鉱石を供給することで合意した。

**手廻し式計算器のメーカー** 太陽計算器、富士星計算器製作所(のち「日本計算器」さらにのち「ビジコン」と改称)、東京芝浦電気、コロナ、パイロット事務機械、日本事務機製造、カシオ計算機などがあつた。

041 世界へ

第四十一

世界へ

一

ここである「世界へ」は、世界に飛び出していく、あるいは今日の「グローバル」という意味合いではない。殖産興業、富国強兵で内側に注がれていた目線が、日清・日露戦争、第一次世界大戦を境に（別の言い方をすると、和洋折衷、大正デモクラシーを機に）外界に向けられた、というようなことである。

最も早く外国——明治期にいう「外国」とは、まずヨーロッパを指していた——に目を向けて、舶来の計算装置を導入したのは、日本生命保険相互会社である。同社の社史『ニッセイ一〇〇年史』から、ちょっと長いのだが該当部分を引用する。

【事務機械化への先駆け】

テートス計算機

生命保険の事務は計算、統計といった種類のものが多く、

しかもそれが大量であることから機械・器具を利用するのに適しており、欧米各国とも早くから機械化に取り組んでいた。当社もこうした海外諸国の業界の動きに注目、明治三十年（一八九七）にテートス計算機を購入して機械化の第一歩を踏み出した。

テートス計算機は当時の著名な保険数学者ジョージ・キングの著書でも紹介された評判の計算機械で、副社長の片岡直温がこの年の十一月に海外視察から帰国したとき、英国より持ち帰ったものであった。この当社一号のテートス計算機は、主に保険数理の実務計算に使用されて事務能力の向上に成果をあげ、社内外で話題になった。

明治三十六年四月、当社は全国の代理店主を前年新築したばかりの本店に招待した。その日の社内見学の模様を『社報』第十二号（明治三十六年四月）は

「主計課室にては計算機を説明せしを以て、来賓は多く茲に足を止めたるものの如かりき」

と、参観者の多くがテートス計算機に深い関心と興味を示した様子を記している。

ミリオネーヤ乗除計算機

計算機はその後世界各国で改良が加えられ性能の良い新製品が相次いで開発された。当社はそれら優秀な計算機の

買い替えや増設を進めた。大正五年（一九一六）には、当時世界で最も進んだ計算機として知られていたスイス製のミリオネーヤ乗除計算機を導入し、責任準金の計算に利用した。またこれに続いてマルセーデス、ラインメタル、モンロー、マーチャント等最新の計算機を備え付けて事務の能率増進に努めた。

大正十二年四月一日から十五日まで、第一回生命保険展覧会が大阪長堀橋高島屋呉服店で開催された折には、当社からミリオネーヤ計算機を展示・実演して入場者の注目を集めた。その後も用途に従ってそれに適した各種の計算機を購入・使用し、昭和初期にはマルセーデス計算機三台、ミリオネーヤ計算機二台、アリスモス計算機、サンドストランド計算機、ラインメタル計算機各一台が稼動していた。このうちサンドストランド計算機は計算と同時に製表する機械であった。

なお、事務の合理化能率化促進のため、謄写印刷機械類として輪転謄写機一台、ディトロー複写機三台を、また、写真機としてフォトスタット複写写真機、イーストマン引伸機等を備えていた。

マルセーデス、ラインメタル、マーチャント、サンドストランドなど、一般的な計算機の歴史に登場しない機械の

名前もある。

「マルセーデス」は「メルセデス」と発音すると馴染みがあるのだが、自動車メーカーのメルセデス社とは直接のつながりがないらしい。手動の歯車式計算機「Mercedes Finkid Model」を作っていた。一九〇五年にドイツで初号機が発売され、以後、改良とモデルチェンジが重ねられた。大阪大学総合学術博物館に現物が保存されている。

「ラインメタル」はドイツの兵器・自動車部品メーカーで、一八八九年、デュッセルドルフに設立されたライン金属製品・機械製造株式会社（Rheinische Metallwaren und Maschinenfabrik Aktiengesellschaft）のこと。第一次大戦でドイツ帝国が敗戦して武器の製造が禁止されたことから、ゼンマーダー（Gönnarda）の工場タイプライターや事務機器、カメラ、計算機などを作っていた。

このとき、計算機専門子会社の「ラインメタルパンチカード」社で電気技師だったグスタフ・タウシエクがパンチカード式計算機を開発した。ホレリスの会計集計機械装置の亜流（改良）だったと見ていい。

「マーチャント」はアメリカの計算機メーカーで、カリフォルニア州オークランドにあった。オドナーの計算機を製造していた。東京理科大学に一九一一年製のマシンが、総務省の統計博物館に一九二五年のマシンがそれぞれ保存



されている。

「サンドストランド」は一九一三年、グスタフ・デビッド・サンドストランドがアメリカ合衆国イリノイ州ロックフォードに創業した機械メーカーである。手動の歯車式卓上計算機を作っていた。電卓式キー配列の原型となったとされている。

また「輪転謄写機」や「複写機」が事務合理化の機器に数えられている。プリンター、複写機、ファクシミリなどが一般家庭に普及している現在から見ると、いかにも不思議に聞こえるが、実を言えば一九八〇年代においてさえ、そうした機器は「OA」（オフィスオートメーション）の機器に数えられていた。

ここに記載されている「計算機」に共通しているのは、性能においては現今でいう卓上計算機であって、利用者が要求するデータの加工・編集に合わせてプログラミングができるようにはなっていないかった。人の頭脳と指に頼る十露盤を代替する「計算用の機器」であったが、ともあれ情報処理に対する日本生命の関心は強かった。

次いで一九〇三年一月、第一生命がパリで開催された万国博覧会で入賞したミリオネア計算機を購入したことが『第一生命五十五年史』に見えている。日本における近代式計算機の利用は、まず保険業界から始まった。

## 二

こうした中で、CTR社のホレリス式統計会計機械装置についても、日本代理店の準備が進められていた。代理店として名乗りを上げたのは「森村商事」という会社だった。やや迂遠ながら、その前身である森村組のことを書く。

森村組は江戸時代から続く商家で、京橋に店を構え、陸運業のかたわら諸藩の江戸屋敷に出入りして武具や袋物を商っていた。

安政二年（一八五五）の十月二日、に推定マグニチュード6・9の大地震が江戸の町を直撃した。

いわゆる「安政大地震」がそれであって、記録によると全壊・焼失家屋一万四三四六戸、死者四千人、窮民三十八万人が出たとされる。倒壊した家屋の下敷きとなって「当代一」といわれた漢学者・藤田東湖が五十一歳で圧死したのもこのときだった。

この地震で起った大火で、森村組の全財産が灰になった。当主の五代目市左衛門は再興の意欲を失ってしまった。そこで十七歳の市太郎は、以後しばらく、震災跡の片付け人足の仕事で日銭を稼ぎ、あるいは露店でタバコなどを売って一家を支えた。

安政六年（一八五九）、日米修好通商条約で横浜が開港されるとすぐ、市太郎は横浜に向いて外国製のラシヤや時計などを仕入れ、江戸に運んで薄利で販売した。京橋と横浜の間三十二キロの道を徒歩で往復したというから、苦労のほどが分かる。

森村組は復興され、再び緒藩の江戸屋敷から声がかかるようになった。そうこうするうち、市太郎は出入りを許された中津藩江戸屋敷で福沢諭吉、土佐藩江戸屋敷で板垣退助や後藤象二郎と懇意になり、板垣退助の勧めで幕府抱えのフランス人技師から近代式兵装の製作法を学んだ。

これにより森村組は日米修好通商条約を批准する幕府代表団九十六名の礼装や儀礼用品、アメリカ大統領およびアメリカ政府要人三十人分のお土産品の調達を受令した。すなわち咸臨丸による初の太平洋横断視察団である。

咸臨丸の渡米には余談がある。

安政六年、幕府は通商条約批准使節をアメリカへ派遣することにした。当初の計画では、日本の使節団はアメリカ東洋艦隊の軍艦「ポーハタン」号に乗船することになっていた。ところが幕府内で異論が出た。まるで幕府の使節団を人質に取られるようなものではないか。

「幕府の軍艦を護衛に付けるべきである」

という議論となり、まず幕府軍艦「観光」丸が候補にあ

がった。

しかし「観光」は老朽化が進んでいた。このため、「任に耐えず」と判断された。

次いで佐賀鍋島藩が保有する練習船「長陽」が候補にのぼった。しかし「長陽」を長崎から回航するには時間がかかり過ぎるということで断念された。咸臨に白羽の矢が立ったのは、たまたま江戸湾にあった、という理由に過ぎない。

乗組員は「観光」丸で約四年間にわたる厳しい訓練に耐えた熟練ぞろいだったが、「咸臨」は本来、近海で使用する浅吃水型軍艦であつて、外洋航海に向いていなかった。それで大平洋を往復しようというのだから、向こう見ずも甚だしい。

現在、日本の外洋を走るフェリーですら、船体は鉄鋼ででき、排水量は一萬五千トン、全長は約二百メートル以上であるにもかかわらず、「これで太平洋を渡ろう」とは誰も考えない。

アメリカの士官は繰り返し

——無謀である。

と忠告したが、幕府（というより勝麟太郎）は聞かなかつた。

もっと乱暴だったのは日本使節団で、

「幕府の船が随行するのなら、われらはそちらで行く」と言い出した。

あまりに無茶な計画にアメリカ東洋艦隊は卒倒しかけたが、ポーハタンが着かず離れず同道し、正使の外国奉行新見正興らがアメリカの軍艦で行くことを条件にしおしお承知した。

ところが当のポーハタンの機関が故障してハワイで足止めを食った。ためにハワイ―サンフランシスコ間は咸臨の単独行となった。

以下は余談の余談。

太平洋往復の快挙ののち、慶応四年（一八六七）の八月十九日、「咸臨」は榎本武揚率いる幕府艦隊の輸送船として江戸湾を脱出した。房総沖で嵐に遭い、同航の「蟠竜」丸とともに漂流して清水港へ入った。「蟠竜」は修復して出港したが、「咸臨」は嵐でマストを折ったため航行不能の状態だった。

九月十八日、維新政府の軍艦「富士山」「武蔵」「飛竜」が、榎本艦隊の「咸臨」を攻撃した。このとき「咸臨」は修理のため武器を陸揚げしていた。これがために戦うことができず、白旗を上げて降伏の意志を示した。しかし官軍はそれを無視して多くの乗員を殺害した。その犠牲者の

遺体を手厚く葬ったのは「清水の次郎長」の異名で知られる任侠・山本長五郎だった。

「咸臨」は維新政府で大蔵省所管となり、一八六九年に回漕業の木村萬平に譲渡され、しばらく北海道の物産輸送に活躍したが、一八七一年九月十九日、箱館から小樽に向かう途中、キサラ岬の沖合で座礁し、翌二十日破碎した。残存していれば重要文化財ないし博物館入りであることが疑いを得ない。

### 三

森村市太郎は幕末維新の回天に際して、会津攻めに向かった土佐藩の物資の調達と運送を引き受けている。徳川一辺倒の江戸市中にあつて官軍御用を承ったのは、ひとえに市太郎の先見性に拠っている。こうしたことから森村組は新政府の要人とつながりを持つようになり、明治政府において本業である武器の陸軍御用達となった。このときから市太郎は商才を発揮し始めた。

貿易事業に乗り出したのは福沢諭吉の教唆によっている。森村は、横浜で外国人貿易商人と交渉する中で、日本と外国の為替が不平等であることに気がついた。諭吉に相談すると、

「そのためには国力を高めるほかない」

という返事だった。

海外に流出する金を取り戻すにはどうすればいいか。

「貿易しかない」

と森村は考えるようになった。折から欧米で東洋ブームが起こっていることを知った。西洋の陶器に花鳥風月が描かれ、白磁に紺色の文様が付けられるようになるのは、有田焼と清水焼を模倣したものだった。

またフランスでは、日本から輸入された陶器を包んでいた反故紙が高値で取り引きされた。反故紙には浮世絵が刷られていた。その画風が、印象派の画家たちに影響を与えた。

ジャポニスムである。

パリでは自称・他称の文化人が集まって論談を交わすサロンが盛んに開かれていた。

そこに出入りしていたモリス・ジョワイアンという人物がいた。すでに本の装丁家として名を成していた彼は、貧困の中で絵画を描き続ける若い画家を支援した。

ジョワイアンの目に止まったのは南フランスの片田舎から出てきた体が不自由な青年画家だった。名をアンリ・ド・トゥールーズ・ロートレックといった。

そのロートレックについて、ジョワイアンは次のように

書き残している。

ロートレックはモンマルトル通り十九番の半地下で織りなされるすべてのことに非常に熱心に立会い、貪欲に学ぼうとしていた。現在はパリ国立図書館所蔵のテオドル・デュレの日本の浮世絵と絵本の素晴らしい収集品が委託されたときは、何昼夜もかけてそれを整理し、北斎や歌麿、清長や春信の作品についての知識を仕入れ、彼らの落款を読み取れるように覚えたり、書いたりしたものだ。

浮世絵を研究するうちに、ロートレックは、黄色と緑と空刷りを施した灰色の織りなす調和が微妙な鳥居派と春信、もっと多彩で複雑な清長、歌麿、栄之の初刷りから学んだ。

ロートレックは歌麿の吉原の絵本に特に傾倒していた。

そこには青と薔薇色と緑の洗練された色階のすべてがあつた。その色彩にはいい得て妙な、詩的な名称がついていた。茄子の白、魚の腹の白、薔薇色の雪、桃花雪、青味がかった雪、桃花月、海老緑、玉葱の芯の緑、緑茶、蟹緑、濃い青は空の黒という具合だった。

絵画ばかりではなかった。陶器もまた、ヨーロッパでもてはやされた。金と朱と緑が鮮やかな有田、伊万里、九谷。大型の絵皿や香壺が飛ぶように売れた。ヨーロッパ貴族に

館の装飾品として歓迎されたのだ。あるいは白地に紺の絵柄をつけただけの簡素な清水。

ヨーロッパに起こったこの動きは、大西洋を渡ってアメリカでもブームとなった。この時代、アメリカ合衆国もまた、ヨーロッパの思想、文芸、絵画、機械、器具に憧れていた。ヨーロッパが世界の規範だった。

——日本の伝統的な漆器や陶器を輸出してはどうか。  
と考えるのは凡百の商才である。

——他にない独創的なもの。

——欧米人の目から見て日本的なるもの。

という発想が市太郎の商才だった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

日本生命保険相互会社 一八八九年(明治二十二年) 滋賀県彦根出身で第百三十三国立銀行頭取だった久世助三郎(ひろせ・すけさぶろう/1843~1913)が地元的地縁的相互扶助組織からヒントを得て、大阪府知事に「有限責任日本生命保険相互会社」の創立願いを提出した。東京帝国大学教授の藤澤利喜太郎(ふじさわ・りきたろう/1861~1933)が日本の諸統計を用いて作成した「本邦死亡生残表」で生命保険の有用性を力説、七月四日に受理され、九月二十日に事業を開始した。

『ニッセイ一〇〇年史』 一九八九年(平成二) / 日本生命保険相互会社編 / 三〇三頁 / 非売品。

グスタフ・タウシエック Gustav Tauschek / 1866~1964。オーストリアのウィーンに生まれ、パンチカード式計算機の開発に従事した。磁気ドラムメモリーの開発者でもある。

ラインメタルパンチカード社 一九二八年、米IBM社に買収された。

グスタフ・デイビッド・サンドストランド Gustaf David Sundstr and / 1880~1930。

袋物 ふくろもの…文字通り「袋」の形をした物入れ。古くは、腰に小さな袋を下げた古墳時代の埴輪が出土している。口を閉める組紐や金具の製造元と武具・馬具の製造元が共通していたこともあって、森村組は江戸の武家屋敷を相手に両方を商っていた。

片岡直温 かたおか・なおはる / 1859~1934。高知県に生まれ、まず寺の小僧となり、一八八〇年に兄直輝(一八五六)

一九二七、海軍大主計ののち日本銀行大阪支店長を経て大阪瓦斯社長)を頼って上京した。内務省に入り滋賀県警察部長となったが、一八八九年、弘世太郎と共同で日本生命保険を設立した。のち社長兼任のまま衆院議員となり、若槻礼次郎内閣で蔵相に就任したが、震災手形の処理をめぐる野党との答弁が昭和金融恐慌のきっかけを作った。

安政大地震 前年十一月にも大地震が関東・東海地方を襲って東海道の交通が途絶した。十二月には江戸で大火が発生、明けた安政二年は諸外国の艦船来航に加え、三月に日本橋・浅草に火災が発生するなど、江戸市中に不安が広がりがつあった。十月に発生したこの大地震が市民に心理的動揺を与え、幕末への歩みを加速させたと指摘する向きもある。

藤田東湖 ふじた・とうこ / 1806~1855。通り名は「虎之助」、諱は「彪」(たけき)。藤田幽谷の子として水戸に生まれ、水戸藩に出仕した。彰考館編集、同総裁代理を勤め、水戸の徳川斉昭が幕府に出仕するのに伴って海岸防禦係、側用人となり、橋本佐内、横井小楠、西郷隆盛らと交友した。

日米修好通商条約 安政五年(一八五八)六月十九日、神奈川沖停泊のアメリカ東インド艦隊旗艦ボーハタン号艦上で調印された。調印に臨んだのは幕府下田奉行井上清直、目付岩瀬忠震、駐下田アメリカ公使タウンゼント・ハリスだった。これを皮切りに幕府はオランダ、ロシア、イギリス、フランスと同様の条約を結び(いわゆる安政五か国条約)、対して京都の朝廷はこれを不満として条約の破棄を幕府に命じ、かつ長州など勤皇反幕雄藩に外国船打払いの勅命を出した。このときから幕末維新の動乱が始まった。

板垣退助 いたがき・たいすけ / 1837~1919。土佐(高

知県)藩士。旧姓は「乾」。戊辰戦争で大隊司令・総督府参与となり会津攻めを受け持った。維新政府の参議となつたが征韓論に敗れて下野し、七四年「愛国公党」を結成した。八一年「自由党」を結成し自由民権運動の先頭に立ち、八二年四月岐阜で遊説中に襲われ重傷を負った。八七年、政府は自由民権運動を抑えるため、板垣に伯爵を授けたがこれに懷柔されることがなかった。九六年第二次伊藤博文内閣で内相を務めた。

後藤象二郎 ごとう・しょうじろう／1838～1897。土佐藩士。一八六四年、長崎で坂本龍馬から幕府救済の秘策を聞かされ、それをもって藩主山内容堂を説得して幕府に大政奉還を建白させた。維新政府で参与、外国事務係、大阪府知事、参議などを歴任した。七三年板垣退助とともに「愛国公党」を興したが、再三、公職への復帰を図るなど揺れ動いた。八九年黒田清隆内閣、山県有朋内閣、松方正義内閣でいずれも通信相、第二次伊藤博文内閣で農務商務相を務めた。

近代式兵装製作法の習得 もともと森村組は馬匹による陸送業のかたわら、馬具や武具の製造販売を行っていた。諸大名江戸屋敷に出入りし漆塗り金蒔絵の工芸品などの注文を受けたこともあったらしい。このことが明治期の森村組の事業につながっている。

威臨丸 かんりんまる…本造機帆(蒸気機関と帆を併用)船で、排水量は六百トン、長さ約四十九メートル、幅約七メートル、機関の馬力は百馬力だった。三十二ポンド砲十二門を装備し、平均速力は毎時六ノット(約十一キロメートル)とされる。安政四年(一八五七)オランダのカンデルク社で建造され「ヤーパン」号と命名された。日本の徳川幕府からの注文だったためである。アメリカ力東洋艦隊 ペリーが初めて浦賀に來航した一八五三年、

彼は東海岸のノーフォーク港を出て南西に進路を取り、喜望峰を回ってインド洋に出た。日本からの帰路、太平洋を横断して西海岸のサンフランシスコ港に入り、ここを母港とした。東インド艦隊の名が東洋艦隊に改められたのはこのときだった。

山本長五郎 やまもと・ちようごろう／1820～1893。「清水次郎長」で知られる。静岡県清水港の船頭・三右衛門の三男に生まれ、米屋・山本次郎八の養子となった。若いころから喧嘩好きで「清水一家」を率い、甲斐の黒駒勝蔵(本名は小池勝蔵／1832～1871)、尾張の保下田久六、伊勢・桑名の安濃徳(黒田屋徳次郎・本名は中野徳次郎／1823～1874)などと抗争を繰り返して、東海一の大親分となった。一八六八年、維新官軍の東海道総督府から道中探索方に命じられ名字帯刀を許された。明治に入っては山岡鉄舟などの勧めで囚人を使って富士裾野の開墾に当たる一方、蒸気船の建造や地元青年のために外国人教師を招くなど教育にも力を注いだ。

キサラ岬 北海道上磯郡木古内町字亀川にある。更木岬とも。

森村市太郎の商才 市太郎は余剰資金を投資して、海運、卸売、生糸・塩の取引き、金融業などに事業を拡大した。ことに生糸は開国当初、日本の主要な輸出品であつて、養蚕と製糸業が勃興した。ところが生産される生糸の品質が一定しなかった。粗製品が乱売されるようになったため、市太郎が呼びかけ人となって「横浜生糸組合」が創設された。組合は非組合員の生糸商を排除する権益集団でもあったが、品質の安定と値崩れの防止に役立った。組合の跡は横浜市内内に「帝蚕関内ビル」として残っている。

ジャポニスム 長く鎖国していた日本の文物はヨーロッパ人に新鮮な印象を与えた。特に一八六八年にパリで開かれた万国博覧会

に日本が初出展したのをきっかけに、関心が高まった。しかし初期のジャポニスムは総じて「東北アジア志向」というものであって、中国景德鎮風の創作陶器、東洋風でもあり西洋風でもある青銅の置物など、中国人や日本人の目から見たとき驚くほどいびつな「中国」「日本」がもてはやされた。日本の絵画や彫刻、漆器、陶芸などが正しく理解されたのは十九世紀末にアメリカ合衆国シカゴで開かれた万国博覧会である。

アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック Henri Marie Raymond
de Toulouse-Lautrec-Montfa / 1864 - 1901。

042 森村商事

第四十二

森村商事

一

ジャポニスムの発端となったのは、万国博覧会というものである。

われわれには一九七〇年（昭和四十五）に大阪・千里丘で開かれた「万博」のイメージが強い。岡本太郎の作になる太陽の塔がそびえ、参加国ごとのパビリオンが立ち並び、アポロ十一号が持ち帰った月の石が展示された。著名デザイナーによるミニスカートに身を包んだ案内係を「コンパニオン」と呼ぶのだということを、わたしたちは知った。

そのときの統一テーマは「人類の進歩と調和」だったが、ベトナム戦争に加担し、公害問題を未解決のまま放置している日本政府がそういうテーマを掲げるとは何ごとであるか、と憤慨しつつ、真夏の炎天下、広大な会場を見て歩いたことを憶えている。

こういう統一テーマ形式になったのは第二次大戦をはさむ十八年の空白を隔て、一九五八年四月に再開されたブリ

ュッセル万博からだった。それ以前は、一八五一年にロンドンのハイドパークで開かれた第一回万国大博覧会から一貫して、ともかく各国が一押し二押しの商品を出展し、それぞれの輸出振興を図ることに目的があった。

第一回ロンドン万国博覧会はヴィクトリア女王が統治する大英帝国全盛の時期であり、日本は嘉永四年、すなわちアメリカ東インド艦隊ペリー提督来航の二年前に当たる。二十五か国の参加で始まった万博は回を追うごとに規模を拡大し、日本が初めて出展したのは一八六七年のパリ万博だった。

幕府は將軍慶喜の実弟である徳川武昭を団長とする使節団を送り、大仏のハリボテや薩摩、鍋島の陶器を出展した。それ以前にも浮世絵が一部のヨーロッパ文化人の興味を集めていたが、これがきっかけとなってブレイクアウトした。森村は欧米人が喜びそうな品物を探して、全国を回った。日本人の目で「これこそ日本的」という物は選ばなかった。反対に日本人が眉を顰めるほどゴテゴテした、金ぴかの陶器や蒔絵が売れた。そこで彼は職人たちに細かく注文を出して、輸出用の「日本」を作り上げた。なかには中国風の意匠を日本風にアレンジした商品もあった。初期のジャポニスムの原点は森村市太郎にあるといつていい。

始めは横浜に住む欧米の貿易商を通じて商売をした。だ

が、それでは利が薄かった。ニューヨークの六番街に支店「日ノ出商会」を出したのは一八七六年（明治九）である。おそらく海外に事業拠点を開いた最初の企業ではなかったか。

ニューヨークに現地法人を設立したのは、貿易事業に本腰を入れるため、この年三月に「森村組」を合資会社に改組した一環だった。森村は海外諸国との交易を創業する精神を

四海兄弟、万国平和、共同幸福、正義人道のための志願者の事業と決心し創立せし社中なり

と述べ、次の五か条をもって社訓とした。

一、私利を願はず一身を犠牲とし後世国民の發達するを目的とす。

一、至誠真実を旨とし約束を違えざる事。

一、嘘言、慢心、怒、驕、怠を慎む事。

一、身を汚すなかれ、朋友は肉身より大切なり。和合共力する功果、金銭などの及ぶ所にあらず。

永久の靈友也。

一、神の道を信じ万事を経営する自覚を確信す可し。

上記の条鉄石心を以て確守し一身を守り世の光と成る可し。
（筆者注… 共力＝協力、功果＝効果）

彼は敬虔なキリスト者でもあった。

二

合資会社への改組を機に、市太郎は東京・銀座四丁目に本社を開設した。同時に十五歳年少の異母弟・豊（とよ）をニューヨークに派遣し、自らが仕入れた蒔絵や印籠などをアメリカで販売した。設立から十五年後の一八九一年（明治二十四）には年間売上高が二十万円を超え、傘下に森村銀行を持つ財閥的な事業グループを形成していた。

森村市太郎という人は、商売がうまいとか損得勘定に高いとかでなく、発想がユニークで新奇性に富んでいた。新しいものが好きで、ことに実用に立つものに興味を惹かれたらしい。

一八八八年（明治二十）、森村は二人の息子（明六、開作）のために、横浜の外国人居留地に向いてアメリカのゴーマリー&ジェフリー社製の「オーディナリー」を購入した。前輪が大きく、後輪が極端に小さな自転車で、その形状から「だるま自転車」とも呼ばれた。現在の乗用車

よりはるかに高価で珍しかった。

二人の息子はこれで東京・三田の慶應義塾大学に通い、一八九三年（明治二十六）の夏には東海道走破までやった。市太郎は息子たちに、そういう挑戦的な行動を促していた節がある。

明六、開作の兄弟は大学を卒業すると同時に相次いでニューヨークに渡った。二人はアメリカ合衆国でのビジネスを通じて、森村組の将来を担うべく帝王学を学ぶことになる。

順風満帆に見えた森村組だったが、「好事魔多し」のこゝとわざ通り、一八九九年（明治三十二）、跡継ぎである明六がニューヨークで病没するという事件が起こった。そればかりか、明六の死から五十六日後、今度は創業以来唇齒の關係にあった弟・豊が世を去るという不幸が出来た。

市太郎は大いに落ち込み、事業に対する意欲を失いかけた。多くの人が同情の言葉をかける中で、福沢諭吉は声を荒げて「へこたれるな」と激励した。

この一言が市太郎の気持ちを奮い立たせた。

このころ森村の関心は、白磁の陶器に移っていた。パリで開かれた万国博覧会に出品され、脚光を浴びた白磁の大皿を日本で作れないかと考えたのだ。

ところが陶器というのは、中世アジアにおける中国・朝鮮の陶工がそうであったように、工法や釉薬の組成などが門外不出の秘伝とされていた。ヨーロッパにおいても同様であって、ましてそれを遠いアジアの外国人に教えるなどということはあり得る話ではなかった。

そこで森村は巨費を投じて日本から陶工をヨーロッパに派遣し、工房に入れて工法を学ばせ、帰国するのを待って試作する作業を繰り返した。人が知識と技術を習得するのだから時間がかかる。

しかも作ろうというのは直径三十センチを超える大皿である。用途は単品の工芸品でなく、ディナーセットであるため焼成が均一でなければならない。何とか製品化のめどをつけるのに二十余年という時間を要した。

一九〇四年（明治三十七）、愛知県名古屋市則武に「日本陶器合名会社」を設立した。日本陶器が生産するボーン・チャイナは、所在地の名を取って「ノリタケ」のブランドが付けられた。現在のノリタケ・カンパニー・リミテッドである。

名古屋ドーム球場が建設されたとき、偶然、同社の発足を明記した陶板が掘り出された。その陶板には筆書きで次のような文字が書かれていた。

森邨組創立已來日本陶器之完全ナラサルヲ慨シ改良ノ爲メ
ニ盡瘁スル事已ニ二十有餘年今ヤ我陶器ヲシテ歐洲ノ精品
ニ比肩セシメ益完美域ニ進メ以我國貿易ヲ隆盛ナラシメン
ガ爲メ茲ニ日本陶器合名會社ヲ設立ス誓テ至誠事ニ当タリ
以テ素志ヲ貫徹シ永遠ニ國利民福ヲ圖ル事ヲ期ス

明治三十七年一月一日

森村市左衛門 大倉孫兵衛 廣瀬実栄 村井保固

大倉和親 飛鳥井孝太郎

一九一四年（大正三）七月に欧州で第一次世界大戰が勃
発すると、欧州からの輸入が途絶したアメリカからボーン
チャイナの注文が殺到した。同社が苦勞の末に完成させた
白磁の大皿は、ピーク時に十萬セットを輸出したといわれ
る。輸出だけでなく、皇室や外務省、海軍、帝国ホテル、
精養軒などに採用され、三越百貨店でも扱われるようにな
った。

また国内における重工業の隆盛で電力の需要が急増し、
芝浦製作所などから陶製絶縁体（碍子・がいし）の大量注
文が相次いだ。加えて近代住宅のブームで衛生陶器（便器）
の需要も高まり、日本陶器は空前の好業績が続いていた。

これに対応して個別の専門会社として設立されたのが東
洋陶器、日本碍子、日本特殊陶業などであり、資金援助な

どで關係を強めたのが伊那製陶所、日本陶器から分社して
いったのが帝國製陶である。日本のセラミック産業は、す
べて森村市太郎から始まっている。

三

森村市太郎について、余録を記しておく。

事業家としての評価が高く、一八八二年（明治十五）に
日銀監事に任命されたのを皮切りに、八五年五月、ときの
工部卿・佐々木高行に宛てて「電話會社創立ノ義ニ付請願」
を提出した。渋澤栄一の呼びかけに応じたものであった。

一八八八年には日本商工會議所の創設に参加、ほぼ同じ
時期に甲武鉄道（のち中央線、南武線、横浜線）の建設を
実現し、富士製紙の設立や富士紡績の再建にも尽力してい
る。経営の再建に成功した富士紡績は、ほとんど無償で尽
力してくれた恩に報いるため、

「せめて会社の前にかかる橋にお名前を残したい」

と願ったが、森村は聞き入れなかった。

——私利を願はず。

の精神を示す白眉は、北里柴三郎のために東京・白金三
光町に建設した「土筆岡養生園」であろう。この施設は国
内初の近代的な結核診療所として記録される。

北里柴三郎はベルリンに留学し、細菌学と伝染病に関する研究者としてヨーロッパ世界で知られた。イギリスのケンブリッジ大学から細菌学研究所長への就任要請を受けたが、北里は、

「自分は日本の公衆衛生の向上に尽くしたい」と、その招請を断わった。

一八九二年に帰国した北里に、日本国政府は冷淡だった。内務省への復職も認められず、研究所設立の要望も無視されてしまった。

内務省衛生局長だった長与専斎が、この話を親友の福沢諭吉に伝えた。同情と義憤に駆られた福沢は、東京・芝公園内にあった自分の土地に研究所を建て、北里に無償で提供した。市左衛門はこのとき、研究用の器具などを購入する費用として一千元を寄付している。

だけでなく、諭吉と市左衛門は北里に、

—— 結核を治療する療養所を設立してはどうか。

と勧めた。

たまたま白金三光町に諭吉個人所有の土地があった。諭吉と市左衛門が資金を折半で負担し、翌九三年九月、諭吉命名による「土筆岡養生園」が開所した。森村組が拠出したのは五千元に及んでいた。現在、その跡地に北里研究所付属病院が建っている。

明治の成功者が一様にそうであったように、森村も人材の育成に強い関心を示している。

日本陶器に夜学校を設けて従業員教育を行い、先に逝った長男明六、異母弟豊の名を取った「森村豊明会」を通じて日本女子大や三輪田学園、高千穂学園、慶応義塾、早稲田大学、東京工業大学、北里研究所などに多額の寄付を行っている。

女性の知徳教育を図るべく自ら理事長となって力を注いだ遺産は、現在も横浜市長津田の森村学園に引き継がれ、豊明会もまた活動を続けている。

のち男爵に叙せられ、一九一九年没。八十一歳だった。岩崎、浅野、川崎、古河といった大事業家の少なからずが「政商」と称され、あるいは「成金」と呼ばれている。これに対し「紳商」の文字が供されているのは、ひとり森村のみである。

四

「中興の祖」というべき森村市太郎が没したあと、社長に就任したのは次男の開作、すなわち七代目市左衛門である。

七代目市左衛門は兄・明六と同じく慶應義塾を卒業し、

一八九三年に渡米してニューヨークのモリムラ・ブラザーズ・カンパニーに勤務した。帰国後、後継者として重きをなし、六代目市左衛門の晩年は実質的に森村組の経営に当たった。

一九一七年五月に衛生陶器部門を分離して「東洋陶器」を設立した。森村組を「株式会社森村商事」に改組したのは七代目である。

実用に適した新しもの好きという点で、六代目と七代目は共通している。やや異なるのは七代目がアメリカ、カナダでビジネスを学んだという点であろう。

彼は日本で初期の自動車ドライバーとして日本自動車倶楽部を發足させている。また、ほとんど最初のゴルフアーだった。また六代目と同じように、決断が早かった。

六代目が没した一九一九年に碍子部門を分離して「日本碍子」「大倉陶園」を、一九二四年（大正十四）二月に「伊奈製陶」、一九三六年（昭和十）九月に「日東石膏」「日本特殊陶業」「共立原料」などを設立している。アメリカ流の事業グループを形成したのである。

ところで、前節で筆者は、
—— 第一次世界大戦が勃発すると、アメリカからボーンチャイナの注文が殺到した。
—— ということを書いた。

日本陶器は注文に応じて多品種少量の高級陶器を生産していたため、伝票が多岐にわたっていた。それを処理するために雇っていたソロバン部隊は、平常時でも百人、ピーク時は二百五十人に及んだという。

このため同社は一九二二年（大正十一）、増大する一方の伝票の処理を機械化することを計画し、翌二三年十月に取締役の加藤理三郎をニューヨーク市に派遣した。

『森村一〇〇年史』はこう記す。

日本陶器(株)ではデザイナー・セツトが加わって、その生産管理はきわめて複雑になっていた。そのうえ、大戦の反動不況で生産コストの切り下げが要望され、担当者の苦勞は並みだいていではなかった。常時一〇〇名を超すそろばん係の女子が懸命の努力を続けたが、なんとしても計算が追いつかない。この問題を解決するため、加藤を合理化の進んだアメリカへ派遣したのである。

高橋二郎をはじめとする学識者の啓蒙活動や国勢院での実用結果、さらにニューヨークに事務所を構えるモリムラ・ブラザーズ・カンパニーから入ってくるアメリカの最新事情などから、日本陶器はパンチカード型統計会計機械装置の有用性を認識していたのであろう。

それにしても、名古屋市に本社を置く陶器会社が、現在の貨幣に換算して数億円にも相当する、しかも操作方法が全く分らない近代機械装置を購入しようとしたのだから、勇断というほかない。


~~~~~ 補 注 ~~~~~

**輸出用の陶器** その代表格は薩摩錦手の皿や碗、有田・九谷の大型香壺である。香壺は本来、香木を湿気から防ぐための陶器だったが、明治初年からヨーロッパに輸出され、次第に大型化した。天井が高い宮殿などに飾るには巨大な壺でないといふ目立たなかったためである。森村は同じような陶器や蒔絵を横浜で作らせてせつせと輸出した。「ヨコハマもの」と呼ばれる。

**森村 豊** もりむら・とよ／1854～1899。五代目市左衛門と後妻もと子との間に生まれた。慶應義塾を出て助教を務めていた。一八七六年、福沢諭吉らが内務省と共同で実施した「米国商法実習生」に選ばれた。そのとき市太郎は妻とめの嫁入り道具だった和服などを売却して異母弟ら五人をアメリカに送り出した。豊はニューヨークで共同の下宿生活を送り、イーストマン商業学校を三か月で卒業した。

日本から送られてくる刀剣や古美術品、陶器などは仕入値の何倍でも飛ぶように売れたが、為替制度が整っていなかったため、市太郎と豊は日本とアメリカでそれぞれ資金繰りに奔走しなければならなかった。市太郎はのち、「森村組の事業は実に弟が土台をつくってくれたのであります。弟がいなければ今日のような好結果を見ることはできなかったでしょう」と語っている。

**森村の事業グループ** 陸運、開運、金融、養蚕、貿易など多岐に渡っていた。二〇二三年現在ではノリタケカンパニーリミテド、OTTO、日本ガイシ、INAX、日本特殊陶業、共立マテリアル、大倉陶園、森村商事などが「森村グループ」を構成している。

明治二十四年の二十万円　ほぼ同時期に建設された鹿鳴館の総工費が十八万円だった。現在の貨幣価値にすると四十億―五十億円とされるが、人件費を勘案して当時と同じ工法で鹿鳴館を再建するとすれば、二百億円以上の予算を見積もらなければならない。

**オーディナリー** 前輪が極端に大きく、その前輪の上に座ってペダルを漕ぐ形式の自転車。「オーディナリー」は英国の呼称で、米国では「ウィーラー」だった。このとき一緒に発注したのは中上川次郎吉（三井財閥）、日比谷新次郎（鐘ヶ淵紡績）、岩谷鷹藏（天狗煙草本舗）、古河虎之助（古河鋳業）、山口勝蔵（機械商）、吉田眞太郎（吉田組）などで、計十二台だった。吉田眞太郎のちに双輪商会を設立し、日本で初のオートバイ（自動自転車）「トーマス号」を発売した。

**オーディナリーでの東海道走破** 現存する写真を見ると、市太郎が購入した「オーディナリー」にゴムのタイヤは付いていない。二人の息子はこのオーディナリーが自慢だった。大学が夏休みに入ったのをいいことに、兄弟は「オーディナリーで東海道を走破しよう」と思い立った。神戸まで汽車で行き、帰路は野宿をした。

父親の許可を得た二人は意気揚々と出発し、途中、伊吹山の峠でやや難儀をしたものの、何とか興津までたどり着いた。残すは箱根越えである。早朝に興津を立ち三島を通過したのは午後三時、箱根の坂に取り付いたころには日が暮れ、おまけに激しい雷雨に見舞われた。そこで二人は駕籠屋を雇って後ろから押してもらい、下りはオーディナリーにロープを結んで後ろから引っ張ってもらった。駕籠かきをブレイキ代わりにしたのである。やっと思いで箱根の湯本に到着したのは、夜の九時過ぎだった――ということとを、森村開作が雑誌『輪友』に楽しかった少年時代の思い出話

として語っている。

名古屋ドーム球場 工事は一九九四年八月から始まり、一九九七年二月に竣工した。

大倉孫兵衛 おおくら・まごべえ／1843～1921。四谷伝馬町で絵草紙屋「萬屋」を営んでいた。横浜の外国人居留地で浮世絵や絵草紙を売り、舶来品を江戸で売った。そこで森村市太郎と知り合い、市太郎の異母妹ふじと結婚した。

村井保固 むらい・やすかた／1854～1936。慶應義塾で学び、森村組に入った。ニューヨークのモリムラ・ブラザーズで森村豊の片腕となって活躍した。

大倉和親 おおくら・かずちか／1875～1955。大倉孫兵衛の長男。慶應義塾を出て森村組に入り、モリムラ・ブラザーズを経て日本陶器合名会社の代表社員となった。のち日本陶器、東洋陶器、日本磚子、伊奈製陶の社長となった。

飛鳥井孝太郎 あすかい・こうたろう／1867～1927。東京工業学校（のち東京工業大学）の陶器玻璃工科を出て同志社波理須化学学校（のち同志社大学理工学部）教授を経て森村組に入った。ヨーロッパ諸国を歴訪後、日本陶器の技師長となり、一九一一年名古屋・千種に帝國製陶（のち鳴海製陶）を設立した。

甲武鉄道 東京、銀座界隈の事業者が中心となって政府に請願し、民間資金をもつて一八八九年に新宿―八王子間が開通した。その後、青梅―八王子、八王子―横浜、立川―川崎間が開通している。八王子に集積された生糸と木材を東京、横浜に輸送するのが目的だった。

北里柴三郎 きたざと・しばさぶろう／1852～1932。肥後国（熊本県）に生まれ、東京帝国大学を出て内務省衛生局に入

った。一八八五年ドイツに留学しロベルト・コッホに師事し八九年破傷風菌の培養に成功し血清療法を編み出した。九二年帰国し、九四年香港にペストが流行したとき現地に赴きペスト菌を発見した。北里研究所はこれによりドイツのコッホ研究所、フランスのパスツール研究所と並ぶ近代医学の三大研究所に数えられるにいたった。一九一六年慶應義塾大学医学部長ののち勸選議員となり、二三年日本医師会会長となった。

長与専斎 ながよ・せんさい／1838～1902。肥前（長崎県）大村藩医の家に生まれ、一八五四年一大阪に出て適適斎塾に入った。杉亨二の後輩に当たるが、杉が統計の道を志したのに対し、長与は医学に専心し一八六八年（明治二）長崎医学学校長となった。福沢諭吉とは大阪の適適斎塾で同期だった。のち明治政府の内務省衛生局長を十九年間務め、コレラなど伝染病の防疫と治療に尽力した。

北里研究所 福沢と森村は上下六室の研究所（建坪十余坪、二階建て）と四十坪の住まいを建てて北里に無償で提供した。土筆岡養生院は開所時、病室六十を備え、のち増築されている。一九一四年東京帝国大学の付属機関となった。

森村学園 当初は森村組が東京・高輪に保有した一千五百坪の敷地に校舎があった。現在は神奈川県横浜市緑区長津田町深田二六九五にあり、幼稚部、小学部、中等部、高等部から成っている。

森村市太郎への評 大隈重信は「森村氏とは四十年來の友人であるが、実に立派な紳士である。（中略）極めて平民的な人で、身を奉ずること厚く、品行方正、人格高尚、待合遊びなどは大嫌いだである。当今の実業家には珍しい立派な人である」と評した。（『実業之日本』一九〇七）

**森村商事** 当初は森村組のニューヨーク支店「モリムラ・ブラザーズ・カンパニー」の注文に応じて、日本から陶器などを輸出する部門として設立された。

**日本自動車倶楽部** 六代目が健在だった一九一〇年十二月二十日、開作が大倉喜七郎らとともに東京、横浜在住の自動車保有者に呼びかけて設立した。会員には自動車を保有しない者も参加し、自動車のための法律を整備するとともに、道路を公共財として位置づける啓蒙活動の推進を謳っていた。会長には大隈重信が選任された。

**森村開作とゴルフ** 開作は帰国後、実業界にゴルフを普及させるべく、一九二二年（大正十二）、横浜市に本格的なゴルフ場を作った。現在の程ヶ谷カントリークラブである。二四年日本ゴルフ協会の発足とともに会長に就任した。

**加藤理三郎** かつう・りさぶろう…のち森村商事の専務となって七代目市左衛門を支えた。

## 043 水晶と岩田

第四十三

水品と岩田

一

一九二五年（大正十四）の五月に、森村商事は米コンピューティング・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社と代理店契約を結んだ。このとき森村商事にどれほど勝算があったかというと、明確に肯定するのはなかなか難しい。

日本陶器だけがこの機械の恩恵を受けるのは勿体ない。日本の官公庁や会社でも必要としているに違いない。自分たちの力で国内に普及させることができれば、日本の進歩発展のためにどれだけ役立つことだろう。

というのが代理店契約の立役者・水品浩の言葉として伝えられている。この声に日本陶器の社長・大倉和親、取締役支配人・加藤理三郎はこたえようとし、そして七代目左衛門も、間違いなく需要が顕在化すると信じていた。

ただし、森村商事の内部には、CTR社の代理店になったことを歓迎しない空気があった。既存の主力事業である生糸と陶器の輸出で十分な利益が確保できているのに、なぜわけの分からない計算機などを扱うのか、という意見である。

この意見には、水品浩への反感も含まれていた。

——社長に取り入る青二才。

といった感情であった。

結果として、ホレリス式統計会計機械装置の輸入販売は、社長である七代目森村開作が直接指揮を取る特命プロジェクトの色彩が強かった。

水品浩は、一八九五年（明治二十八）に神奈川県横須賀に生まれた。父・貞四郎は横須賀鎮守府の会計書記を務めていた。水品は父のあとを継いで海軍を志したが、極度の近視であったため海軍兵学校をあきらめざるを得なかった。旧制中学卒業とともに、貿易に従事することを望んで森村商事に職を求めた。

入社して六年目、森村商事のアメリカの現地法人であるモリムラ・ブラザーズ・カンパニーに駐在員として派遣された。森村開作は水品が勤勉であるばかりか、ニューヨークでも夜学に通って英語を学ぶなど向学心に富み、かつ優秀な頭脳の持ち主であることを理解して、破格の人事をも

つて処遇した。このとき水品は、渡航の船が二等船室であることを知って、森村開作から五百円の大金を前借りしてゐる。

「はじめから二等船室では、アメリカでの仕事がおぼつかぬではありませんか」

というのが理由だった。たかだか二十五歳の青年が抱く大志を可として、五百円という大金を抛出した七代目も、たしかに人物であつた。

水品は本社の要請を受けて、日本陶器のためにアメリカにおけるパンチカード式統計会計機械装置について事前調査を行つた。その結果、CTR社のホレリス式に魅力を感じてゐた。パワーズ式も有力な候補だったが、すでに三井物産がパワーズ社と東洋総代理店契約を結んでいたこと、ホレリス式が電気式であることなどが理由だった。

また水品はフレデリック・テイラーが提唱した経営管理法「テイラー・システム」の解説書『モダン・ビジネス』を熟読してゐた。彼はそれを通じてビジネス英語を学ぶとともに、計数的な分析と機械化による合理化手法を理解してゐた。

——どうせ英語を学ぶなら、電話で喧嘩ができるほどになりたい。

と希望した水品は、アメリカ人の家に下宿し、夜学に通

つて経営学や会計学などを習得した。大学の夢を捨ててもなお夜学に通つて大成したフレデリック・テイラーに触発されるところがあつたのである。同書は水品が帰国した際に大切に持ち帰り、現在も水品家に残つてゐる。

## 二

加藤理三郎は一九二三年十一月にニューヨーク市に渡ると、同市で開かれていた事務機械展を水品の案内で見学し、パンチカード式統計会計機械装置の有用性を改めて確認した。加藤はホレリス式、パワーズ式の機種選定や輸入に伴う諸問題をモリムラ・ブラザーズ・カンパニーに一任して帰国した。このあと、水品は両機種を改めて比較検討した結果、

「電動式のホレリス式を推奨する」

という報告書をモリムラ・ブラザーズ・カンパニーの副支配人だった中山武夫に提出し、森村市左衛門もこれを了解した。

CTR社は日本にホレリス式統計会計機械装置を輸出することに、事務手続き上では合意したものの、いざ契約を結ぶ段になつて齟齬が生じた。

森村商事、つまり水品は統計会計機械装置一式を購入す

るつもりでいた。ところがCTR社はレンタル方式を主張したのだった。この問題では森村商事が折れた。

これでまとまるかに見えた契約だったが、CTR社から別の問題が提示された。

「日本陶器は森村商事の関連会社とはいえ、出資者も経営役員も異なる別会社である。森村商事にレンタルしたマシンを日本陶器に又貸しするのは、契約外である」というのだ。

さらに設置場所が名古屋であるため、  
「責任をもって保守サービスが提供できない」というのだった。

CTR社は十月十一日、最終的な結論として、

「マシンは提供できない」

と回答してきた。

交渉は暗礁に乗り上げてしまった。

このとき水品は副支配人の中山武夫に、

「森村商事がCTR社の日本代理店になれば、マシンを

又貸しすることにはならない」

という代案を示したと伝えられる。

またCTR社に対しては、

「それならば、私にその技術を教えていただきたい」と申し出た。

CTR社は当初、代理店契約を結んでいない会社の社員を受け入れることに難色を示したが、再三再四の強い申し出に副社長ブレトマイヤーが根負けしたと伝えられている。根負けしたのはCTR社ばかりではなかった。

モリムラ・ブラザーズ・カンパニーの副支配人中山武夫、森村商事の森村市左衛門もまた、水品の熱意に根負けした。彼がパンチカード式計算機の保守サービスを担当するということは、一つには長期にわたるCTR社での技術研修に優秀な社員を出すことであり、研修後は日本に戻さなければならぬことを意味していた。会社としては営業上、直近の機会損失や、代わりとなる要員の手配など、かなりの負担を覚悟しなければならない。

果たして水品は、一九二四年十一月から翌二五年三月まで、ニューヨーク州エンディコットの工場で、CTR社の実習生として研修を受けることができた。

かくして、日本陶器が伝票処理の機械化を検討してから三年後の一九二五年五月二十一日、森村商事はCTR社と代理店契約を締結し、六月一日にホレリス式統計会計機械装置一セットがニューヨーク港から積み出された。

——輸送に当たったのは日本郵船「前橋丸」であった。という記録が残っている。このマシンの輸入がよほどの大ごとであったことを示している。さらに、日本陶器名古

屋事務所に設置されたのは九月であつたと記録される。

三

日本陶器の「その後」を記しておく。

岩田壮一のことである。

日本陶器の岩田壮一は、パンチカード型統計会計機の歴史に最初の一步を刻んだユーザ側先の先駆者となつた。だけでなく、計算機を使つて経営した最初の人物でもある。

一九〇三年（明治三十六）名古屋生まれというから、水品浩の八歳年下である。一九二五年の春に東京商科専門学校専門部を卒業して日本陶器に入社した。

同社の名古屋事務所にホレリス式パンチカード統計会計機が設置されたのは、入社した年の九月だつた。同時に岩田は、大学で經理を勉強した。という理由だけで、担当者に任じられた。

話が前後するが、日本陶器は早くから、従業員による作業改善や發明考案を奨励し、生産設備の機械化、自動化に積極的に取り組んでいた。一九〇六年五月に定められた工場規則の第二十一条には、

製造技術或ハ業務上ニ付特種改良ノ新案ヲ案出若クハ發明

シタル場合ニハ其趣直チニ口頭ナリ書面ナリヲ以テ之ヲ技師長ニ申出スヘシ會社ニ於テハ公平ニ之ヲ力調査ヲ遂ケ其結果有効ト認メタルモノニハ金壹圓以上百圓以内ノ賞與ヲ與フル「アルヘシ」。

（筆者注：「」は「こと」と読む）

とあつて、工員からの業務改善提案や機器の改良工夫を積極的に採用しようとした。さらに「効程増進研究法」という解説書を作成して経営の合理化を進めていた。ホレリスの統計会計機を受け入れる下地はすでにできていた。水品浩は八歳年下のこの青年を、ことのほか目につけた。

最初は、女子事務員がやっていたソロバンの仕事をパンチカード装置に移行することでした。

水品さんは足しげく名古屋までやってきて、いろいろ相談にのつてくれました。

岩田はのちにそう述懐している。

水品は、同時に故障の修理方法も岩田に伝授した。セツトするワイヤーの総延長は六十マイル（九万メートル）以上ある、ということまで教えた。とはいへ装置をともに動かすのは容易ではなかつた。

英文のマニュアルと首つ引きで格闘し、そろばん係の女



子社員を選んで猛特訓して四人のパンチャーを養成した。パンチ業務を仕事とした初の日本人女性として、古田土きみ（旧姓「服部」）、堀田まさ、船橋つや、吉田星子の四人の名が残されている。

こうした悪戦苦闘ののち、何とか満足のいく表が作成できるようになった。

「新入社員にしては、なかなか出来がいいじゃないか、とほめられた」

というが、自在に表を作成できるようになるのに岩田は数年を要している。ホレリス式パンチカード装置を使いこなすのは、それほど難しかった。

岩田は統計会計機械装置を伝票処理ばかりでなく、生産管理や人事・給与計算など事業全般に活用した。日本人初のCIO（Chief Information Officer）として、記録にとどめられるべきであろう。

日本陶器に設置されたホレリス式統計会計機械装置の一号機には後日談がある。

日米間の電圧と周波数の違いである。設置されたものの、それを解決するための付加装置を新たに開発しなければならなかった。森村商会は陶製絶縁体で取引きがあった芝浦製作所に付加装置を特注した。本格運用に入ったのは一九二六年に入ってしまった。

ところが本稼働が始まって間もなく、一号機の集計装置は東京で開かれた森村商事の展示会に搬出され、翌一九二七年に戻ってきた。と思う間もなく、八月六日に倉庫から出た火災で電動カードパンチ装置一台を残して全焼してしまった。日本陶器は一九二八年、改めてホレリス式統計会計機械装置一セットを設置した。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

水品 浩 みずしなこう／1895～1978。第二次大戦前、日本ワットソン統計会計機械の経営トップに就いたが対米開戦と同時に逮捕され、釈放ののち三重県伊勢にあった神戸製鋼の工場で計算機の整備や修理を命じられた。第二次大戦後、日本IBMの第二代社長となった。

三井物産の東洋総代理店契約 三井物産の吉澤審三郎は、パワーズ社に就いてCTR社とも同様の契約を結ぶ交渉を続けていた。しかしCTR社のレンタル制度が妥結のネックとなった。

テイラー・システム フレデリック・テイラーが編み出した科学的経営管理手法で、課業管理、計画機構、職能的管理組織、統制システムなどを組織的・計画的に展開する一方、労使協調の管理論を唱えた。水品がニューヨークに赴任した当時、アメリカで最新の経営手法として脚光を浴びていた。

フレデリック・テイラー Frederick Winslow Taylor／1856～1915 法学を志してハーバード大学に入ったが、目の病のため学業をあきらめて鉄鋼所の工具になった。機械工、組長、職長、保全職長、設計室長、技師長を経るまでの間、夜学で大学を卒業した。のちベツレヘム鉄鋼所の顧問などを歴任するなかで、独自に編み出したのが「テイラー・システム」である。

日本では大正デモクラシーによる労働運動の高まりに適應する経営手法として取り上げられ、第二次大戦後の日本の産業界における労使協調を基盤ともなった。日本陶器がホレリス式統計会計機械装置と同時に導入して業務改善に活用したのは、早いケース

である。

『モダン・ビジネス』 全二十四巻。ハミルトン・インステイチ・ユート社刊。

森村商事とCTR社の齟齬 最初、CTR社はニューヨークのモリムラ・ブラザーズ・カンパニーのオフィスに設置するのだと考えていた。ところがニューヨークでなく名古屋だということが分かって話がこんがらがった。

岩田壮一 いわた・そういち／1903～1980。一九六〇年日本陶器社長、一九六五年日本特殊陶業取締役、日本碍子取締役、東洋陶器取締役、一九七三年中部生産性本部会長を歴任した。のちに名を「蒼明」と改めた。

東京商科専門学校専門部 のち一橋大学となった。

日本人初のパンチャー 四人の氏名は『森村一〇〇年史』に記載されている。ノリタケ・カンパニー・リミテッド広報室から資料提供を受けた。

044 展示会

第四十四

展示会

一

『日本アイ・ビー・エム50年史』などによると、森村商事がコンピューティング・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社とホレリス式統計会計機械装置の東洋代理店契約を結ぶに当たって、その立役者は水品浩という一個人であったかの印象を受ける。なるほど、水品浩という人材がいなければ、ホレリス式統計会計機械装置は一九二五年の時点で日本に輸入されなかったかもしれない。しかし、当の社長である森村市左衛門が統計会計機械装置の有用性を理解し、自社の新規事業として将来に期待していなければ、水品の構想は実現しなかった。また、日本陶器の加藤理三郎が統計会計機械装置の導入に強い意向を継続して示していなければ、森村商事による輸入は達成されなかったといつていい。

さらにいえば、ニューヨーク副支配人の中山武夫が、水品浩をしてCTR社エンディコットの工場で研修させてい

なければ、CTR社副社長のブレトマイヤーがアジア市場の将来性を見ていなかったなら——つまり加藤理三郎、森村市左衛門、中山武夫、水品浩など、明治生まれの気骨が、日本にホレリス式統計会計機械装置をもたらしたのだった。一九二五年の五月、モリムラ・ブラザーズ・カンパニーのニューヨーク副支配人・中山武夫は、日本の森村商事本社に宛てて一通の手紙を送った。CTR社エンディコット工場で研修を終えた水品浩が、機械の積み出しに先立ってシアトル経由で日本に向かったことを告げ、CTR社との代理店契約が無事に締結されたことを報告したものであった。その中で中山はこう記している。

日陶ニ於テ愈々実用ノ曉キハ其活用ノ程度ニ依リ内地緒工業銀行ニ使用セシムルノ途ハ充分有之事ト信ジ申候、此器械ハ保險会社、鉄道、政府、紡績会社等活用シテ此レヨリ利益ヲ得ン事ハ確実。

日本陶器名古屋事務所に設置されたホレリス式統計会計機械装置は、五段タービュレーター一台、ソーター、電気式穿孔機、パンチカード、付属品一式で総額は四千七百七十二ドル二十一セント、輸入関税が二千百六十九円一銭だった。当時の為替レートで一ドル＝二円とすると、関税を含

め一万二千元以上になる。

——一万円の貯金があれば、利子だけで食べていける。
と当時は言われていた。

一九二五年における男子職工の給与を調べると、初任給は月額二十円前後だった。一般の企業が事務用に使っていたタイガー式計算器の最高モデルが約五百円だった。このことを考えると、アメリカ製の統計会計機械装置がいかに高価だったかが分かる。

日本陶器に向けたホレリス式統計会計機械装置が到着した直後、通信省の貯金局から引き合いがあった。続いて一九二六年六月に三菱造船神戸造船所が国内第二号ユーザーとなる契約を結んだ。

三菱造船は次いで二七年、長崎造船所にもホレリス式を採用した。同社は一九二二年の軍縮以来の造船不況に対応するため、経営合理化の一環として事務の機械化を調査・研究していたのだった。

出だしは順調に見えた。ところが、国内経済は悪化の一途をたどっていた。第一次世界大戦で傷ついたヨーロッパ経済が持ち直し、日本からの輸出に依存する必要がなくなった。加えて陸軍の規模縮小が国内経済を減速させた。

CTR社が原則としていたレンタル制度も日本の企業に馴染まなかった。ばかりでなく、レンタル契約の前提とさ

れたパンチカード年間四万枚購入要件や保守サポート費などランニングコストがネックになった。

一九二五年に日本陶器、二六年に三菱造船神戸造船所、二七年に同社長崎造船所と、年間一セットの契約が精一杯で、引き合いも伸び悩んだ。

森村市左衛門と水品浩は、「一年間に五台の契約を取ること」というCTR社との契約を果たすには、思い切った手が必要と考えた。世の中に広く、統計会計機のことを知ってもらわなければならない。機械装置がどのようなもので、どのように動かし、どのような効果があるか。しかし広告をすれば売れるようなものではない。

そこで森村市左衛門は一九二六年（大正十五）の十一月、東京・銀座四丁目にあった森村銀行で、ホレリス式統計会計機械装置の展示会を催すことにした。このために日本陶器に設置されていたマシンが搬入され、岩田壮一も随行して実演に当たった。

さらに森村商事は、展示用として最新式の電気式ソーター、電気式パンチマシン、ベリファイヤーなどを輸入して公開した。ソーターはホリゾンタル（水平）型だったとされる。国内初の計算機展示会がこうして開かれた。森村の声がけとあれば、政財界の要人は見に行かないわけにはいかない。

二

展示会は十一月十九日から二週間にわたって開かれ、中央官庁をはじめ金融機関、保険会社、大手製造業の要人が招待された。招待状には

最新式にして機能顕著なることは申上げるまでもなく現に米國に於て普く使用せられ日日の計算、統計及調査等殆ど応用せられざるなく到底人力を以て企図し得ざる効果を挙げ居り其使用の有無は事業の振否に関係する程の有様にこれあり実地操作の状態を親しく御覧なされたく……。

とあった。

また、モリムラ・ブラザース・カンパニー副支配人の中山武夫は本社に宛てて、

「此機械ノ照会ハギリギリト根強ク進ム」

というメッセージをニューヨークから送っている。

機械の操作実演は水品が担当し、それぞれの機械装置の機能・性能、使用方法などを解説した。今でいう「プレゼンテーション」は、機械装置の性能や操作方法に力点を置かず、レンタル制度のメリットについて強く理解を求める

ものだったという。

大きな期待をかけた展示会だったが、数百人の来場があったにもかかわらず、受注に結びつきそうな引き合いは一件もなかった。森村市左衛門は起死回生の受注拡大をねらったものの、これでは自社の経営幹部を説得することができない。事業を継続するにはリスクが大きすぎた。

そこで彼は、同じ銀座界隈で輸入事務機器販売を営んでいた黒澤貞二郎に相談を持ちかけた。このとき黒澤は、関東大震災の打撃からようやく立ち直ったときだった。

「CTR社の条件次第では、代理店契約を肩代わりしてもいい」という回答だった。この話はのちほど詳述する。

この黒澤貞次郎という人物は、一八七五年（明治八）、東京・京橋の生まれというから、ホレリス式統計会計機械装置の営業権を譲り受けたときは五十二歳、すでに初老の域に達していた。

真珠の御木本幸吉、服部時計店の服部金太郎と並んで「銀座の三偉人」とも称された。三人はともに、若いころ辛苦を経験し独創的な仕事で成功した。その共通点が、お互いを引き寄せたといえなくもない。

ちなみに御木本幸吉は安政五年（一八五八）、三重に生まれ、家業のうどん屋を継いだ。一八九六年、一念発起し

て伊勢・英虞湾に浮かぶ多徳島に真珠の養殖場を設け、研究に着手した。一九〇五年、真田真珠の養殖に成功した。またたくうちに世界のパール市場の六割のシェアを獲得した。

ずっとこのことだが、第二次大戦中、真珠は奢侈品ということで養殖を禁じられた。しかし幸吉はこれに服せず養殖を続けたために、「非国民」の罵声が浴びせられた。

一九五四年没、享年九十六。

服部金太郎は万延元年（一八六〇）、江戸に生まれ、夜店の小僧から時計の修繕工になった。一八八一年に独立して服部時計店を開業し、八七年に現在の銀座四丁目角に店を構えた。当初は輸入時計を専門に扱ったが、九二年「精工舎」を興して柱時計や置き時計などの組み立てを始めた。

一九一三年（大正二）、国産初の腕時計「リール」（リール）を完成させ、第一次大戦の時、スイスの時計産業が打撃を受けた肩代わりとして輸出することに成功した。

日本の精密機械技術を世界に知らしめるきっかけとなったのち貴族院議員。一九三四年没、享年七十三。

三人は回り持ちでそれぞれのオフィスに集まっては、食事をしたりお茶を飲んだりした。

このうち、御木本幸吉も森村市太郎、開作の世話になっている。

彼が養殖に成功した真珠は森村商事が輸出窓口となり、アメリカで大評判となった。神秘的な輝きを持つ真珠はまさに欧米人が喜びそうな、日本的なるものだった。「ミキモトパール」の名が世界に知られたのは、森村商事によるところが大きい。

御木本、服部とともに典型的な明治立志伝中の人物だが、黒澤は一風変わっている。

尋常小学校を卒業すると、十歳で日本橋の薬問屋に丁稚として奉公した。独力で英語を学び、十六歳のとき、奉公で貯めた金をすべてはたいて単身で渡米した。アメリカのゴールドラッシュは終息していたが、坂本龍馬が言ったと伝えられる「平民でも統領になれる国」のイメージが海を渡ることを決意させたのに違いない。

シアトル魚港で魚洗いや鉄道工夫の仕事で小金をため、シカゴ市を経由してニューヨーク市にたどり着いた。ニューヨーク市では、事務機器販売会社の経営者宅で下男として働いた。雇い主はタイプライターの製造・販売を行っていたエリオット・ハッチである。

ハッチは黒澤の勤勉さと能力を評価して自身が経営するエリオット&ハッチ・ブック・タイプライター社の社員にした。次いで「タイプライターがどうやって作られるのかを知りたい」という黒澤の要望で、タイプライター・メー

カーのスマス・コロナ社に就職を世話した。

一九〇一年（明治三十四）に帰国するとすぐ、東京市京橋区弥左衛門町一番地に「黒澤貞次郎商店」の看板を掲げた。アメリカで世話になったエリオット・ハッチ社とタイプライターの代理店契約を結んで、輸入事務機器の販売を始めたのである。

扱ったのは自動番号押印機や文書ファイリング機、万年筆、カーボン複写紙などだった。その中にはバロース社の計算機も入っていた。事務機器・用品ブームを受けて、黒澤の事業は順調に拡大した。

帰国した年に、彼は英文タイプライターに工夫をほどこしてカナ文字のタイプライターを試作した。また滞米中に会った通信省の役人から得た知識を応用して、電送印字装置の開発にも挑戦している。

のち、一九二八年に緑綬褒章の栄を受けたとき、カナ文字タイプライターの開発を思い立った動機を、次のように説明している。

アメリカの子供達が文字の簡易のため、如何にもたやすく、小学教育を受けつつあるを目撃して、我が国でも漢字を廃し、かなもじを採用したらばと強く感じたのが、タイプライター業に従事する動機でありました。

文字の理解に着目したのは卓見というべきであった。知識を得、情報を共有し、何かを創り出し、それを他者に伝えることこそが、デモクラシーの根源であることを、黒澤は気がついていた。

しかし彼は偏屈に「かなもじ」にこだわらなかった。漢字の簡素化を訴え、日常生活に必要な漢字とはどういうものかを探ろうとした。当用漢字の考え方に通じるものがある。

この考え方は通信大臣だった前島密に伝達され、前島はそれをヒントに漢字を簡易化することを思いついた。数字に限れば「壺」「壹」を「一」、「貳」「弍」を「二」、「拾」を「十」、「阡」を「千」、「萬」を「万」二、という具合である。

同時に田舎から出てきた勤労者が郷里に送金するための仕組みを考えていた前島は、その手始めに

——業務に使う数字を漢字からアラビア数字に変更すべきである。

と説いた。

漢数字では誤記や勘違いが発生し、かつ集計に手間がかかる。

「算用数字」という呼び名がここから生まれた。

三

タイプライターには余談がある。

東京帝大の田中館愛橘である。

田中館愛橘は安政三年（一八五六）、岩手県の二戸に生まれた。東京帝国大学でアメリカ人講師メンデンホールに師事して理学を学んだ。一八九一年十月二十八日に起こった濃尾大地震（推定マグニチュード8・0）をきっかけに設けられた震災予防調査会で中心的に活動し、日本全国の地磁気を測定した。

純粋物理学のほか、重力・地磁気・地震・度量衡などにも多くの業績を残し、「日本の地球物理学の育ての親」と称される。

学士院会員・貴族院議員として科学振興に務め、国際連盟の知的協力委員としても活躍した。一九四四年（昭和十九）第一回の文化勲章を受章し、戦後に入って随筆『葛の根』などを著した。一九五二年（昭和二十七）没、享年九十六。故郷二戸市に記念館がある。

この人物は一方で「ローマ字博士」の異名を取っている。黒澤貞二郎が

——かなもじを採用したらば如何。

と、国字改良論を唱えていた前島密に提言したのと同じころ、田中館は

——ローマ字を普及させるべきである。

という考えを持っていた。

黒澤、田中館の二人に共通しているのは、国語の平易化と文書作成の高能率化が、政治の民主化や経済の発展に役立つと信じていたことだった。このため田中館は一八八五年（明治十八）に「羅馬字会」を発足させ、黒澤商店や三井物産からアメリカ製タイプライターを何台も購入して、ローマ字に適したキー配列を考案したりしている。

田中館が万国測地学会議に出席した折、それまで手書きの複写で時間がかかっていた会議録を、自ら考案したタイプライターで速打した。これが速記録の源流となった。同博士のキー配列が採用されていれば、こんにちのパソコン用キーボードは違ったものになっていたかもしれない。

キーボードの話が出たので、ついでにそのことにも触れておきたい。

現在、主流のキー配列は「QWERTY（クワージー）」方式と呼ばれる。アルファベットが、いちばん左上から右に「Q」「W」「E」……の順で並んでいる。この文字配列を最初に採用したのはレミントン・スタンダード・タイプライター社——いづれこの会社がパワーズ・カウンティン

グ社を買収することになる——だった。アメリカの政府機関と軍が同社のタイプライターを制式採用したために、一挙にデファクト・スタンダードとなった。

——タイプライターの販売員がデモをするとき、「TYPEWRITER」という文字を上段一列で打てるようにした。

という説もあるが、それだけでない別の理由があった。

——アルファベットの頻度の高い文字を中央に配置し、かつ統計をもとに、左右の指が効率的に働くよう、合理的に組み合わせた。

つまり欧文を打ちやすくした、というのだが、これはどうやら間違いであるらしい。

タイプライターは活字にアームが付いていて、キーを押すとアームが起動して用紙の面を打刻する。慣れてくるとキーを打つ速度が著しく速くなって、複数のアームが宙を舞い、ときとしてぶつかり、絡み合い、遂にはお互いを破壊し合う。それはまずかろう、というので、反対に打ちにくくした。

のちにコンピュータでも同じことが起こった。打ちやすくすると、コンピュータが処理しきれないことがあった。演算装置の速度が、キー・インについていけなかった、ということとは、現在ではとうてい信じられないが、キーボ

ード入力に対応した初期の計算機にはしばしばそういうことが起こった。操作をしにくくするというのも、人間の知恵なのである。

補 注

陸軍の規模縮小 いわゆる「宇垣軍縮」。加藤高明内閣の陸軍大臣で陸軍内で最大派閥の領袖だった宇垣一成が断行した。大日本帝國陸軍を構成する二十一の師団のうち師団四、連隊区司令部十六、陸軍病院五、幼年学校二、人員三万四千人、軍馬六千頭が削減された。関東大震災復興費、シベリア出兵の経費などを捻出する必要があった。また人員削減で捻出された費用の一部で兵備兵装を最新式に更新することも可能になった。

森村銀行 東京・銀座四丁目にあり、のち三菱銀行に吸収された。現在に残る建物図面によると、総大理石造り二階建てで、正面には四本のギリシア風円柱が立ち、総床面積約五百八十坪（一千九百平方メートル）という立派なものだった。ホレリス式会計機械装置の販売部門はこの建物の二階に事務所を置いていた。

日本的なるもの 二十世紀に入るとジャポニズムの興味は一時期の絢爛豪華な装飾性を脱し、日本画の簡素さや俳句・茶道の侘び・寂びに移っていた。

スミス・コロナ社 黒澤が入社した当時の社名は「スミス・プレミア・タイプライター・カンパニー」(Smith Premier Typewriter Company)だった。ニューヨーク州シラキュースに本拠を置いていた。一九〇三年、「L・C・スミス・アンド・ブラザーズ・タイプライター・カンパニー」(L. C. Smith & Bros. Typewriter Company)と改称した。

東京市京橋区弥左衛門町一番地 のちの東京都中央区銀座四丁目二番地に当たる。

メンデンホール T. C. Mendenhall / 1841 ~ 1924。東京帝國大学講師として赴任した直後の一八八〇年(明治十三)二月十二日、関東地方にかなり強い地震が発生した。同じく東京帝大で地質学を教えていたイギリス人講師ジョン・ミルン(John Milne / 1850 ~ 1913)が地震研究の必要性を訴えたのに賛同し、世界初の地震専門の学会「日本地震学会」を創設した。

一八九八年にアラスカの上空をプロペラ機で飛び、初めて氷河の写真撮影に成功した。彼が発見した氷河は「メンデンホール氷河」と名づけられ、氷河観測の指標となっている。

濃尾大地震 被害は建物全壊十四万二千七百七十七戸、半壊一万八千八百八十四戸、死者七千二百七十三人に達した。被害の地域は、岐阜、愛知、福井、石川、滋賀、三重の六県に及んだ。この地震を契機に、わが国の地震学の研究が始まった。

羅馬字会 のち「日本ローマ字会」と改称し、現在は公益財団法人日本のローマ字社となっている。

前島 密 まえじま・ひそか / 1835 ~ 1919。越後国(新潟県)高田藩士上野家に生まれ、旗本前島家の養子に入った。はじめ医学を志し幕府の函館諸術調所で洋学を学び、一八六九年(明治二)維新政府に出仕した。翌年ヨーロッパに渡って近代諸制度を見学した経験を生かして郵便制度と郵便為替・貯金精度および、電話・電信の基礎を築いた。一八八一年(明治十四)大隈重信とともに下野し、北越鉄道、東館汽船、石狩石炭、日清生命保険などの経営に参画した。黒澤貞次郎が「かな文字」を提言したのは、前島は一時的に通信省に復帰したときだった。

045 黒澤村

第四十五

黒澤村

一

黒澤貞次郎という人物は高峰讓吉とも親交があつた。

高峰は消化酵素「タカジアスターゼ」、興奮ホルモン^グとも呼ばれる副腎髓質ホルモン「アドレナリン」などの発見で知られる。あるいはニューヨークの公園に、日本から持ち込んだ桜の木を植え、春になるとサクラ・マツリを催した。

知り合つたのは一九〇一年（明治三十四）、日本に帰国する船中である。

出会つたとき高峰は四十七歳、黒澤は二十六歳だつた。

高峰は生化学者として国際的な名声を獲得しており、アメリカ合衆国ミシガン州アナーバーの酒造会社パークデヴィス社の顧問として、アルコール飲料を醸造する際の酵母の技術を指導するカタワラ、現地に「高峰研究所」を開設していた。

一方の黒澤は、世の中に誇り得る実績などまったくない。

志だけを矜持とする一介の青年に過ぎなかつた。

おそらく黒澤は高峰に、日本でタイプライターを販売することの意義——より多くの庶民がたやすく小学教育を享受できるよう、漢字を廃すべきである、という自論も含めて——を熱弁した。こうして何回か言葉を交わすうち、高峰はこの青年の生意気さが気に入つたらしい。

そこで高峰は、

「タイプライターもいいが、私が發明した胃薬も売らないかね」

と黒澤に持ちかけた。

「日本人は胃腸が弱くて、何かというと腹をこわしている。それでは欧米に勝てない」

植物と魚介類に慣らされた日本人の胃腸は、牛豚の蛋白質と脂肪を消化し切れなかつた。タカジアスターゼが日本人の体力を欧米人並に強くするであろう。

その気があれば、塩原又策を紹介しよう、というのである。

高峰は二年前、塩原と共同でタカジアスターゼの販売を行う合資会社「三共商店」を大阪に設立していた。東京に販売店を持ちたいと塩原は希望していたのである。

黒澤は理解が早く、思考が柔軟だつた。銀座に開いたばかりの黒澤貞次郎商会の店頭には、タイプライターとタカ

ジアスターゼが並んでいたと伝えられる。

事務能率増進運動で、黒澤の事業は順調に拡大した。そのため、弥左衛門町の店が手狭まになった。そこで黒澤は一九〇七年、東京市京橋区尾張町二丁目二百十三番地に土地を求めて本社を移すとともに、二年後に鉄筋コンクリート造・三階建ての本社ビルを建設した。このビルは関東大震災の火災にあったものの焼け残り、不思議なことに第二次大戦末期の空襲でも生き残った。

銀座六丁目に本社の用地を購入する際、地主は黒澤を信用しなかった。

「ならば、対価は現金で支払おう」

といつても首をたてにふらなかつた。

このことを聞いた高峰譲吉は、千葉県野田の豪商・茂木佐平治（文吉）に話を持ちかけ、茂木が黒澤の保証人となつた（「茂木」は「もてぎ」と読む）。

だけでなく、茂木の縁者である北川家が黒澤に資金を提供もした。タカジアスターゼの原料が醤油の醗（もろみ）であつたことから、高峰は茂木と懇意な関係にあつた。

茂木左平治といえは、「茂木八家」と称される北総きつての豪商であつて、これから十年ののち、「野田醤油」を興す人物である。

さらにいうと、これが縁で黒澤は茂木左平治とも親交を

結び、その娘・まつの嫁ぎ先である小森家、その縁者で佐原の名家・北川家とも縁を持つようになる。

第二次大戦後、連合軍総司令部（GHQ）配下のパンチカード・システム部隊および、アメリカ在日空軍立川基地の電算処理業務を通じて多くの人材を養成した北川宗助は、小森まつの実子、すなわち茂木左平治の外孫である。北川家の養子となり、長じて茂木、高峰、黒澤の関係で黒澤貞次郎商店に入った。

それにしても、アメリカから日本に帰る船の中でたまたま一緒だったというだけで、高峰や茂木がのちのちこれほどの親交を持ったのは、黒澤という人物の魅力であつたのかもしれない。

ともあれ、明治の人間の関係は濃厚だった。

二

黒澤は一九〇九年（明治四十二）、東京・銀座の松屋デパート前に鉄筋コンクリート造・三階建ての、当時としては斬新なオフィスビルを自ら設計・施工して完成させている。「黒澤貞次郎商店」の名を「黒澤商店」に改めたのは、このときだった。

現在に残る黒澤商店本社ビルの写真を見ると、二階と三

階の間に「業務用器械」「黒澤商店」「KUROSAWA BUSINESS EQUIPMENT」の文字が横書きで穿たれている。その規模は、個人商店のものとは思えないほど立派な外観である。

そのかたわら蒲田新宿町に、やはり鉄筋コンクリートの自社工場二棟を建設し、ここで事務機器・用品を生産した。「鉄筋コンクリート」というだけで、珍しがられた時代だった。蒲田工場で生産したのは、おおがかりな機械装置ではなかった。

ゼム・クリップや複写用のカーボン紙、書類ファイル、ルーズリーフといった事務用品が中心であって、一部に機械生産を取り入れてはいたものの、家内制手工業の域を出ていなかった。

そうした事務用の小物や用品は、アメリカやヨーロッパから物品を輸入した際、同梱されていた説明書や伝票に付いていたものだった。初めてそれを見たとき、黒澤商店の従業員は使い方が分からず、出荷元に問いただしたこともあった。事務機械の貿易に携わったことが、図らずも欧米における先進の事務用品を知ることにつながった。

ところが、関東大震災が黒澤に窮地をもたらした。

震災で黒澤は東京・蒲田の工場を失い、本社も火災にあった。幸いだったのは、鉄筋のビルだったことである。す

べての資産を灰にしたが、ビルが残った。このとき黒澤商店でタイプライターの販売を担当していた八城勘二（のち「日本事務器商会」に移籍）は、

われわれは、震災で不明になった顧客の所在をつきとめるのに大変な苦勞をしていたものだ。ところが、震災で受けた黒澤社長のショックは大きすぎた。われわれは、いるにもいづらい状況だった。

と語っている。

また支配人だった田中啓次郎（のち「日本事務器商会」を創業）は、

冷静に復興の目処を立てるにとしては被害が大きく、打撃があまりにも大きすぎた。こうなると従業員をかかえているのは、店主として大きい負担であったに違いない。とりわけ高給者ほど負担が大きい。店主がそうした負担を感じていることは、直接間接にわれわれの耳に達するのだった。

と回想している。

以上のことは『日本事務器株式会社七十五年史』に見えている。

三

震災からほどなく、日本銀行を窓口に一億円規模の「震災手形割引損失補償」が実施され、また周囲の励ましもあって、黒澤は再起を決意した。従業員総出で銀座の本社ビルを清掃し、内装を改め、並行して蒲田に自ら設計施工による新工場を再建した。新工場は一九二六年に完成したが、ただモノを生産する場所にとどまらなかった。

敷地の内には、食堂、浴室、購買部を含む従業員向けの福利厚生建物、車庫、変電所、ポンプ室、材料倉庫、幼稚園、小学校、社宅、池、児童プール、貯水池、給水塔、水道設備などが装備され、自衛の消防団まで編成されていた。従業員の生活にかかわる一切を企業が用意するというのは、当時はよほど珍しかったと見えて「黒澤村」という呼称がついた。

森村開作、市左衛門父子と同様、黒澤もクリスチャンであって、従業員の福利厚生を充実すること、社会に利益を還元することが、成功した事業家のつとめ、という認識を持っていた。

のちに大工場が同じことをやったのは従業員を確保することと、生活の隅々にまで軍隊的組織を浸透させて運命共

同体的意識を持たせるのがねらいだったから、質的には大いに異なる。

事業の再建では、まず冷徹果敢に支配人田中以下の高給者の退職を促して——田中や八城の述懐では、店のことを思って退職したことになっているが、黒澤の立場では全く別の表現になる——負担を軽減し、他方ではアメリカ式のカタログ販売で受注を増やしていった。

店が取り扱っている商品のすべてを「タイプライターと関連器具」「近代事務用機械」「文書の記録と整理」に分類し、三種のカタログに記載して取引先に配布した。

これだと取引先は、何かの必要が生じたとき、カタログから商品と値段を確認して注文を出すことができた。こんにち、事務器や文具、家電製品の販売でカタログが重きを占めているのは、黒澤商店の成功がきっかけを作った。

第一次世界大戦後の不況と昭和恐慌の打撃を受けたのは黒澤商店だけではなかった。森村組も同様に、重大な打撃を受けていた。このため七代目市左衛門は一九二六年、森村組の業務を日本陶器に統合し、翌年には森村銀行を三菱銀行に売却して事業を再編した。

貿易業や金融業は明治の黎明期を脱し、三井、三菱、住友といった巨大資本がなすべき事業に変わったことを見抜いていた。CTR社製統計会計機械装置の営業権を黒澤商

店に譲渡したのはその一環だった。

一九二六年十二月、CTR社——正確に言えば、その二年前、CTR社は「インターナショナル・ビジネス・マシンズ」に社名を変更していた——の副社長ブレトマイヤーが来日すると、森村市左衛門は代理店契約の打ち切りを申し出るとともに、黒澤貞次郎を紹介した。

ニューヨークの中山が事前に根回しを済ませてあったと見えて、ブレトマイヤーは責任契約高条項について「不問」とし、既存の日本陶器、三菱造船を含む全営業権を黒澤商店に譲渡することで合意が成立した。

三社の合意文書は、東京・日比谷の帝国ホテルで調印された。契約解除文書にブレトマイヤーは次のように記している。

私どもは、貴社が過去において、当社のためになした一切および、個人的に小生に尽された御好意にたいし大いに敬意を表します。

森村商事から黒澤商店への営業権移譲は円滑に行われた。新しい契約は一九二七年一月に発効し、IBM社の出資で「日本ワットソン統計会計機械株式会社」が設立される。一九三七年六月まで、国内におけるホレリス式パンチカード

統計会計機械装置の販売は、黒澤商店が担うことになる。

すでに五十歳の声を聞いていた黒澤貞次郎には、失敗が許されなかった。彼は一九一九年（大正八）にバロース社と契約して金銭登録機や会計機の販売を開始していたし、本人がバロース社の機械を使って従業員との給与を計算していたため、統計会計機械装置の効用に理解があった。同社とバロース社との関係は、一九四一年十二月に日米が開戦するまで続いている。

森村開作からの申し出に応じたのは、「最後の賭け」のつもりもあったであろう。このため、森村商事からCTR社の統計会計機械装置の営業権を引き継ぐに当たっては、CTR社に「一年間に五台」という契約条項を削除させるなど、実業家としてのしたたかさも発揮している。

余談だが、東京・銀座の黒澤商店本社ビルは第二次大戦の空襲でも焼けなかった。終戦後、連合軍総司令部（GHQ）に接収され、国際赤十字社の本部として使われた。一九五二年（昭和二十七年）二月に接収が解除され、改修は十二月に終了した。

黒澤商店として業務を再開した矢先、一九五三年（昭和二十八）一月、自宅に年賀に訪れた人の接客中に倒れた。脳溢血だった。享年七十八。

死後、従六位勲五等瑞宝章が贈られた。

黒澤は一時代前の成金の実業家の発想を、ついに持つことがなかった。独創的な手法で事務用機械の市場を切り開いた立身出世の実業家として歴史にその名が刻まれている。

黒澤の死後も黒澤商店は輸入事務機器の販売で堅調に事業を継続した。だけでなく、蒲田工場の一角に設けた研究所で「ページ式印刷電信機」を製品化した。現在のファクシミリの原型である。

これが母体となつて一九五七年（昭和三十二）二月、資本金一億円で「黒沢通信工業株式会社」が設立され、一九七〇年四月には受託計算サービスとソフトウェア開発を行う「株式会社クロサワ・コンピュータ・センター」がスタートした。

ちなみに黒澤が建てた黒澤商店本社ビルは、現在もある。ただし、老朽化したため再建され、一階にオーダー紳士服で有名な「英国屋」が入っている。（筆者注…二〇〇四年時点の情報）

また、東京・蒲田の「黒澤村」敷地は、のちに富士通が買い上げて、ここにソフト技術者の研修とコンピュータ・センターを設置した。「蒲田システムラボラトリ」（富士通ソリューションスクエア）の名をあげれば、おおまかな場所が分かるであろう。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**高峰讓吉** たかみね・じょうきち／1854～1922。金沢藩医高峰精一の長男に生まれ、工部大学校を出てイギリスのグラスゴー大学に留学した。帰国して農商務省に入り清酒や醤油の醸造技術を研究する中で酵母とジアスターゼを発見した。のちアメリカ国籍を取得し、ニューヨークで没した。

**アナバー Ann Arbor** アメリカ合衆国ミシガン州南東部に位置する。一八二四年に誕生した開拓の町で、その名は最初に入植した二組の夫婦の妻が「アン」「マリーアン」だったことと、産出したブドウの種類が「アナバー」だったことよつていふ。パークデヴィス社は最初、ワインを生産していたが、高峰讓吉の研究成果を生かして製薬業に転換した。

**塩原又策** しおばら・またさく／1877～1955。長野県で生まれ横浜で育つた。横浜に本社を置いた大谷嘉兵衛の日本製茶会社勤め、のち大谷と共同出資した横浜絹物会社で取締役支配人をしていふとき高峰讓吉と懇意になつた。一九〇二年、大阪に三共合資会社を設立し一三年株式会社に改組して高峰を社長に招聘した。近代製茶業の基礎を作つた人物とされる。

**千葉県野田** 千葉県野田で醤油が作られるようになったのは、古く戦国後期の永禄年間(一五五八―一六九)にさかのぼる。伝承によると「飯田市郎兵衛」の先祖が甲斐武田氏に豆油醤油を納め、「川中島御用溜醤油」と称したといふ。

確実な記録では寛文元年(一六六一)に「高梨兵左衛門」といふ人が醤油作りを始め、翌年に「茂木七左衛門が味噌醸造を始め

た」とある。それまで醤油は菱垣廻船や樽回船で関西から江戸に運ばれていたが、野田の醤油の生産量が高まるにつれてそれに取つて代わつた。

高梨兵左衛門と茂木佐平治の両家は明治に入つて「野田醤油醸造組合」を結成し、併せて「野田商誘銀行」や「野田人車鉄道」「野田病院」などを設立して地域の振興に努めている。この間、同じ千葉県の銚子でも醤油作りが始まり競争が激化した。そこで野田を本拠としていた高梨系と茂木系の醸造元は一九一七年(大正六)、大合同して「野田醤油株式会社」を設立した。このとき社長に就任したのは茂木七郎右衛門である。また二百以上もあつた商標のうち、高梨家の「甲子」(きのえね)と茂木家の「亀甲萬」が統一商標となり、それがこんにち広く知られる「キッコーマン」となつていふ。

**人車鉄道** レールに乗つた台車を人が押して動かした。一八八二年、宮城県仙台市の木道車が営業開始したのが最初だつた。人車軌道ともいつた。ピーク時には全国に十四箇所、客車百五十車両、貨車五百車両を数え、年間四十六万人の旅客と五十万トンの貨物を運んだ。

**黒澤商店本社ビル** 現在に残る黒澤商店本社ビルの写真を比較すると、森村商事本社ビルの模倣である部分が少なくない。黒澤貞次郎は起業家の先人として森村市太郎・開作父子に心酔していた。

## 03 未剖篇

### 卷之六 游魚

046 世代交代

047 実演販売

048 二対一

049 拡大する矛盾

050 弱電メーカー

051 キャッチアップ

## 046 世代交代

第四十六

世代交代

一

黒澤商店がホレリス式統計会計機械装置を扱った一九二七年から一九三七年にかけての世相を概観しておきたい。

計算機の普及や利用技術を主軸にする本書からすると、この期間は、

——まことに奇妙な時代。

——と言うほかはない。

とにかく景気はよくなかった。にもかかわらず、計算機が売れた。書類用のファイルやバインダー、タイムレコーダーといった事務機器、「TIGER」ブランドの手廻し式計算機なども売れた。計算機や事務機器の世界から見れば、最初の隆盛期だったといっている。

なぜかという——。

以下は一般的に指摘されることだが、わずかに関東大震災のあと数年、東京や横浜ではビルや住宅、道路や橋の再建と復興で経済が潤った。個人住宅が建て替えられ、地震

に強く、火事でも燃えない三階建の看板建物や鉄筋コンクリートの大規模な建築物が相次いで建てられた。複雑で大量の計算業務が発生し、それまでのソロバンを頼りにしていた手計算では間に合わなくなった、という。なるほど、一理はある。

——第一次大戦の好況で肥大化した企業や商店が、不況に備えるべく事務能率を改善し、人件費の圧縮を追求し始めたのだ。

と言う向きもある。

たしかにそれも一つの要因には違いない。だが、その動きを後押ししたのは普及啓蒙の活動だった。

大正末期から「執務能率の増進」「能率増進」が盛んに指摘されていたし、日本能率連合会（のち日本能率協会）から『産業能率』という雑誌が発刊された。坂本重関が『事務能率増進法』を刊行したのは一九三〇年六月、鈴木久蔵が『現業事務能率講話』を著わしたのは同年の十二月だった。

また一九三三年になると、第一回統計機械技術研究会が東京東亜会館で開かれた。こうした啓蒙活動が企業経営者に計算事務の機械化の必要性を認識させたことは疑いを得ない。

もう一つ重要なことは、「数字」の問題だった。このこ

とに最初に気がついたのが前島密だったことはすでに書いた。

いうまでもなく、漢数字の「壹」「壹」「一」「貳」「貳」「二」「あるいは「十」「百」「千」「万」と算用数字（アラビア数字）の「1」「2」「10」「100」「1000」は意味が異なる。漢字の「壹」「壹」「一」「貳」「貳」「二」「拾」「十」「佰」「百」「仟」「千」「萬」「万」はそれぞれの数量に当てられた単独の文字なのに対し、算用数字は何桁の数量であっても「0」から「9」までの数字の組み合わせである。

前者は「表現」に類し、後者は「表記」に属する。領収書や寺社への寄付は漢数字で構わないが、これを集計し項目ごとに分類するには、むしろ算用数字が適している。

現在のわたしたちからすると、

——えっ？

という感じなのだが、実に昭和初期まで、統計会計機械装置においてさえ、人々はその結果を漢数字で表わしていた。伝票から機械装置にインプットするにも、機械装置がアウトプットした結果を表に写す際にも、人々は漢数字を算用数字に変換する作業をこなしていたのである。

一九三五年四月、日本能率連合会が

——統計諸表はアラビア数字で表記しようではないか。

と提唱した。

それは、あたかも裸の王様に子どもが発した

「なぜあなたは裸なの？」

という質問に等しい。

この提言がきっかけとなって、まず公共機関が公表する統計を算用数字に変え、民間企業でも当たり前のことが当たり前に行われるようになっていった。計算機械装置の利用が広がったのには、このような事情もあった。

## 二

計算機から眼を転じて、社会を眺めることにする。

景気は好・不況を繰り返しつつ、下降する傾向を示していた。政治は明治以来の露骨な藩閥偏重が終焉して「民」主体の政党が政権を担ったが、次第に「軍」主導の構図が明らかになった。つまるところ、全体としての見通しはバラ色ではなかった。

日本という国にとってこの時代は、政治・経済のターニング・ポイントというべき時期に当たっていた。世界史の観点でも「近代」を分析する上で重要なウエイトを占めるのだが、同時にいくつかの動きが錯綜し、かつ相互に連携し、姿を変えて現われる。ために史家は、この時機の再現

にたいへんな苦勞をしている。

国内におけるいくつかの動きとは、次のようなものであった。

一つは国内における政治情勢の変化である。

政党政治が終焉し、軍部が台頭した。

一九二七年四月二十日に発足した田中義一内閣から一九三七年一月二十三日に総辞職した広田弘毅内閣まで、正味九年九か月の間に成立した内閣は次のようだった。

- ・田中義一 二七年四月二十日～二九年七月二日
- ・浜口雄幸 二九年七月二日～三二年四月三日
- ・若槻礼次郎 三二年四月十四日～十二月十一日
- ・犬養毅 三二年十二月十三日～三三年五月十六日
- ・齋藤実 三三年五月二六日～三四年七月三日
- ・岡田啓介 三四年七月八日～三六年二月二十九日
- ・広田弘毅 三六年三月九日～三七年一月二十三日

いや、めまぐるしい。浜口内閣は九か月、若槻内閣は八か月、犬養内閣は六か月でしかない。こんなにちであれば政府与党内の派閥争いだが、この時期に短命内閣が頻出したのは文民と軍部の政権争いが背景にあった。

二年以上続いたのは田中義一と齋藤実だけで、両者に共

通するのは軍人だった。田中は陸軍大将、齋藤は海軍大将である。岡田啓介も海軍大将で、「二・二六事件」に遭遇しなければ、内閣の寿命を二年以上保つことができたかもしれない。

浜口、若槻、犬養、広田といった政党を基盤とする文民内閣であつても、軍部の支持がなければ成り立たなかった。経済力が軍事力を支えていたのだが、第一次大戦を境に軍事力が経済力を支えることになった。

結果として、財界は軍部と手を結んだ。海外における資産と利権の保全・拡大は、外交でなく軍事力によって実現されることになったのだ。

もう一つは国際情勢の変化だった。

第一次大戦後に築かれたベルサイユ体制が揺らぎつつあった。経済と国際情勢が密接に関連し、その二つは軍事力を裏づけに展開されていた。

主な歴史的事件でいえば、

- ・金融恐慌（一九二七年）
- ・山東出兵（同）
- ・モラトリアム（同）
- ・満州事変（一九三一年）
- ・五一五事件（一九三二年）



・二二六事件（一九三六年）

である。

大正デモクラシーの時代から日中戦争へ、さらにいえば太平洋戦争への準備が進んだ時期でもあった。時代を色合いで表わすとすれば、この時期は「灰色」が似合っている。灰色の色合いを深くしたのは要人の暗殺である。

一九二一年九月二十八日、安田財閥の総帥・安田善次郎が神奈川県大磯の別邸で刺殺された。享年八十二。

犯人は朝日平吾という三十二歳の不満分子だった。第一次大戦後の不況に際して自分は株式投資で大損をしたのに、安田善次郎は二千万円も儲けたのはけしからん、というのが理由だった。

朝日は善次郎を刺殺した直後、その場で自殺した。手持ちの折鞘に入っていた斬奸状には次のようにあった。

奸富安田善次郎巨富ヲ作スト雖モ富豪ノ責任ヲ果サズ。国家社会ヲ無視シ、貪欲卑吝ニシテ民衆ノ怨府タルヤ久シ、予其ノ頑迷ヲ愍ミ仏心慈言ヲ以テ訓フルト雖モ改悟セズ。由テ天誅ヲ加ヘ世ノ警メト為ス

同じ年の十一月四日、内閣総理大臣・原敬が東京駅で刺

殺された。享年六十五。

犯人は中岡良一という鉄道省山手線大塚駅職員だった。朝日平吾の安田善次郎暗殺が影響を与えたといわれる。

この時期、政財界で鬼籍に入る人が多かった。

- ・ 一九二二年一月 大隈重信没（享年八十三）
- ・ 二月 山県有朋没（享年八十三）
- ・ 一九二三年九月 加藤友三郎没（享年六十二）
- ・ 一九二四年七月 松方正義没（享年八十九）
- ・ 一九二六年一月 加藤高明没（享年六十六）
- ・ 十二月 大正天皇崩御（享年四十七）

ただちに摂政・裕仁親王が践祚し、新年号「昭和」が定まった。ために昭和元年は六日間しかない。

このちややあつて、一九三一年十一月十一日に洪澤栄一が九十二歳で没した。

武蔵国榛沢郡血洗島（のち埼玉県大里郡八基村）の豪農に生まれ、徳川三家門の筆頭である一橋家に出仕した。水戸徳川家出身の一橋慶喜が第十六代將軍となるにおよんで幕臣に列し、パリ万国博覧会の日本代表使節（代表・徳川武昭）に随行した。その際の見聞をもとに、一八六八年徳

川家が明治政府から借用した五十万両余を元に事業家に転身した。

洪澤は、第一国立銀行、王子製紙、大阪紡績、東京人造肥料、東京瓦斯、東京貯蓄銀行など五百を超える会社を設立した。明治の殖産興業はこの人物によるところが大きく、またその後の産業の振興にも洪沢家が深く関与した。この人物の死をもって、幕末維新の空気を知る者はほぼ地上から消えたといっている。

### 三

中華民国でも世代の交代をきっかけに政局が動いていた。一九二五年一月十二日、孫文が北京で没した。享年五十九。

広東省に生まれ、日本に留学して医者となった。ときの清王朝は有名無実に化し、中国は西欧列強はおろか、新興のアメリカや日本にも租借地を与えるありさまだった。これに義憤して「興中会」を組織し、のちに発展して中国革命同盟会が結成されている。

しばしば日本を訪れ、留学時代の旧友と親しく交わりとともに、運動に必要な資金を調達した。鈴木久五郎が十万円という大金を渡して、革命の志を気取ったのはそのとき

のことである。

一九一一年は五行干支でいう「辛亥」に当たっていた。

「辛亥」は革命の年である。

隋・唐の時代まで、それは「辛酉」であるとされていたが、歴史が重なりと必ずしも辛酉の年だけに大きな政変が起こるということがなくなった。このため「甲子」の年には「革命」の役割が与えられ、「辛亥」には「維新」の意味が付与された。つまり暦とはとめて政治的なものである。

孫文はそれを利用した。

「天命が革まるのだ」

と民衆に訴えた。

この訴えは分かりやすかった。

これがために皇帝から人心が離れ、清朝が倒れ、満州族は辮髪を翻して東北の故地に帰っていった。その年の十二月二十九日、南京に「中華民国軍政府湖北都督府」が樹立されると、孫文は百万の民が歓喜するなかで臨時大統領に就任した。

一九二二年三月、「中華民国」の成立をもって孫文は大統領の職を袁世凱に譲り、自らを思想的指導者に位置づけようとした。後世の毛沢東と周恩來の關係に似ている。ところが袁世凱や段祺瑞など軍部との対立が深まり、ついに

袁が「皇帝」を称するに及んで広東に下野し、国民党を組織した。中国では「国父」と尊称される。

孫文が世を去った後、中華民国の中枢を握ったのは段祺瑞だった。安徽省出身でドイツに留学して軍事を学び、帰国するや袁世凱の腹心として武威を張った。しかし南京政府は中国全土を掌握できなかった。

満州には安国軍総司令・張作霖を首領とする軍閥が半独立の状況にあり、かたや広東省には北伐軍総司令・蒋介石を代表する国民政府が地方軍閥を傘下におさめて勢力の拡張を図っていた。

一九二六年、国民政府軍は湖南・江西省に進入し、二七年の初めには浙江省の孫傳芳軍を破って上海に迫った。張作霖が孫傳芳を支援するために張宗昌の軍を差し向けたため、満州軍閥と国民政府軍の間に緊張がみなぎった。

——これでは段祺瑞に漁夫の利を与えるのみである。

と判断した国民政府軍がひとまず揚子江南岸に後退し、ことなきを得た。

一九二七年の一月、国民政府軍は再び北伐を開始し、三月に南京に入城した。その際、一部の部隊が日本領事館を襲撃した。「内政不干渉」を方針とする若槻内閣（第一次）は、この事件に際しても艦隊による領事館員救出にとどめ、騒動はひとまず収まるかに見えた。

#### 四

この年の三月、衆議院で野党の政友会、実業同志会が震災手形の処理について激しく若槻礼次郎内閣を追求した。若槻礼次郎は加藤高明の死没を受けて憲政会総裁に就いていた。

当初、一億円の予定だった震災手形は、産業界の要望を聞き入れているうち、最終的に二億七百万円に膨れ上がっていた。手形の割引について日銀が保証することになっていたので、政府は特別措置法で手形の割引率を引き上げたことを計画していた。野党はこの点を攻め立てたのだった。

一方、米騒動で焼打ちにあった神戸の鈴木商店は、長引く不況で債務超過に陥っていた。同商店が抱える債務総額四億五千万円のうち、台湾銀行の債権が三億五千万円を占め、そのうち六千五百万円が震災手形だった。政府が発行した震災手形の三一%超である。

鈴木商店が倒産したらどうなるのか。

これを追及しない野党はないであろう。

「この焦げ付きをどうするのか」

と野党は詰め寄った。

蔵相・片岡直温は、思慮が足りなかった。

三月十四日に開かれた衆院予算委員会で彼は、「東京渡辺銀行がとうとう破綻を致しました」と、発言した。

東京渡辺銀行は神戸の鈴木商店のメインバンクである。台湾銀行とも深い関係にあった。

後日の自叙伝で、片岡は「午後四時を回り、銀行は業務を終了しているので問題はないと考えた」と弁明しているが、失態のほかの何ものでもない。

翌日、渡辺銀行に預金者が預金の取り付けに殺到した。渡辺銀行は要求にこたえるだけの現金を持ち合わせていなかった。このために渡辺銀行は事実上、倒産してしまつた。また鈴木商店も破綻し、台湾銀行も休業せざるを得なくなつた。

これが引き金となつて若槻内閣は総辞職し、政友会の田中義一が組閣した。取り付け騒ぎが起こつたのは全国で三十七行におよび、引き出された預金総額は八億八千万円に達したという。

田中内閣の蔵相に就任した高橋是清は四月二十二日、緊急勅令で金銭債務の支払延期（モラトリアム）を三週間にわたって実施し、ようやく沈静化を見た。

いわゆる「昭和金融恐慌」がこれである。

若槻内閣に代わつて政権を担つた田中義一内閣は、内憂

と外患を一度に背負わされることになった。清王朝消滅後の中国の動乱である。

それはまるで紀元三世紀、曹（魏）、孫（呉）、劉（蜀）の三国が覇権を争つた時代を思わせる。歴史活劇を見ているようだったが、それは現実の出来事だつた。

## 補 注

安田善次郎 やすだ・ぜんじろう／1882～1921。越中（富山県）で生まれ育ち、二十歳のとき江戸に出て丁稚奉公ののち、天保九年（一八三八）に両替商「安田屋」を開業した。維新直後に太政官札を買い占めて巨利を得、第三国立銀行、第四十一国立銀行、安田銀行を設立し、安田財閥を形成した。寄贈した東京大学安田講堂にその名が刻まれている。

安田財閥の主な企業は、富士銀行（みずほ銀行）、安田信託銀行（みずほ信託銀行）、東京建物、安田生命保険（明治安田生命保険）、安田火災海上保険（損害保険ジャパン）、日本精工、安田倉庫、帝國纖維など。

原 敬 はら・たかし／1856～1921。初名は「健次郎」といった。生家は石高二百二十七石の盛岡・南部家の武家だったが、明治に入って没落し、一八七三年自ら分家して「岩手県平民」を公称した。外務次官、大阪毎日新聞社社長、立憲政友会幹事長、通信大臣、衆議院議員、内務大臣、立憲政友会総裁、内閣総理大臣などを歴任した。「平民宰相」の渾名は大正デモクラシーで流行語となった。

中岡良一 なかおか・こんいち／1903～1980。原敬暗殺で無期懲役の判決を受けたが一九三四年、恩赦で出獄したあと満州で陸軍司令部に勤務した。

大隈重信 おおくま・しげのぶ／1838～1921。佐賀鍋島藩に生まれ、維新後に徴士参与、のち立憲改進黨の総裁に就いた。三菱財閥の岩崎弥太郎と親交があり、一八八二年に東京専門学校

（のち早稲田大学）を創設し、日本における一大知識集団を形成する母体となった。一九一四年四月から一六年十月まで首相を務めたが、国粹主義的かつ好戦的な性格を帯びていたことは意外に看過されている。

山県有朋 やまがた・ありとも／1838～1922。長州松下村塾に学び幕末には「狂介」を称した。陸軍大將として日清戦争で第一軍司令官、日露戦争では参謀総長を務めた。二度にわたって内閣首班に任ぜられ、公爵。明治の元勳の代表的な人物であった。正しくは「山縣」だが、本稿では『日本人名辞典』（三省堂）の表記に従った。

加藤友三郎 かとう・ともざぶろう／1861～1922。安芸藩（広島県）に生まれ、日露戦争で中将連合艦隊参謀長として、元帥東郷平八郎の幕下で日本海海戦に参加した。海相を四回務め一九二一年にワシントン軍縮会議に首席全権として臨んだ。二二年六月から首相の職にあつて軍艦建造の縮小と陸軍四個師団の廃止などを実現した。子爵。

松方正義 まつかた・まさよし／1835～1924。

薩摩の下級武士の家に生まれ、長じて大久保利通に従い公武合体、倒幕運動に参加した。維新直後に日田県知事を務め、のち税財務・勸業をもつぱらとし、首相二回、蔵相八回の間に日本銀行を創設、兌換紙幣を発行し、金本位制を実施した。赤十字社の創立などに業績を残した。公爵。

## 047 実演販売

第四十七

実演販売

一

森村商事からホレリス式統計会計機械装置の営業権を継続した黒澤商店は、最初の年、つまり一九二七年（昭和二）から実績を上げ始めた。

まずこの年の九月に海軍の呉造船所（総務部）、十月に同造船所（会計部）が相次いで契約を結んだ。次いで翌年一月に商工省、十一月に内閣統計局からカードパンチ装置四十七台という大型契約を獲得した。

この年の三月、渡辺銀行の取り付け騒ぎに端を発した金融恐慌は発生したが、黒澤商会にあって大きな影響は見受けられなかった。この時期の黒澤商店は震災前の勢いを盛り返し、CTR社の統計会計機械装置事業にかかわる従業員たちは意気揚々だったに違いない。

ここで筆者は断りを入れなければならない。

これまで「CTR」の略称で呼んできたアメリカの会社を、これ以後、「IBM」と表記する。コンピュータイン

グ・タビュレーティング・レコーディング社は一九二四年、トーマス・ワトソン社長の決断で社名を「インターナショナル・ビジネス・マシーンズ」（IBM）に変更したからである。

黒澤商店がIBM社の統計会計機械装置を扱うようになるまでに、国内には先行するユーザーとして、一九二〇年に三井物産を通じてカードパンチ装置を購入した国勢院、森村商事が開拓した日本陶器、三菱造船神戸造船所、同長崎造船所などがあつた。

さらに森村商事が展示用に取り寄せた最新モデル一式を黒澤商店が引き取っていた。これで日本におけるホレリス式の契約数は九件になった。森村商会による普及啓蒙活動が、ホレリス式統計会計機械装置の知名度と効用の認識を高めたのはたしかだった。

しかし、立て続けに四件の契約を取ることができたのは、黒澤商店の工夫と努力によることも間違いなかった。黒澤商店は同社が一貫して採用してきたカタログ方式を、統計会計機械装置にも適用したのだった。

カタログ方式というのは、黒澤貞次郎がアメリカで仕事をしていたとき「なるほど」と感心した新しい商売のやり方だった。取り扱い製品をジャンル別に分け、商品ごとに説明と価格を記入した印刷物を取引先に配るのである。取

引先はそれを見て、他の商品に関心を持つようになる。御用聞きのように営業マンが足を運んで説明する時間とコストを省くことができる。

「モノを売る」という行為が「和歌を詠む」という非生産的行為より価値が低く見られていた当時、印刷物で商売をしようというのは不遜に当たることだった。だが、東京や横浜では新鮮に受け止められた。

「タイプライターと関連器具」「近代事務用機械」「文書の記録と整理」と題した三種のカタログが作られ、カスタマーに配布された。機器の写真が入った、洒落たツクリである。

「近代事務用機械」のカタログの冒頭には、こう書かれていた。

近代ノ業務ハ、精良ナル器械ヲ要ス。優秀ナル器械ノ使用ハ、執務者ノ労ヲ極度ニ軽減シ、一世紀前ニ於テハ殆ド夢想モ及バザリシ多種多様ノ事務ヲ敏速、正確シカモ経済的ニ処理スルヲ得セシム。若シ最高度ノ能率性ヲ要スル現代ニ於テ旧来ノ方法ヲ踏襲セバ恰モ鉄ペン、タイプライターノ行ワルル今日、驚ペンヲ以テ書字スルニ等シト謂フヲ得ベシ。

本カタログニ記載セル業務用器械ハ単ニ意匠ノ新奇ナル

外採ル所ナキモノハ一モ含マズ、必ズ実地経験ニ徴シソノ真価ノ確実ナル著名製者ノ製品及弊店ガ特ニ精選セル材料、熟練ナル技術ヲ以テ多年ノ経験ニ鑑ミ現代的業務ニ最モ適応スベク製作セラレタル優良品ナリ。

併せて同行が行った工夫は、「使用料金並ニ据付費」の一覧を作成したことだった。代理店となった直後に作成したもので、これにより企業は、ホレリス式統計会計機械装置を導入するのにいかにほどの投資が必要かを、事前に検討することができた。

それによると、IBM社の統計会計機械装置は次のような価格体系となっていた。

・統計機械（印刷機構付）

年間賃借料三千七百五十円〜五千三百円  
据付費一千四百二十円〜一千七百五十円

・統計機

（印刷機構なし、オートマチック・コントロール付）  
年間賃借料二千五百円〜二千七百五十円

据付費八百三十円〜九百二十円

・標準型統計機械

年間賃借料一千七百五十円



据付費六百五十円

・水平分類機

年間賃借料八百七十五円

据付費四百七十円

・電気式複写穿孔機

年間賃借料二百六十五円

据付費百七十五円

・電気式穿孔機

年間賃借料百六十五円

据付費百五十円

・集団穿孔機

年間賃借料六百二十五円

据付費三百四十円

この料金は一ドル＝二円八銭三十三厘で換算したものが、黒澤は一九三七年六月に「日本ワットソン統計会計機械」が設立されるまで、料金を変えなかった。機械装置の賃借料は安定収入の源だった。

だが黒澤はそれより、パンチカードや保守サービスで入ってくる安定収入に期待していたのである。特にパンチカードはアメリカから輸入に依存せざるを得なかった。ということとは、わが黒澤商店の独占なのである。

## 二

契約が一件取れば年間数千円の賃貸料が入ってくるうえ、消耗品であるパンチカードが間違いないと売れるのだから、これほど旨味のある商売はなかった。であればこそ黒澤は営業課長に据えた水品に裁量を任せることができた。

黒澤商店（ないし水品造）は、こんにちのITサービス産業の原点となるいくつかの新しい試みを行っている。

一つは見込み企業の業務を分析して機械化を提案するシステム設計サービス、一つはユーザーの日常のシステム運用をサポートするフィールドサービス、一つは受託計算サービスだった。いずれもレンタル制ゆえの「苦肉の策」だったきらいもある。

だが機械装置だけ売るのでなく、カスタマーの業務を分析して、必要な機械装置の組み合わせを提案するというのは、斬新な試みだった。結果としてハードウェアからソフト／サービス重視の足がかりとなったことは間違いないかった。

営業を統括していたのは、森村商事からの営業権譲渡と同時に黒澤商店に移籍した水品浩である。水品は見込み企業にレンタル制を理解してもらう努力を続けていたが、そ

のためには見込み企業に統計会計機械装置のメリットを提案しなければならなかった。

提案書は、最終的に機械装置のレンタル料金の設定に落ち着くが、どのような機械装置が適しているか、穿孔機は何台設置すべきかを見積もらなければならない。この作業は、現在いう「業務分析」であり、システム設計に相当する。その意味で水品は日本人初のコンサルタントであり、プロのシステム・エンジニアだった。

同時に彼は、自らフィールドエンジニアとしてメンテナンスサービ스에奔走した。「徹底したサービス」が第一の営業戦略だったといっている。パンチカード式統計会計機械装置について、その機構まで熟知していたのは水品しかなかった。

あるとき、三菱造船の長崎造船所から、  
「どうもマシンの具合が悪い」  
という報告が入った。

水品は必要なパーツを携えて列車に乗った。新幹線も航空機もなかった時代である。東海道本線で東京から大阪まで十三時間を要した。それから山陽本線、鹿児島本線、佐世保線などを乗り継ぎ、丸一日以上かけてようやく長崎造船所に着いて修理を完了した。

ところが、水品が東京に向かう列車に乗っているさなか

に、再び長崎から東京の黒澤商店に、

「まだ調子がおかしい」

という電報が届いた。

こうしたことが度々あった。

ユーザーから年間保守料を徴収している手前、時間と費用がかかるのを理由に拒否することはできなかった。だが、行ってみて初めて不具合の原因が分かるのでは、部品の手配に過分な時間を浪費してしまう。

そこで黒澤商店はIBM社のカスタマーに、日常的なトラブルを自分たちの力で解決できるようにした。いま風にいえば、メンテナンス技術を教え、必要に応じてパーツを預けるようにした。

ユーザー教育には水品が当たった。これで黒澤商店の人手不足はかなり緩和されたが、同時にそれは、国内に多くのコンピュータ・エンジニア、システム・エンジニアを育成したことを意味していた。

さらに黒澤貞次郎は、それまでバロース社の計算機で行っていた従業員の給与計算業務を、ホレリス式統計会計機械装置に移行した。森村商事から引き継いだ穿孔機や分類機、集計機などは、東京・銀座の本社ビル二階に展示してあったが、

「どうせなら、実際に動かしているところを見てもらっ

た方がいい」

と考えたのだ。

三

一九二八年（昭和三）の秋、黒澤商店に暁星中学を出た一人の若者が入社してきた。

暁星中学といえ、一八八八年（明治二十一）八月に東京・麹町区飯田町に開校を許可された私立学校で、その始めは明治初年、五人の宣教師によって築地の外国人居留地に開設された外国人学校にさかのぼる。昭和初期も同校は伝統を受け継ぎ、外国人も通う国際色豊かなハイカラな学校だった。

青年はやや面長で、大人しそうな顔つきや物腰から、育ちのよさが見て取れた。

名は北川宗助といった。

生まれは千葉県佐原だが、早くに縁戚の養子となった。

つまり「北川」は養家の姓で、実家は「小森」である。高峰譲吉の仲介で黒澤が懇意となった野田醤油社長である八代目茂木佐平治の縁者ということだったが、実をいうとその娘の子ども、つまり孫に当たった。入社時、二十歳である。

小森家の次男として生まれた宗助は五歳のとき、父・安蔵の生家である北川家の養子となり、一九二八年のたがいま、黒澤貞次郎商店に入った。母方の祖父・茂木左平治が懇意だったというだけでなく、父方の祖父が黒澤貞次郎に創業資金を提供したという縁があった。

黒澤はこの良家の子息を

「宗ちゃん」

と呼んで、バロース社の会計機やタイマーの保守業務を割り当てた。ところが「宗ちゃん」はことのほか覚えがよく、器械の操作に興味を持っていたらしかった。それを見て黒澤は、自社の管理業務をホレリス式統計会計機械装置で処理するよう命じた。

まず給与計算からスタートし、経理全般、販売集計、販売分析といった業務が追加された。この時代、個人商店の給与や売上高の計算は店主が行うのが常識だった。それを北川に任せしたのは「身内」の意識があったためであろう。

のちに北川は、自叙伝『情報産業この道六十年』上巻で「子どものころから機械いじりは好きでした。機械の修理とか管理とかいう仕事に抵抗はありませんでした」と語っている。

パンチカード型統計会計機械装置は、現在のコンピュータと違ってOSやユーティリティ・プログラムを内蔵して

いなかった。計算機構の操作や処理データのすべてを、その都度、パンチカードから読み取り、演算回路を専門家が設定しなければならなかった。

また一台の装置で複数の処理ができず、分類機や集計機など単機能の機械装置を組み合わせ、計算結果をカードにパンチして印字するというものだった。プログラムというものもなければ、オペレーションの概念もなかった。

ホレリス式統計会計機械装置の操作法やリレーの配線法などを北川に伝授したのは、森村商事から移籍していた水品浩である。黒澤商店の二階で行われていた計算機処理の風景写真を見ると、カードの穿孔を和服姿の女子事務員が行っている。女性が働くということ自体、珍しい時代だった。

北川回顧録から当時の様子を抜粋する。

販売分析、販売統計、経理業務などを機械化するため、帳票の設計やカードのレイアウト、パンチから集計に至るまで、全部私一人でやりました。そのために販売分析・統計、経理に関する資料を買って、ずいぶん勉強したものです。

(中略)

タービュレーターは配線盤が機械に固定されていて、機

械の下にもぐって配線しました。昔の電話交換機のプラグと同じようなものです。配線を変えることによって、いろいろと思い通りの帳票がアウトプットできるものだから、それは便利なものでした。外部記憶のプログラムというわけです。

この実演作業は官公庁や軍部、銀行や生損保会社などから注目を集めたいらしい。装置の導入を検討する役所や企業の担当者が連日のように訪問し、北川は実演をしながら同時に営業もした。通信省の簡易保険局は、この実演作業がきっかけでホレリス式の採用を決めた。

それと同時に、機械装置を購入できない企業から事務計算業務を受託し、あるいは導入を検討する企業向けにテストなどを有償で受注した。白木屋百貨店や陸軍省大臣官房、千代田生命保険などが頻繁に黒澤商店の計算機を見学し、また利用した。このときの経験が、のちに北川が共同センター型受託計算サービス業を創業する基礎となった。

ところがこうした彼らの努力もむなしく、いざ正式な発注となると、ユーザーが選択したのはパワーズ式だった。つまり黒澤商店は三井物産のために普及啓蒙活動をしているようなかたちになっていた。

一九三一年のこととして日本IBM社史はこう記してい

る。

昭和六年になると、三菱造船の長崎造船所が三月をもって契約の解除を申し入れ、ついで日本陶器につぐ早い時期からの一貫した利用者であった同社の神戸造船所も翌七年末をもって解約を申し入れてきた。

(中略)

かくて昭和六、七年のいわゆる昭和恐慌といわれた時期には工業会社でIBMの機械を使用しているカスタマーはほとんど存在しない状態となったのである。

三菱造船が解約を通告した直接の原因は、ワシントン、ロンドンの二度の軍縮会議による受注の減少だった。加えてアメリカ合衆国ウォール街の株価暴落が、世界経済の将来に不安を招くこととなった。いわゆる「昭和恐慌」である。

事実、一九三一、三二年度の三菱造船の決算は赤字に転落している。しかしこれは三菱造船に限ったことではなかった。

IBM社がカスタマーに課した

——パンチカードを必ず年間四万枚を購入すること。

という条項は、カスタマーが増え続けることを前提に設

定されていた。

たしかに契約件数が増え続ければ、国内で独占しているパンチカードだけで相当の利益を確保できる。ところがレントナル制であればこそ、ユーザー企業は契約を打ち切るこ

とができるのである。黒澤や水品はその落とし穴に気がつ

かなかつた。黒澤は唸った。

## 補 注

CTR社の社名変更 創業者のハーマン・ホレリスは統計会計機械装置を「タービュレーター」（タビュレータ・作表記）と呼ぶことにこだわった、といわれる。CTR社の社名変更は、PCSの位置付けが作表記から計算機に転換したことをも意味していた。トーマス・ワトソン Thomas J. Watson / 1874～1956。

ニューヨーク州フィンガー・レイクに生まれ、一八九五年にナショナル・キャッシュ・レジスター（NCR）社に入った。トップセールスマンとして役員になったが、一九一四年にチャールズ・フリン트가説得してCTR社に引き抜き、翌年ハーマン・ホレリスの後任社長に就任した。

ワトソンはCTR社の事業を統計会計機械装置に集約し、NCR社で培ったセールス・メソッドを導入するとともに技術開発部門を強化した。またレンタル制度によって事業の安定化を図った。並行して海外進出を進め、こんにちのIBM社の基礎を作った。IBMへの社名変更は一九二四年のことであって、高齢を理由にホレリスが会長職を退いたのがきっかけだった。

茂木家と小森家、北川家、千年家 茂木佐平治には千代、まつの子女があった。順序が逆になるが、次女まつのことから書く。

茂木まつは佐原の小森安蔵（旧姓「北川」）に嫁いで、鐘吉、宗助を生んだ。宗助を産んで間なしに病没し、幼い男児二人の面倒を見ていた姉の千代がそのまま安蔵の後妻となって小森家に入った。

長男・鐘吉が小森家を継ぎ、次男・宗助は父親の実家である北

川家の養子となった。ちなみに小森鐘吉のはち佐原市長となり、さらにのち一九六九年（昭和四十四）九月に設立されたコンピュータ・マーケティング・コーポレーション株式会社（CMC）という会社の会長になった。

小森安蔵の妹はヨネといった。銚子の干鰯問屋千年商店の千年豊太郎に嫁ぎ、敬助、淳治という二男を生んで一九三〇年に病没した。長男・敬助が家を継ぎ、次男・淳治は宗助が独立して北川家を離れたあと、生母ヨネの縁で同家の養子となった。

長男の千年敬助は第二次大戦後、千年商店を開けて上京し、一九六七年（昭和四十二）四月にデータ入力株式会社スタッフ・サービスを興して社長、その長男が株式会社ソラン社長の千年正樹である。弟・淳治は紆余曲折を経て北川宗助の日本ビジネスコンサルタントに入り、大阪営業所長、スタッフ・サービスの専務を経て、一九七六年四月株式会社スタッフ・サプライを設立して社長、のち株式会社ソランの会長となった。

小森安蔵の二番目の妻が茂木佐平治の長女・千代である。千代との間に生まれた五人の子どものうち長男・和夫は北川宗助を頼って日本ビジネスコンサルタントに入り、のちコンピュータブリケーションズ（CAC）に移り、一九七三年十月株式会社システムユーティリティを設立した。次男の康夫も日本ビジネスコンサルタントに入った。三つの家をあげてITサービス産業にかかわるようになるのは、北川宗助が黒澤貞次郎商店に入ったことに始まる。

外部記憶のプログラム ここにおいてすでにコンピューター用業務アプリケーション・プログラムというものの概念が提示されている。すなわちコンピューター用プログラムとは、外部から与え

られる数値を適用する方程式と、出力の形式を定めるフォーマットである。

048 二对一



第四十八

二対一

一

ホレリス式統計会計機械装置が国内でカスタマーを失ったとき、パワーズ式PCSはどうだったか。

意外なことにパワーズ式PCS、すなわち三井物産のカスタマーは減らなかった。

当時のパワーズ式PCSの主なユーザーは次のようであった。

政府機関

鉄道省（一九二四年導入）

逓信省簡易保険局（一九二六年導入）

貯金保険局

内閣統計局

保険院保険局

厚生省労働部

軍事機関

第一徴兵

海軍省水路部

公共機関

東京都

横浜税関

研究機関

厚生科学研究所

生命保険会社

第一生命

日本生命（一九二五年導入）

安田生命（一九二九年導入）

千代田生命

明治生命

東邦生命

愛国生命

日葉生命

製造業

東京芝浦電気

教育機関

神戸商業大学

外地機関

朝鮮総督府

台湾総督府

関東州庁

満州国統計処

満鉄

満州国税関

このうち鉄道省は、自動穿孔機百五十一台、手動検孔機九十五台、分類機五十一台、集計印刷製表装置四十七台、計三百四十四台を保有し、「世界最大規模」と称された。主に貨物の品種別統計に適用し、年間三千五百万枚のパンチカードを消費したという。

鉄道省は日米開戦とともに男子職員が徴兵されたため、四二年以後、その運用は女子職員によって継続された。だが一九四五年五月の空襲で機械装置およびパンチカードのほとんどが焼失してしまった。

パンチカードとは、プログラムとデータそのものだったわけだから、戦災はすべてを灰にしまったことになる。そのうちの自動穿孔機、分類機、集計印刷製表装置が一台ずつ、大阪交通博物館に残っている。

のちの記録だが、一九四四年五月の時点で国内に設置されていたのは、パワーズ式が一千三十八台、ホレリス式は五百十八台だった。ほぼ二対一の比率となる。

パワーズ式がホレリス式の倍のユーザーを維持できたのは、その販売方式にあったといわれている。

「ホレリス式がレンタル制だったのに対し、パワーズ式は売り切りだった。売り切り方式は、当時の商慣習にフィットしていた」

というのである。

たしかにその通りであろう。

実をいうと一九一八年、国勢院はパワーズ式統計機械装置を輸入しようと検討した。ところがパワーズ・アカウンティング社もまた、レンタル制を理由に国外での設置を認めなかった。

国勢院はいったんあきらめかけたが、三井物産ニューヨーク支店に駐在員として赴任したばかりの吉澤審三郎がパワーズ社を説得した。

「三井物産が機器を購入し、これを利用企業に転売するかたちではどうか」

と打診したところ、パワーズ社から

「可である」

という返事があった。

レンタルにした場合、月々の入金を管理しなければならない。まして相手は東洋の得体の知れない新興国ではないか。取りっぱぐれが生じるかもしれない。

一方、国勢院の会計項目には「賃貸料」がなかった。このために、結局は導入を断念したが、三井物産はそれがきつかけとなつて売り切り方式をパワーズ社に飲ませ、その上で東洋代理店の契約を結んだ。

ちなみに、吉澤審三郎は以後、一貫してパワーズ社の計算機とかかわりを持った。パワーズ社はタイプライターと機関銃のレミントンランド社に吸収され、そのレミントンランド社も農機具メーカーのスペリー社に買収されて「スペリーランド」と社名を変えるが、日本での窓口は一貫して吉澤だった。

月刊「マネジメント」誌（マネジメント社）の一九二九年四月号は、「ホレリス式会計機」について次のように記している。

IBMは付属品のキイ・パンチ以外の機械の本体を売らず、機械を貸与して、サービスを売ろうとするものであるが、之は何といつても不便であつて、本機が我国で使用せられない原因の一つとなっている。

この論説は、パワーズ式（三井物産）とホレリス式（黒澤商店）のビジネスモデルの違いを正確に指摘したものであった。

## 二

黒澤商店によるホレリス式統計会計機械装置の営業が伸び悩んだのは、売り方に問題があつたわけではない。直接の原因は昭和恐慌である。

一九二九年を一〇〇とする指標を見ると、日本経済の影響は次のようだった。

|        |       |          |    |
|--------|-------|----------|----|
| ・ 国民所得 | 一九三〇年 | 八一↓一九三二年 | 七七 |
| ・ 卸売物価 | 一九三〇年 | 八三↓一九三二年 | 七〇 |
| ・ 米価   | 一九三〇年 | 六三↓一九三二年 | 六三 |
| ・ 綿糸価格 | 一九三〇年 | 六六↓一九三二年 | 五六 |
| ・ 生糸価格 | 一九三〇年 | 六六↓一九三二年 | 四五 |
| ・ 輸出額  | 一九三〇年 | 六八↓一九三二年 | 五三 |
| ・ 輸入額  | 一九三〇年 | 六八↓一九三二年 | 五三 |

一九三〇年 七〇↓一九三一年 六〇

経済活動全体が縮退した。

一九三〇年の失業者は二百五十万人に及び、借金が返せなくなつて夜逃げ・浮浪する者が続出した。「大学は出たけれど」「ルンペン」「プロレタリアート」が流行語になった。藤本二三吉「緊縮小唄」、徳山璉「ルンペン時代」のレコードが売れた。

当時の日本の企業は経営基盤——さらにいえば民間資本の蓄積——が脆弱だったために、景気変動に大きく左右された。産業の中心にあった大資本の重厚長大型企業（鉄鋼、造船、重機械、電機）は国内需要と輸出の急減で計算機どころではなくなった。

レンタル制のホレリス式を採用することは、固定経費の増大を意味していた。毎月一定の賃借料で機械装置が利用できるのは、業績が右肩上がりのときは有利だが、不況になると大きな負担になる。

特に、年間四万枚の購入が義務付けられていたパンチカードのランニングコストが、ボディブローとなった。三菱造船が契約を解除したのも、パンチカードのコストが要因だった。

売上げが減り、赤字に陥つても、計算業務の経費を抑制

することができないレンタル制の弱点が裏目に出た。企業の経営者は、いつとき無理をしてパワーズ式を購入してしまつた方が、長い目で柔軟に対応できると判断したのである。

千代田生命保険相互会社の主計課員・香取繁雄との間で水品浩がやりとりした営業記録が残っている。一九二九年十月二十二日に同社の竹内太八郎が黒澤商店を訪問して以後、翌年末まで十四か月にわたる記録である。

その中に一九三〇年十一月十九日付で次のような記録がある。

賃貸借ト売却トヲ如何ニ考ヘラルルヤニ関シ意見ヲ伺フ。  
氏ハ勿論売却スルヲ希望スルトノコト

結局、千代田生命はホレリス式統計会計機械装置を断念し、パワーズ式の導入を決めた。

ホレリス式の契約が伸びなかったのは——別の見方をすると、パワーズ式が売れたのは——機械の性能や操作性にもよっていた。特に操作性と専門家のウエイトであった。

パワーズ式は計算機構の操作を行うリレー配線が固定的であったために、定型的な業務処理に適していた。レミントンランド（一九二七年一月、パワーズ社を吸収合併）が

自社の統計会計機械装置を「タービュレーター」（製表機）と呼んでいたように、どちらかというと、のちのビリングマシンや簿記用の専用機に近い位置づけだった。

これに対してホレリス式は、電動穿孔機で出遅れていた。かつ計算機構の操作はリレーの配線をその都度設定し直さなければならなかった。複数の異なる業務処理を一台の集計装置で行う場合には柔軟性があるが、使いこなすには常時、専門家がいなければならない。

当時は「システム」「アプリケーション・プログラム」という概念もなく、必要な人材や資材を外部から調達する、ないし外部に委託するという発想がなかった。ユーザーから見ると、ホレリス式は「操作が面倒な機械」だった。

### 三

『日本アイ・ビー・エム50年史』がこのあたりの事情をどのように表現しているか。それを見ると、非常に面白い。

そこには次のようにある。

初期において容易にカスタマーが得られなかった理由は、のちの歴史が証明するところであるが、要するに大正末年

の日本の企業にとって、タビュレーティング・マシンを中核としたIBMの高度なメカニズムは、あまりに進みすぎていたといつてよく……。

「のちの歴史が証明するところ」というのは、おそらく一九六〇年代以後、特に「IBM1401」「IBMシステム/360」に始まる「快進撃」を指しているのである。だが、これは結果から見た時代分析であって、歴史的考察の方法論から外れている。日本が太平洋戦争に敗北した事実をもって、江戸幕府の成立が間違っていた、と論じるのに近い。

同書に示されている認識では、

——当時の日本の企業は計算機について十分な知識がなく、統計機械による機械化の役割にも理解がなかった。だから当社のPCSは採用されなかった。

というのである。

逆にいえば、十分な知識と認識があれば、IBM社のPCSを採用したはずである、ということになるのだが、さて、これはいかがなものだろう。というのは、パワーズ式統計会計機械装置は、アメリカ合衆国においてもホレリス式の二倍に近いユーザーを獲得していたからである。それはいったい何故であったろうか。

また国内におけるホレリス式のユーザーのうち、三菱造船に関して前掲『50年史』は

賃金および間接費、そして自家製の材料部品などの工場製品の計算事務の機械化から使用を始めた。そしてこれらに習熟したのち、昭和四年五月から原価のすべてをコード化して原価計算事務全般の機械化をはかり、実用化の目標をいちおう達成した。

昭和初年における三菱造船のIBM機械による原価管理の実施は、日本における事務管理ないし経営管理の近代化、機械化の歴史のなかで先駆的、かつ画期的な事例をなすものであった。

と評している。

この理屈で行くと、アメリカ合衆国でもレミントンランド社のユーザーが倍近くいたということは、彼の地でさえIBM社のメカニズムは、あまりに進みすぎていた、ということになる。しかしそしてそれを使いこなすことができないほどに利用技術が未熟だった日本の国内に、ホレリス式統計会計機械装置を、先駆的、かつ画期的に活用した企業が存在した。

このことは、どのように理解すればいいだろうか。

それは技術の先進性云々ではなく、アメリカ合衆国においてさえ、多くの企業は買取りを選択したということではなかったか。また三菱造船がアメリカの企業以上に先駆的であったのではなく、情報処理要求のレベルがIBM社の機械装置とマッチしていたということではないか。

一九二〇年代から三〇年代にかけて、IBM社は日米欧のどの市場でも、レミントンランド社の後塵を拝していた。IBM社の統計会計機械装置がパワーズ式をキャッチアップするのは、二人の技術者が電動パンチカード装置を開発して以後のことである。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

鉄道省におけるPCSの利用 一九二四年、鉄道省経理局はパワーズ式統計会計機械装置を購入し、『マネジメント』誌が「事務能率の覇王」タビュレーティング・マシン」と題して紹介した。日本陶器にホレリス式統計会計機械装置が設置される一年前である。二五年にはやはり『マネジメント』誌が「工業会社におけるパワーズ式会計機の応用に就て」と題した記事を掲載している。

行政府会計項目における「賃貸料」 日本の行政府や地方公共団体は税金収入を基盤とする単年度会計を原則としているため、将来にわたる予算を制約する賃貸契約を処理する会計項目を用意しなかった。これが計算機ばかりでなく役所建物・施設の自前主義を生み、財政の硬直化を形成する原因となった。第二次大戦後においてもこの部分は改められず、情報システム調達の透明化を阻害する要因となっていた。

昭和恐慌 第一次世界大戦のあと、戦争被害を受けなかったアメリカ合衆国と大日本帝国は欧州、アジア向け輸出が急増した。日本は一九二〇年の戦後不況、一九二三年の関東大震災でブレイキがかかり、一九二七年の金融恐慌で大きく後退したが、アメリカ経済は内需・外需とも好調だった。内需は住宅投資と個人消費だった。これにより一九二九年のダウ平均株価は対二四年比五倍に膨らんでいた。

一九二九年十月二十四日、ニューヨーク株式市場が暴落した。二十九日にさらに大きな暴落が発生し、一週間で時価総額三百億ドルが失われた。これは当時のアメリカ合衆国の年間予算の十倍

に相当したという。当初は証券パニックだったが、生産過剰を回避するための投資抑制、雇用削減(解雇と採用縮小)が景気後退に拍車をかけた。

アメリカの経済混乱は金融危機を誘発し、それがヨーロッパに飛び火してイギリス、ドイツに金融危機と企業倒産を引き起こした。イギリスは金本位制から離脱するとともに、旧植民地を包含するイギリス連邦を形成してブロック経済にシフトした。ドイツではナチス党が台頭することになった。

日本は一九二〇年以来十年間の経済低迷に加えて、天候不安に伴う冷害で農産物が不作となった。米が不作なのに都市部の購買力が落ちて米価が下落するデフレが発生した。さらに農村部における現金の稼ぎ頭である繭(生糸)と綿花(綿)の価格が下落した。政府は朝鮮、台湾、満州を包含するブロック経済圏を志向し、これが陸軍によるアジア侵略の下地となる。

ルンペン Lumpen・ドイツ語で「襤褸」(ぼろ)のこと。ボロボロで薄汚れた服をまとってうろつく人を指す。

藤本二三吉 ふじもと・ふみきち／1897～1976。本名は「藤本婦美」。「二三吉」は源氏名で、日本橋霞町の芸者だった。『浪花小唄』『祇園小唄』『復興節』など小唄をベースにした楽曲が受けた。小唄勝太郎、赤坂小梅、神楽坂はん子など芸妓出身歌手のはしりとなった。

徳山 璉 とくやま・たまき／1903～1942。戦前から戦中に活躍した日本の声楽家(バリトン)・流行歌手・俳優。愛称は「徳さん」。(Wikimedia)

049 拡大する矛盾

第四十九

拡大する矛盾

一

北川宗助が黒澤商店に入る前、まだ暁星中学の制服を着ていたときの話である。

辛亥革命（一九一二年）以来、中国大陸は安定を欠いていた。外交と諸条約の正当な継承者は北京を首都とする中華民国だが、武漢に本拠を置く中国国民党がソ連の支援を受けて勢力を増していた。

一九二七年四月時点でいうと。北京政府の代表は顧維鈞、広東政府は王兆銘である。両陣営は「政府」「党」を名乗っていたが、実態は軍閥の集合といってよかった。伝統的な権威をまとった中央政権が消滅すると群雄割拠となるのは、前漢王朝から後漢王朝にいたる過渡期とよく似ている。

袁世凱に始まり段祺瑞まで、北京政府は統一的・組織的な運営を維持していたが、派閥（軍閥）争いが顕在化した。そこを突いて広東政府が軍事行動を起こそうとしていた。

両陣営にとって、ベルサイユ条約で日本が利権を有するこ

とになった山東半島が焦眉の的となった。

そのような状況を背景に、同年四月二十日に発足した田中儀一内閣は、山東省における邦人二万人の生命・財産の保護を優先することに方針を変更した。これを受けて六月一日、陸軍の歩兵第三十三旅団、さらに歩兵第八旅団の主力部隊が青島に上陸した。

このときは北京政府の蒋介石軍が王兆銘軍を撃退し、田中内閣は八月二十四日、山東半島からの撤兵を閣議決定した。邦人の生命財産を守る、という政府のミッションに適ったものだった。

国民政府・王兆銘軍は一九二八年四月、三度目の北伐を開始し、山東に再び戦火が及ぶ危険性が高まった。田中内閣は歩兵三個中隊、さらに第六師団を山東に上陸させた。

これが第二次山東出兵となる。

日本軍ははじめ、蒋介石軍を刺激することを避けていた。ところが五月三日、たまたま中国兵と日本軍警備兵との間に衝突が起こり、またたくうちに戦闘に拡大した。結果として日本軍は国民政府軍を駆逐し、六月に入って新たに第三師団が上陸した。

他方、田中内閣は北京政府の張作霖に対して、満州に引き揚げるよう勧告し、張も合意した。ところがこれを由としない日本の関東軍は、張作霖を始末し、一気に国民政府

軍をも下して中国を軍の支配下に置こうと企てた。

六月四日、張作霖の乗った列車が奉天に近づいたとき、鉄道に仕掛けられていた爆弾が爆発した。軍が内閣の意向を無視して暴走を始めた第一歩だった。この知らせが内閣総理大臣・田中義一のもとにもたらされたのは、一九二八年六月四日の深夜だった。

田中は、

——関東軍か……。

と直感し、翌朝、ただちに調査を開始するよう指示を出した。

調査はしばしば陸軍の妨害にあったが、翌一九二九年七月、調査団は張作霖爆殺事件が関東軍によるものであると断定した。首謀者として河本大佐という関東軍高級参謀（大佐）を特定もした。

ところが、陸軍は「統帥権」を盾にして抵抗した。

「皇軍にかかわる事項は天皇の大権に属する」

というのである。

このためにその処分は「停職」にとどまった。これが田中内閣の命取りとなった。だけでなく、明治以来の近代日本を台なしにするきっかけとなった。

大村益次郎や大山巖が目標としたのは、近代的国家——この場合、「帝国主義的」という形容詞が必要だが——に

おける近代的軍事力の整備だった。彼らは「神兵」を作ろうなどとは考えなかった。

天皇も実は同じように考えていた。

田中は宮中に呼び出され、

「処分が生ぬるいのではないか」

と叱責を受けた。

翌日、田中内閣は総辞職し、代わって組閣したのは民政党の浜口雄幸だった。浜口は第一次加藤高明内閣で蔵相、若槻内閣でも蔵相、のち内相を経験しており、政党政治の刷新、景気の回復に期待が寄せられた。この期待を受けて七月九日に発表されたのが「十大政綱」である。

十大政綱では、対華外交の刷新、軍縮の促進、財政の整理、金本位制への復帰などが掲げられていた。このうち、金本位制への復帰は、第二次世界大戦前の日本政府による経済政策に混乱をもたらしただけ以外、何ら成果をあげることができなかった。

実のところをいうと、十九世紀から二十世紀初頭まで、国際貿易はすべて金本位で行われていた。つまり、金の輸出入は民間の自由任されていた。各国の通貨価値を裏付けるのは、各国政府が保有する正貨、すなわち金の保有量だった。日本は国内産業が軌道に乗った一八九七年に金本位制に移行し、国際社会の一員となった。

ところが第一次世界大戦でヨーロッパ各国が金輸出を禁止し、一九一七年九月にアメリカも金輸出禁止に踏み切ったため、日本もこれに同調した。一九一九年末に日本政府が保有していた金は二十億円相当であつて、金本位制に復帰しても十分に耐えることができる力を保っていた。

関東大震災によつて円の対ドル相場が百円＝三十八ドルに急落した。このため、一九二〇年代に入つて政府保有の正貨は、日本銀行十億円、在外三億円の計十三億円で減少していた。

だが、商社や紡績業は金本位制への復帰を強く要望した。また三井、住友、三菱、安田といった財閥は満州などへの資本輸出を拡大する目的で、一九二八年十月、金輸出の自由化の即時断行を要求した。

二

浜口内閣で財政を担当したのは井上準之助である。

東大を卒業して日銀に入り、イギリスに留学後、一九一三年に外国為替取引を専門とする横浜正金銀行の頭取に就任し、一九九年日銀総裁を経て山本権兵衛内閣、田中義一内閣で蔵相を務めた。

いかにも財政エリートの経歴を持つ彼は、長引く不況の

原因が成金時代に膨れ上がった不良債権とインフレにあることを見抜いていた。

加えて円の国際的な価値が下がった。

一九二九年七月二日、浜口内閣の蔵相に就くと、井上はすかさず緊縮財政を打ち出した。歳入ではシーリングを強化し、国債の新規発行を三千九百二十四万円減らし、一般会計当初予算十七億七千三百五十六万円の五・六七％に相当する九千六百十五万円を削減した。彼には、軍備の縮小によつて、国債発行額の圧縮と一般会計予算の削減が達成できるであろう、という予測があつた。

事実、ロンドン海軍軍縮会議で若槻礼次郎全権は、補助艦を含む日本の海軍の装備を対英米の約七〇％とすることで合意、条約に調印した。

その前に開かれたワシントン軍縮会議でイギリスとアメリカは、日本の軍備を自国に対して六〇％に抑制するよう強く主張していたから、若槻全権が獲得した対英米七割という数字は健闘といつてよかつた。軍部は一応の納得を示し、かつ浜口内閣にとっては軍事費を圧縮できるので一石二鳥に思われた。

次に彼は金保有高の確保・維持に手を打った。金融不安が起くるのは兌換性への不信が原因であつて、通貨の価値を裏付ける十分な金が確保できれば為替も落ち着くはずだ

った。そのためには円に對する信用保証を取り付け、金の国外流出に歯止めをかけなければならない。

——國際經濟の安定を図るには日本との共同歩調が必要。と判断したアメリカ合衆國は二千五百万ドル、イギリスは五百万ポンドの信用保証枠を約束した。

第三段階はインフレを抑制することだった。

井上は金が經濟に果たす「自然の自動調整作用」を信じた。金の保有量に應じて通貨の發行は制限され、おのずからインフレにブレーキがかかる。自然の自動調整作用が充分に働かない時は、日銀が公定歩合でコントロールする。すなわち金本位制の導入である。

政府の動きから内外の投資機關は

——日本の金解禁は間近。

と見て、投資をドルから円に切りかえた。

このために為替レートは円高に転じ、百円＝四十三ドル五〇セントに回復した。これと同期して金の保有量が増加に転じ始めた。緊縮財政で一時的に不況の度は増すかもしれないが、輸出が回復すれば不況から脱することができるとアメリカ合衆國の經濟は堅調であるかに見えた。

八月二十八日、浜口は「全国民に訴う」と題したチラシを作らせ、全国一千三百万戸に配布した。そこには次のようであった。

今日のままの不景氣は底知れない不景氣であります。これに反して、緊縮、節約、金解禁によるところの不景氣は底のついた不景氣であります。前途暗々たる光明を望んでの一時の不景氣であります。我々は國民諸君とともにこの一時の苦痛をしのいで、後日の大なる發展をとげなければなりません。

經濟界はこぞつて浜口を歓迎した。

これに對して政友黨の三土忠造は言つた。

國民挙つて消費を節約すれば、他人の生産したものを買うことが減少すると同時に、自分の生産したものの売れ行きも減少する。言い換えれば經濟政策全体の縮小に終わる。浜口首相も井上蔵相も我が國の公債総額が六十億円近くに上つたことを以て、あたかも國家の存亡に關する一大事の如くに宣伝し、現内閣はこれを整理を以て重要使命とするものであると吹聴し、この六十億円を一人当たりに割つてみれば九十円の借金を負っている、誠に大変なことを告げた。

個人レベルの節約は消費の抑制につながる。だが、國を

あげて消費を節約するとはどういうことか——この批判は正論だった。

十一月二十一日、政府は「来年一月十一日から金輸出を自由化する」と発表した。経済の縮小を以て景気の回復をねらうというのである。

この日、株価は跳ね上がった。

金の解禁立て直し

来るか時節が手を取って

という「解禁節」までが流行した。

これを受けて浜口は、自信満々で衆議院を解散した。与党民政党は二百七十三議席を獲得した。対して反対を唱えた政友会は百七十四議席にとどまった。国民は金解禁を支持したのである。

三

井上が描いた景気回復のシナリオは、次のようなものだった。

①まず、緊縮財政／軍備費削減によって重工業、繊維産業の不況は一時的に深刻さを増す。

②それによって、倒産や企業合併が進み、失業者も一時的に増加する。

③しかし企業が淘汰され、資本の集約が促される。

④並行して賃金の抑制と圧縮が進み、生産原価が低減する。

⑤結果として日本製品の国際競争力が増す。

しかし彼は、重大なことを見落としていた。

それは、世界規模のマネーサプライないしマネーフローである。

金本位制を導入するのが日本だけであれば、国際的な円の信用力は向上する。また国内金融機関への信頼感も高まり、海外からの投資（もしくは円買いに伴う外貨準備）と預貯金が増し、その資金が産業界に低利で還流すれば投資に弾みがつく。

彼はアメリカの経済状況の分析を怠った——というより、楽観的であり過ぎた。その一か月前、ニューヨーク証券取引所で株価が大暴落していたのだが、彼はそれほど重大に受け取らなかった。むしろ翌年一月にロンドンで開かれる海軍軍縮会議に大きな期待を抱いていた。

金解禁が実施されると、為替レートは百円＝四十九ドル八十五セントの固定制となり、円は一四％以上切り上げら

れることになった。金解禁が近いと見てドル売り・円買いの動きを強めていた国内外の投機筋は、一転して円売り・ドル買いの利食いに走った。円を持っていれば、持っているというだけで一四%もの損を被るのである。

このため一九三〇年一月から六月までの半年で、二億三千万円相当の正貨（純金）が海外に流失した。一九三〇年の一年間だけで三億円——日銀準備高の三割——相当の正貨が海外に流出し、なおその勢いを失っていないかった。

翌一九三一年九月二十一日、金本位制の「本家」であるイギリスが日本とは反対に

——金の輸出を禁止する。と発表した。

すると今度はポンドを売ってドルを買う動きが世界的に強まった。国内の財閥はドル売りによる差益に目が眩んだ。手持ちの円をドルに換え、海外の機関投資家に売った。

九月二十一日から十一月四日までのおよそ一か月半に、横浜正金銀行は三億円四千二百万円相当の円をドルに交換した。そのときの上位四行は次のようである。

ニューヨーク・ナショナル・シティ銀行 三千七百万\$
三井銀行 二千百三十五万\$
三井物産 一千四百二十三万\$

住友銀行 一千二百三十五万\$

だけでなく、日本企業の海外拠点へのドルが送金された。

十月 一億三千五百万\$

十一月 一億四千七百万\$

十二月 二千三百万\$

結果として、ポンド、ドルに対して円が切り上げられた。一九三一年十二月の時点で一ドルは二十八円十二セント、つまり二年間で約二倍に跳ね上がった。海外の品物が半値で輸入できるということは、日本からの輸出品は倍に値上がりすることを意味してる。

輸出に依存していた産業は、たちまち経営難に陥った。ここにアメリカ経済の混乱が追い討ちをかけた。

輸出は極端に低迷し、日本の主要産業は操業率の引き下げに追い込まれた。セメント・鉄鋼は五〇%台、肥料・晒粉は四〇%台、紡績・製紙は三〇%台にまで落ち込んだ。

生糸の単価指数は、八五・三から五九・七に、米価指数は二八・九二から一八・三六に暴落した。一九二九年に百三十九億四千百万円だったGNPは、一九三〇年に百十二億四千五百万円に、三一年には百六億七千八百万円に減少

し、株価指数は一〇四・五から七一・五、三一年は五三・〇まで落ちた。

企業の倒産とリストラだけは井上が予想した以上の効果をあげた。民営工場労働人員指数は二九年は九一・一だった。それが三〇年は八二・二、三一年は七四・四と悪化した。実収賃金指数は二九年一〇三・九だった、三〇年には九八・七、三一年九〇・七に低下した。

東京駅で浜口雄幸首相が狙撃されたのは、金解禁からわずか十か月あまり後の一九三〇年十一月十四日だった。犯人は、右翼団体愛国者の構成員佐郷屋留雄であつて、その背後には「一人一殺」を合言葉にした政治テロ組織・血盟団がうごめていた。

一九三〇年）四月に鐘淵紡績は全従業員の給与を一律で四割カットすると発表し、ここに大争議が勃発した。九月には東洋モスリンが東京・亀戸工場の人員を大量に削減したこと、から大規模なストライキが発生した。十一月には富士紡績川崎工場の従業員が賃下げに反対してストライキを敢行した。

不況に強い職業であるはずの教員も、六百八十七町村で八千七百八十二人の給与が未払いとなり、都市部では仕事を失った人が全就労人口の五・三％に相当する約三十八万人、農漁村地域では欠食児童が二十万人に達する深刻な事

態となっていた。

われわれはガツガツと物を食べる人を見ると、

——欠食児童みただ。

などと言うことがある。

飢える、ということがない現在、この言葉はあくまでも冗談として使われる。だが当時の状況は悲惨だった。水を飲んで腹を満たし、木の根を煮て食するようないくことも珍しくなかった。米の一粒が手に入らなかったのだ。

本来であれば就労しているべき若年層ですら、郷里に帰っても仕事が無かった。十年越しの不況から抜け出すため、企業経営者は経費を削減するために人員整理を進めるほか、なかった。展望を失った「エログロ・ナンセンス」が流行し、まさに小津安二郎の映画『大学は出たけれど』の時代だった。

一九三一年十二月に組閣した犬養毅は、金融恐慌を「モラトリアム」という裏技で切り抜けた高橋是清を蔵相に起用し、金輸出再禁止を即刻実施して事態の収拾を図った。経済はやや回復に向かうものの、日銀の正貨準備高は三億円にまで減少していた。社会全体を覆う不透明感を打破するには力不足だった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

顧維鈞 Gù Wéijūn / り・ゐん / 1888~1985。一九二四年中華民国代総理 (国務総理代行) 兼外交総長となり中ソ協定に調印してソ連との国交を樹立、併せて帝政ロシア時代の不平等条約撤廃に合意した。二六年十月海軍出身の杜錫珪 (Dù Xīguī / と・しゃくけい / 1874~1933) が総理を辞職したあと、代総理兼外交総長に就任した。

王兆銘 Wáng Zhàomíng / おう・ちようめい / 1883~1944。「孫文直系」を自認し、一九二五年七月一日、広州国民政府の主席となった。中国国民党と中国共産党の連携 (国共合作) で北京政府と対抗、大日本帝国の勢力排除を推進した。

袁世凱 Yuán Shìkǎi / えん・せいがい / 1859~1916。

初代中華民国大總統。北洋軍閥の総帥。大清帝国第2代内閣総理大臣を務めたが、清朝崩壊後は第二代中華民国臨時大總統、初代中華民国大總統に就任。一時期中華帝国帝政として復活し、その際に使用された元号より洪憲帝と呼ばれることもある。(Wiki ipedia)

段祺瑞 Duàn Qíruì / だん・きずい / 1865~1936。北洋軍閥の頭目の一人で、袁世凱の死後の部内対立で米英の支援を受ける直隸派に対抗して、大日本帝国に接近した (安徽派と呼ばれる)。一九一九年ベルサイユ条約をめぐる判断で下野、一九二〇年五月、直隸派との武力衝突に敗れて天津の日本租界に逃げ込んだ。その後も張作霖などと連携して復権を図ったが叶わなかった。

北洋軍閥 清帝国末に起こった太平天国の反乱を鎮圧するために

李鴻章 (Lǐ Hóngzhāng / り・こうしょう / 1823~1901) が結成した「淮軍」を母体に拡大し、北京政府を樹立した。

蔣介石 Jiāng Jiěshí / しょう・かいせき / 1887~1975。中華民国 (台湾) では「蔣中正」の名で知られる。一九二六年から一九二八年まで北京政府・北洋軍閥を排除する「北伐」の指揮をとった。第三代・第五代国民政府主席、初代中華民国總統、中国国民党永久総裁。国民革命軍・中華民国国軍における最終階級は特級上將 (大元帥に相当)。

張作霖 Zhāng Zuòlín / ちよう・やくりん / 1875~1928。中国東北部の遼寧省に生まれ、長じて馬賊の首領となり辛亥革命で奉天警備を担当した。一九一一年中華民国軍中將・第二十七師長となり、一六年に奉天將軍・段芝貴 (Duàn Zhīguì / 1869~1925) を失脚させて奉天督軍兼省長に就任し奉天軍閥を形成した。

一九二〇年中央政界に進出し、反共産主義の旗色を鮮明にした。二六年北京に入って安国軍総司令、二七年陸海軍大元帥となり北京政府を支配したが、大日本帝国陸軍閥東軍との関係を調整できず、北京から奉天に向かう列車が爆破され死去した。

河本大作 こうもと・だいさく / 1883~1953。兵庫県に生まれ、一九〇三年陸軍士官学校、のち陸軍大学校卒。歩兵第三十八連隊、中支那派遣隊司令部、参謀本部、二一年北京公使館付武官補佐官などを経て二六大大佐、二八年張作霖爆殺事件の責任を取って退役。以下、本編。四九年戦犯として逮捕され、五五年太原戦犯管理所で病死した。

浜口雄幸 はまぐち・おさち / 1870~1931。高知県生まれで一八九五年東京帝国大学から大蔵省に入った。一九〇七年煙



草専売局長官を経て第三次桂太郎内閣で通信省次官、第二次大隈重信内閣で大蔵省次官に抜擢されたのを機に憲政会に入った。一五年衆院議員となり二四年加藤高明内閣で蔵相、二七年民政党総裁。三〇年十一月十四日、東京駅構内で狙撃され重傷を負い、これが原因となって首相を辞任した。狙撃事件の現場を標した石標がいまも東京駅に残されている。

**井上準之助** いのうえ・じゅんのすけ／1869～1932。大分県に生まれ東京帝国大学から日本銀行に入った。金解禁を実施したあと一九三一年に蔵相を辞任し民政党総務に就いた。

**水士忠造** みつち・ちゅうぞう／1871～1948。讃岐国大内郡出身の衆議院議員。「三王」は婿養子先の姓で、実家は「宮脇」といった。内閣書記官長、文部大臣・大蔵大臣、通信大臣、鉄道大臣、枢密顧問官、内務大臣（一時運輸大臣も兼務）を歴任した。景気が低迷しているとき大型の財政投融资を行うべきであるとする水戸の批判は、のちの経済理論からすれば正しかった。

**民営工場労働人員指数** 民間企業における工場労働者の定員に対して実際の仕事に就いている人員の比率を景況指標とする方法。第二次大戦前、工業分野の景気動向を測る手法とされた。

**血盟団** 井上日召、海軍中尉古河清志を中心に一九三二年一月に結成された右翼政治結社で、「国家革新」を合言葉に「一人一殺」による要人暗殺を実行に移した。

**井上日召** いのうえ・にっしょう／1886～1967。実名は「井上昭／いのうえ・あきら」。群馬県に生まれ、三菱造船の臨時工や代用教員をしていたが、一九一〇年満州に渡って右翼的に傾斜した。二二年帰国し水戸市郊外の護国堂で「悟りを開いた」として自ら出家し「日象」と号した（正式に出家したことはない）。

のち本名の「昭」にちなんで「象」を「召」に改め、このち血盟団を結成することになる。三二年三月に自首し、三四年無期懲役の判決を受けたが四〇年十一月に出獄、近衛文麿の屋敷の庭で暮らしていた。一九六七年に八十一歳で没するまで、右翼の大物として隠然たる力を持っていた。

**映画『大学は出たけれど』** 監督…小津安二郎、出演は高田稔、田中絹代、鈴木歌子などだった。

050 弱電メーカ一

第五十

弱電メーカー

一

前節に続いてこの節も、本書の主題である社会・経済の情報化ないし、コンピュータあるいはITサービス（ソフト／サービス）産業と直接の関係がない。そういう節が多過ぎる、という声がないでもないのだが、時代の空気や周辺の動きを知るという意味で、あえて書く。

扱うのは第二次大戦後、国策に沿ってコンピュータを国産化する電機・電子機器メーカーのことである。そのようなことに一章を費やすのはなぜであるかといえ、

「まあ知っておいて損はあるまい」

という程度のことではない。ただ、あとあとのことにかかわりがある。

そこで（せっかく一九三〇年代に入ったところなのに五十年も逆戻りするのは恐縮だが）やや端折りながら、主要な人物と出来事を記す。

一八七七（明治十）年の十一月、横浜のバヴィア商会在

アメリカ製の電話機二台を日本政府にもたらした。翌年の四月、二代目田中久重という人が「伝話機」を試作している。

からくり人形や久留米紆の自動織機を発明した「からくり儀右衛門」の養子で、二代目を襲名した人物である。のちに東京・麻布に田中製作所を興し、これが芝浦製作所となり、こんにちの東芝の前身となった。

明治政府の工部省は一八七七年の十二月、同省所管の電信寮製機科にアメリカ製の電話機を模造するよう命じた。この仕事に従事したのは吉崎牙太郎、三吉正一という二人の技術者で、二人は二代目田中久重に遅れること二か月、七八年年六月に模倣機を完成させている。

このうち、吉崎は一八八〇年（明治十三）九月、独立して「ヤルキ社」の名前で電信寮製機科の下請け仕事をするようになった。独立とはいっても芝西久保桜川町（のち港区虎ノ門一丁目）の長屋で、足積み式旋盤が二台、職人が数人の作業場と言っている。

これがのちに沖電気工業となった。同社が虎ノ門一丁目から本社を動かそうとしないうちはこのような事情に依っている。

作業場からほど近い愛宕山を歩いていたとき、骨董店の店頭で時代物の電信機が並んでいた。通信機の歴史に興味

があつた牙太郎はその場で買い求めた。それこそが慶応三年の三月、榎本武揚がアムステルダムから持ち帰った電信機で、戊辰戦争のあと行方不明になっていたものだつた。

それから十年後、三吉正一が電気学会の会長になっていた榎本にその話をした。

——おお、それはそれは。

ということになった。

三吉の取り持ちで牙太郎から榎本に電信機が寄贈されたというエピソードがある。

牙太郎を榎本につないだ三吉は一八八五（明治十八）年、白熱灯のための発電機の開発に成功した。のち、工部省が廃止されて通信省となつたのを機に独立して、東京・芝区南佐久間町（現・港区西新橋）の自宅に工場を建てた。これがのちに発展して「三吉電機工場」となり、紆余曲折を経て日本電気の母体となつた。

その後——というのは一八九五年のことだが、通信省は第八回議会に「第一次伝話拡張計画」の議案を提出した。電話網を全国に張り巡らすという。

日本における電話事業は一八九〇年、渋澤栄一、大倉喜八郎、森村市太郎らによつて始まつた。東京―横浜間での交換事業は交換局二、通話所十六、加入者三百四十四にす

ぎず、加入料五十円という高価なものだつた。

六年を経て加入料は三十五円に下がり、加入者は二千八百五十八と七倍以上に増加した。それでもなお四千九十八の積滞があり、加入権が四百円で取引きされている状態だつた。日清戦争を機に鉄道、金融、紡績といった産業が一気に拡大し、このために電話の需要が勃興したのである。

計画を立てたのは通信省の大井才太郎である。

大井は「商工業の発展を期するには思い切つた公共投資が必須である」といつて、「一般会計から、六年間で五百六十万円」という予算計画を立てた。

巡査の初任給が八円、技能職の石工や大工が一日五十銭から六十銭という時代である。どうせ大蔵省が難癖をつけて削ってくる。大井はそれを予想して申請した。

案の定、大蔵省は、「額が大きすぎる」と注文をつけてきた。

一般会計でそんな大きな予算は付けられない。

大井は「ならば」と特別会計に切り替えた。

ついでに、

「どうせなら大きいほうがよからう」

と予算額を三・五倍の二千万円に増やした。

意外にも、議会前の省議でこの案が通過してしまつた。大蔵省は慌てて減額に走つたが、

——総額は一千二百八十万円、ただし六年間を一年延長して七年で。

に落ち着いた、というエピソードがある。

ともあれ計画では、向こう七年間に総額一千二百八十万円の国家予算を投入し、加入者を三万に増やすというものだった。

この報せを受けて、アメリカの電話機市場を独占していたウエスタン・エレクトリック（WE）社は日本で電話機を製造・販売することを計画した。それ実現すべく、国内で唯一の電話機メーカーだった明工社に合弁会社の設立を打診した。明工社はすでにWE社と提携関係にあったので、交渉は容易にまると予想された。

吉崎とWE社の間を仲介していたのは、岩垂（いわたれ）邦彦という人物である。

岩垂は安政四（一八五七）年に九州の小倉に生まれた。一八八二（明治十五）年、工部大学校の電気工学を卒業して工部省に入った。次いで一八八六（明治十九）年、アメリカに渡ってトーマス・エジソンが創業したエジソン・マシンのワークス（EMW）社に見習い技師として採用された。

このEMW社が、のちに企業合併・吸収を繰り返し、ゼネラル・エレクトリック（GE）社となる。岩垂はトーマ

ス・エジソンに師事した数少ない日本人の一人である。

八八年に帰国した岩垂は最初、「大阪電燈」（関西電力の前身）という電力会社に技師長として勤め、同社第一号となる西道頓堀発電所を建設している。一八九四（明治十七）年に独立して「岩垂電機商店」を設立した。EMW社の製品を販売するかたわら、日本におけるWE社の代理店にもなっていた。

順調に進むと思われた吉崎とWE社の交渉は、吉崎が「当社の独自性が侵される」と及び腰になった。

それというのは、WE社の製品はこのとき三菱商事が総代理店となっていた。吉崎がいうことには、合弁会社に三菱商事を参加させると、主導権を三菱に奪われてしまうのではないか、というのである。

一八九八（明治三十一）年五月、交渉は白紙に戻ってしまった。

## 二

思わぬ事態の出来に岩垂は

——ほかに人物が見つからなければ、自分がやるしかあるまい。

と考えた。

しかし彼は、通信省の入札資格を持っていなかった。それではWE社の事業を日本で展開することができない。

そこで岩垂は、大阪電燈に勤めていたときに知り合った「日電商会」の前田武四郎に事業への参画を打診した。日電商会は通信省への入札資格を持っていた。

——一八九八年の六月、雨が降り続く某日。  
と記録にある。

岩垂は前田に共同事業を申し入れた。

前田武四郎は慶応三年（一八六七）、越後の生まれというから、岩垂の十歳年下である。八三年に上京して電信修技校に入り、通信省電気試験所に勤め、三井物産、日本電燈、三吉電機工場を経て九六年に「日電商会」を設立した。

ドイツのヒーリング商会と提携し、ヨーロッパ製の電気製品を主に扱い、事業は順調に拡大していた。岩垂の申し出を受ければヒーリング商会との関係を打ち切らなければならない。

前田は大いに悩んだが、技術者としてだけでなく、将来を見通す岩垂の能力に感服していたので、WE社との共同事業に賛同し、ここに資本金五万円で新会社を設立する合意が成立した。

岩垂と前田は、WE社の製品を製造する工場を東京に持

とうと考えた。前田が目をつけたのは、三吉電機工場だった。工部省に技官として勤めていた三吉正一が設立した会社で、当時としては国内最大規模の電機工場を、都内三田の旧薩摩屋敷跡に保有していた。ところがこのとき三吉は、経営難に直面していたのである。

前田から話を聞いた三吉は、三吉電機の事業を継承することを条件に、申し入れを受けると返答した。

一八九九年九月一日、新聞や雑誌に次のような告知広告が掲載された。

**今般三吉電機工場を譲り受け大に販売部を拡張し広く内外電気製品の貴需に応ず**

広告主は「東京都芝区三田四国町二番地 日本電気合資会社」、すなわちこんにちの日本電気の前身である。

一方、田中久重が設立した田中製作所は、先代と同じ久留米の出で通信省技官・川口市太郎が取り組んでいたパンチカード式計算機の試作を手伝った。その一方、東京電燈などとの取引を広げていた。森村グループの日本陶器に陶製磚子を大量に発注するなど、電気設備の需要とともに事業は順調に拡大した。

田中製作所は一九〇四年（明治三十七）に社名を「芝浦

製作所」に変更している。また三吉電機工場を岩垂邦彦と前田武四郎に売却した三吉正一は、一八九〇年に設立した白熱電球製造の「白熱社」に移って活躍した。

のち「白熱社」は一八九九年に社名を「東京電気」に変更した。この東京電気が一九三九年（昭和十四）に芝浦製作所と合併して「東京芝浦電気」となる。

吉崎牙太郎の明工社は、吉崎の姓が「沖」に変わったのに合わせて社名を「沖電気工業」に変更し、岩垂・前田の日本電気と並んで電話機、交換機、無線装置、さらにラジオ放送用機器などを中心に順調に事業を広げていった。

吉崎が「白熱社」を設立するに際して協力した藤岡市助は、電燈用配電方式をめぐる岩垂と論争したが、一方では岩垂を通じてエジソンのゼネラル・エレクトリック社と提携もしている。また通信省で電話事業の発展に努めた大井才太郎は工部大学校で岩垂と同級という関係にあった。

さらに前田武四郎は吉崎電機工場の技師長を務めたこともあった。日本の代表的な弱電メーカーがほぼ同じ時期に、人間関係が錯綜する中で形成されていったのは興味深い。

日本電気は一九〇二年（明治三十五）に扇風機を初めて輸入し「電気うちわ」の名称で売り出した。このほか、電気パン焼機（トースター）や電気オーブン、電気レンジ、電気湯沸し器、ルームクーラー、電気アイロンなど、第二

次大戦後、しばらくして普及する電化製品を早くに扱っている。

この時期の日本電気は、アメリカのWE社と岩垂・前田両名による合併会社で、なおかつアメリカ製の家庭用電気製品や通信機器の輸入販売が全売上高の八割以上を占めていた。

現在の日本電気、つまり日本を代表する電機・電子メーカーとしての「NEC」に転換するのはこのことである。そこにいたるまでに同社は

- ・昭和恐慌
- ・政府による国産品愛用運動（一九三〇年）
- ・住友合資会社の出資受け入れと経営委任（一九三二年）
- ・「住友通信工業」への社名変更（一九四三年）
- ・第二次大戦後の財閥解体

などを経なければならなかった。

ちなみに、第二次大戦後、国産コンピュータ・メーカーとして躍進する富士通は、昭和初年にはまだ影も形もない富士電機が通信機器部門を分離して専門子会社「富士通信機製造株式会社」を設立するのは一九三六（昭和十一）年である。

また、富士通と並ぶ国産コンピュータ・メーカーとなる日立製作所は、日立鉱山の系列会社という色彩が強く、戦前においては鉱山や造船、大型モーター、発電用タービンといった重電分野にとどまっていた。

三菱電機は一九二一（大正十）年に三菱造船神戸造船所の電機製作部門が分離独立して設立され、日立製作所と同様に重電分野で事業を展開していた。軍事向け大型艦船の建造から出発しただけあって、大型タービンや発動機がメインだった。

その一部で海船用無線機など電気通信機器を製造してはいたが、いわば片手間仕事に等しく、電子機器への関心は薄かった。家電製品の市場はほとんど形成されていなかったから、当時の電機メーカーは産業用モーター、艦船用タービンなど重電か、しからずんば白熱灯など弱電という二者択一的な状況にあった。

こうしたわけで日清・日露、第一次世界大戦などを経て国内の重厚長大産業が興隆していたとき、電子機器に目を向けたのは重電メーカーではなかった。彼らは大型案件を受注することで、白熱灯何万個にも相当する利益を上げることができた。

つまり電話機や無線機、あるいは電送機械装置といった新しい機械装置は、こんなにち風にいえば「ニッチ」な製品に

ほかならなかった。

となればそのマーケットに期待を抱いたのは弱電メーカーに限られるであろう。

### 三

こうした間にアメリカ合衆国では、電子技術の分野で注目すべき研究開発が行われていた。

一つは真空管だった。

グラハム・ベルが一八七六年に電話を発明してから六年後のことだったが、「発明王」エジソンは白熱灯を使っているうちに、なぜ周りのガラスが煤けてくるのか、ということを考えていた。それを防ぐ方法を考案しようとしたのである。

——フィラメントが加熱され、そこから飛び出す炭素の微粒子が付着するのには違いない。

と彼は推測した。

炭素の微粒子とは、すなわち煤のことである。

そこで彼は、「フィラメントの周りに網を置いて、微粒子を付着させればいい」と考えた。

ところがフィラメントから飛び出しているのは炭素の微粒子ではなく、電子だった。



それから二十四年経った一九〇六年、エジソンのひらめきをヒントに研究を続けていたアメリカの電気技師であるリー・ド・フォレストが、これまでにない全く新しい原理を発見した。

その原理とは次のようなものだった。

——フィラメントとプレート間に、筒状にした金属の網を置くと、金属の網にかかる電圧の変化が、フィラメントとプレート間の電流を比例的に、より大きく変化する。というのである。

これによって、微細な電気信号を増幅することができるようになった。

「三極真空管」の原理が確立された瞬間だった。

ただ、製品化されるにはしばらく時間が必要だった。

まず遠隔通信用の電話交換機に適用され、一九一五年にサンフランシスコ市で開催された万国博覧会で、アメリカ横断電話の公開実験が行われた。『電子立国・日本の自叙伝』上はこう記す。

会場に設置された電話機とニューヨークにいるグラハム・ベルとの間で最初の通話が行われた。

ベルが電話機に向かって

「ワトソン君、来てくれたまえ」

と叫んだ。

ニューヨークから四五〇〇キロ離れた会場のワトソンが叫び返した。

「今度そちらに駆けつけるのに五日かかりますよ」

こうして電話網が大陸を横断した。

ベルが助手ワトソンに「ちよつと来てくれ」と呼びかけたのは、あらかじめ用意された台詞ではなかった。このときベルは器材用の希硫酸をズボンに落としてしまった。それで思わず、いつもの調子で助手に手助けを頼んだのだ。

グラハム・ベルの助手「ワトソン君」も、トーマス・ワトソンといった。IBM社の社長と同名で、しかも同じ時期に活躍している。誤解を避けるためにあえて記録しておく、彼のミドルネームは「オーガスタス」で、モース通信社の電気技師だった。

この真空管が三十年のちにコンピュータを誕生させることになる。

もう一つはテレビジョンの開発だった。

遠隔地で起っていることをリアルタイムな映像で見たい、というのは、二十世紀初頭から世界共通の願望だった。『海底二万マイル』『月世界旅行』『八十日間世界一周』などの空想小説で知られるジュール・ベルヌは、妙齡な女性

が手鏡に映る男性の顔を見ながら話をしているカフェの風景画を残している。いまでいえば、携帯型のテレビ電話であろう。

この分野で日本は、アメリカ、ヨーロッパとほぼ互角に研究を進めている。

まず一九二四年に芝浦製作所がブラウン管を発明した。このブラウン管を使って、二年後に浜松高等工業学校教授であった高柳健次郎が国内最初のテレビ放送実験に成功した。アメリカやヨーロッパでは、孔の開いた円盤を回転させる機械式が本命視されていたが、高柳は電子式の受像回路を発明したのだった。このときブラウン管に映し出されたのはイロハの「イ」の字だった。

高柳は続いて一九二八年に、神田電機学校（のちの東京電機大学）でブラウン管式テレビ放送の公開実験を行っている。日本電気がテレビジョンの研究開発に着手したのはこの年だった。一九三五年までにドイツ、フランスで実験放送が始まり、ドイツは一九三六年のベルリン・オリンピックを中継した。

日本でも一九四〇年にオリンピックが開催される予定だったために、テレビジョンの研究開発が急ピッチで進められた。三十七年には早くも中継用自動車隊が編成され、さまざまな実験を開始している。

また三十九年三月には日本放送協会の技術研究所がテレビ放送の実験を始め、八月に東京・日本橋の三越百貨店で開かれた「興亜通信展覧会」、翌年には大阪・梅田の阪急百貨店で一般市民に初めて公開された。翌四〇年四月、日本初のテレビドラマ『夕餉前』が制作されている。

このドラマの本放送は、東京の世田谷区にあった日本放送協会の技術研究所で行われた。当時、世田谷区には高級住宅街が形成され、テレビジョン・システムを購入し得る高所得階層が少なからず住んでいたという理由もあった。

余談だが、この年の十月に放送されたドラマに子役時代の中村メイコが出演しているという。第二次大戦の後、テレビ放送が再開されたとき、顔を白と黒に塗ってテストパターンに起用された黒柳徹子が「初のテレビ女優」であったとすれば、中村メイ子はまさに「テレビの申し子」だったことになる。

## 補注

伝話機 「話を伝える」の意味だったが、のちに音声を電気信号に変えて離れた場所に送り、再び音声に戻すという意味で「電話機」が使われるようになった。

からくり儀右衛門 からくり・ぎえもん／1799～1881。

本名は田中久重。「儀右衛門」は幼名もしくは通り名。

田中久重（二代目） たなか・ひさしげ／1846～1905。

本名は金子庄八。初代久重とともに一八七三年東京の麻布に田中製作所を設立した。これが芝浦製作所となり、こんにちの東芝の前身となった。

吉崎牙太郎 よしざき・きばたろう／1848～1906。幼名は「正太郎」、長じて「秀正」と名乗ったこともある。安芸国（広島県）の農家の五男に生まれた。銀細工の技法を身につけたことから藩の武器所に入り、明治に入って工部省電信寮に採用された。二代目田中久重や政府のお抱え外国人技師ルイス・シェーフに師事して電気技術を学び、通信省勤務時代にヤルキ社を設立、次いで一八八一年「明工社」を設立した。

のちに名乗った「沖」姓については、広島県の富農・沖太郎の娘と結婚して家を継いだ（婿として沖家に入った）という説と、生家の姓に戻した（幼少期に吉崎家の養子となった）という説がある。

三吉正一 みよし・まさかず／1854～1906。周防国（山口県）に生まれ工部省電信寮に入った。一八八三年独立して「三吉電機工場」を設立、次いで九六年東京電燈から独立した藤岡市

助らの出資を得て資本金五万円で電球製造事業「東京白熱電球製造」を設立した。独立を決意したのは転勤を命じられたためだったという。京都電気鐵道の注文に応じて電気モートルを製造するなど、わが国における発動機先の駆けを成した。

工部省 一八八五年に通信省となった。

第一次伝話拡張計画 計画は途中で一年延長され八年計画となったが、投入された総予算は一千二百八十万二千円で、計画終了年の一九〇三年度末における市外回線総延長は一万一千キロメートル、加入者は三万二千五百五十五と目標を達成した。ところがこれが電話需要をさらに押し上げ、〇三年度末における積滞が二万一千件を上回る結果となった。

電話加入の積滞 一八九〇年の加入料は一件当たり五十円だったが、九五年には三十五円まで低減していた。ところが交換局や通信回線の増設が間に合わず、市場では加入権を含め四百円以上で取り引きされていた。

大井才太郎 おおい・さいたろう／1856～1924。伊勢国（三重県）に生まれ、工部大学校を出て工部省に入った。八八年から八九年にかけて欧米の電話・電信分野を視察し、帰国後、東京、横浜、大阪、神戸の電話事業を立ち上げた。第一次伝話拡張計画は大井の草案に成り、一九一三年に退官するまで一貫して電話・電信事業の拡大に努めた。

トーマス・エジソン Thomas Alva Edison／1847～1931。オハイオ州に生まれ少年時代は新聞配達で家計を助けた。一八六八年電気投票記録機、六九年株価表示機を考案して独立し、七七年電話機、蓄音機、七九年白熱電球を発明した。以後、発電機、電気照明システム、電気機関車（八〇年）、動画撮影機キネトグラ

フ (八九年)、視き眼鏡式映写機ギネトスコープ (九一年?)、アルカリ蓄電池 (九七年) など千三百件以上の発明をした。この間、八二年にエジソン・ゼネラル・エレクトリック社を設立したほか、一九一五年には科学技術を軍事に応用するための臨時海軍協議会議長に就任した。

**薩摩屋敷跡** 現在も日本電気本社ビルの敷地内、正面入り口右手に、薩摩藩屋敷の門柱が記念物として残されている。

**工部大学校** のち東京帝国大学工学部となった。

**西道頓堀発電所** 国内初の交流発電所だった。大阪市西区南堀江一丁目二十六番に石碑がある。

**ヒーリング商会** 横浜に支店があった。電気製品のほか、旋盤やボール盤など工作機械、自転車を購入販売していた。

**岩垂邦彦の能力** 大阪電燈における西道頓堀発電所の建設ばかりでなく、岩垂は電燈配電方式で交流方式を採用した。当時、エジソンは直流方式を採用していたため岩崎はエジソンと不仲になり、また東京電燈も直流方式を主張したが、前田武四郎は岩垂の考えを支持していた。のちに交流方式のほうが発電設備が安く、電力輸送中の通減が少ないことが証明され、岩垂とエジソンは関係を修復することができた。

**東京電燈** のちの東京電力。

**藤岡市助** ふじおか・いちすけ／1857～1916。周防国(山口県)に生まれ、工部大学校を出て工部省に入った。八四年アメリカで開かれた万国電気博覧会に審査員として出席後、わが国初の電燈を銀行集会所に設置した。八六年東京電燈技師長、九二年東京電気を設立し社長。一九〇六年米ゼネラル・エレクトリック社と提携してタングステンの特許権を得て白熱電球を生産した。

**グラハム・ベル** Alexander Graham Bell／1847～1962。スコットランドに生まれ二十四歳のときカナダに移住した。ボストン大学で音声伝送技術を研究し、一八七六年電話機の特許を得た。七七年ベル・テレフォン・カンパニーを設立したが、当時は郵便が一般的だったため事業はうまく行かなかった。

**フィラメント** 初期の白熱灯には京都産の孟宗竹が発光源として使用された。

**リー・ド・フォレスト** Lee de Forest／1873～1961。三極真空管「オーディオン」を発明したほか、一九〇六年には真空管ラジオを発明した。

**真空管** 白熱電球の技術を応用し、一九〇四年にイギリスのフレミングが「二極真空管」を発明している。ド・フォレストはこれを改良した。

**ジュール・ベルヌ** Jules Verne／1828～1905。地中海に浮かぶフランス領フェイド島で生まれ、一八四八年パリに出て法律を学んでいたときアレクサンドル・デュマ (Alexandre Dumas 弟)／1824～1895と知り合った。そこで劇作家を志し、一八六三年「気球に乗って五週間」を発表した。以後、『海底探検』『海底二万マイル』などで空想科学小説のジャンルを確立した。

**高柳健次郎** たかやなぎ・けんじろう／1899～1990。

静岡県浜松市に生まれ東京高等工業学校を出て浜松高等工業学校に勤務した。一九二六年走査線四十本の測定器用ブラウン管を使って世界初の電子式テレビジョン・システムを開発し、のち走査線二百本のブラウン管で画像を映し出すことに成功した。

051 キャッチアップ

第五十一

キャッチアップ

一

ここで計算機をめぐるアメリカ合衆国内の動きを書いておかなければならない。

IBM社の前身は、アメリカ連邦政府国勢調査局に勤めていた統計学者のハーマン・ホレリスが一八九六年に設立したタビュレーティング・マシン社である。ところがホレリスの会社は販売不振から資金難に陥り、チャールズ・フリントの援助を仰ぎ、一九一一年にコンピュータ・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社に吸収された。

ホレリスは引き続きCTR社の社長におさまっていたが、投資家でCTR社の実質的なオーナーだったフリントはホレリスの保守的（ないし頑迷）な経営手法に飽き足らず、一九一四年、ナショナル・キャッシュ・レジスター（NCR）社のトップセールスマンだったトーマス・ワトソンを招聘した。

このトーマス・ワトソンこそ、実質的なIBM社の創業者とされるべき人物である。

彼は一九一五年に社長兼総支配人に就任すると、停滞気味だったCTR社の営業体制を刷新した。とともに、CTR社が生産していた多種多様な機器を整理して、計算機にウエイトを移していった。一九二〇年代末まで、同社が生産していたのはタイムレコーダーや商工業用の秤、自動番号印刷機など多岐にわたっていた。

IBM社が商業用の秤を主力製品の一つとして生産していたのは意外だが、その秤はいかにも計算機メーカーらしい機能を備えていた。

こんにち、食肉店などで一般に利用される秤は、まず百グラム単位の値段を入力し、買い物客に分かるように総重量と合計額を表示する。現在はデジタル表示だが、IBM社製の秤は戦前において、アナログながらこの機能をすでに備えていた。それはそれなりに需要があったのだが、同じネジとバネでできた精密機械装置であれば計算機械装置のほうがはるかに収益が高く、かつ面白い。

同時に技術スタッフを組織的に教育したり、レンタル制度を導入するなどして海外に積極的に進出した。またカスタマーサービスと技術開発を重視した。一方、製品開発ではタビュレーター部門に重点を絞り、カードパンチ装置に

電動式機構を採用して、レミントンランド社を猛烈に追撃した。

ワトソンは自らの経営哲学を五つの言葉に集約した。

- ・ READ (よく読み)
- ・ LISTEN (よく聞き)
- ・ DISCUS (意見を交わし)
- ・ OBSERVE (観察し)
- ・ THINK (考えよ)

である。

この五つの単語がニューヨーク州エンディコットにある本社ビルの入入口階段に刻み込まれた。従業員の目に触れるところに社訓を掲示する発想は、アメリカの企業としては珍しく、まことに日本的と言っている。

エンディゴットの本社には、事務棟のほか三十二棟の工場があった。ここでタービュレーターやソーター、ベリフアイヤーといった機械が組み立てられた。

並行して毎日五百万枚から一千万枚のパンチ用カード（穿孔前のカードは「タービュレーターカード」略して「タブカード」と呼ばれた）を生産していた。タブカードこそがCTR社の安定収益源だった。

さらにワトソンは一九二四年、社名を「インターナショナル・ビジネス・マシNZ」に変更した、ということはずでに書いた。このとき、ホレリス式統計会計機械装置の技術研修を受けていた水品浩は、半年の間、毎日この言葉を目にしていた。IBM社はワトソンのもとで新しい会社を生まれ変わりつつあった。

技術開発を重視したワトソンは、二人の優れたエンジニアを見つけ出した。クレア・レイク（一八八八―一九五八）とフレッド・キャロルである。うち、クレア・レイクは「ミスター計算機」と呼ばれるほど、多くの発明をIBM社にもたらした。

二人は相互に協力し、あるいはライバルとして競いながら、パワーズ式計算機をキャッチアップすべく新しい技術と製品を次々に生み出した。

その第一の成果は、一九二八年に穿孔カードを四十五桁から八十桁に拡大したことだった。これにより一枚のカードに入る情報の量がほぼ倍に増加した。FORTRANやCOBOLなどプログラミング言語が八十桁を一単位としているのは、これに由来している。

ただ、IBM社にとっては旧来のモデルと断絶ができることを意味していたから、その変更は勇気が要ることだったろう。実際、四十五桁タイプの統計会計機械装置を使っ

ていたユーザーの多くは、新型機に切り替えることをしなかった。

さらに三一年には、アルファベットと数字を混在して印字できる「マシントタイプ40X」モデル、乗除算の結果を自動的に穿孔する「マシントタイプ60X」モデルを発表した。この40X、60Xの両モデルでIBM社はレミントンランド社をキャッチアップすることができた。

日本IBMの記録は次のように記す。

レイクはIBMで初の印刷作表器を開発し、巻き返しをはかりました。この機械はIBMを窮地から救ったといわれています。キャロルは、印刷シリンダーを持った高速カード製造機、キャロル・プレスを開発し、穿孔カード製造に革命をもたらしました。

社史というものは、どうしても自己肯定・自分中心になりがちである。なのだが、『日本IBM50年史』では、この当時の状況を素直に「巻き返し」「窮地」と表している。アメリカの経済は第一次世界大戦後のヨーロッパ復興で好況が続いていた。その波にIBMはからくも間に合った。

## 二

レイクが開発した「印刷作表器」がパンチカード・システムの名機といわれる「IBM40Xシリーズ」として結実し、キャロルが開発した「キャロル・プレス」が八十桁カードの大量生産を実現した。演算機構の改良のみが計算機を発展させるわけではないことを、この二人は証明した。

二人の成果はアメリカでなく、日本で実績と結びついた。まず日本生命保険が一九三三年、IBM社がパンチカードを八十桁に拡張したことに注目して、カードパンチ装置、ベリファイヤー、ソーター、タービュレーターなど合計二十台を黒澤商店に発注した。

日本生命保険はそれまで、国内におけるパワーズ式統計会計機械装置のビッグユーザーだった。その日本生命がパワーズ式からIBM社に乗り換える。

リプレス大型商談に、黒澤商店はにわかに活気づいた。次いで翌年、第一生命保険が「IBM405」を採用した。同社は外務員の販売能率や地域別業績、販売コスト、契約解除、診断結果など様々な統計・分析、計数管理に適用したのだった。機械化の目標に「科学的な市場分析」「合理的な販売目標の設定」が掲げられたという。現在の



「情報の戦略的利活用」に通じるものがある。

一九三四年八月には、日本生命と並ぶ保険業界の大手だった帝国生命保険（のちの朝日生命）も、パワーズ式からIBM機に移行した。

同社に設置されたのは、電動カードパンチ装置四台、手動カードパンチ装置四台、動力ベリファイヤー一台、手動ベリファイヤー一台、電動複写機一台、電動高速複写機一台、ソーター二台、タービュレーター「IBM405」二台、ギャングパンチ装置一台の計十七台だった。当時の日本にあつては最大級のIBMユーザーが誕生した。

「IBM405」は、八十桁のパンチカードを使ったほか、旧来モデルと比べ配電盤を簡素化した点に特徴があつた。記録、計算、印刷などの処理を、ワイヤを付け替えるのでなく、スイッチの切り替えで済む方式に転換した。これにより操作の難易度が大幅に低減した。

さらにギャングパンチ装置と連結することができたのも、いづれユーザーから高く評価されることになる要因だった。タービュレーターが処理した計算結果が、自動的にサマリーカードに出力されたのだ。

これによって、計算機が出した結果をタイガー計算器で再度集計し、検算する必要がなくなった。IBM405シリーズが画期的な計算機械装置だったのは、疑いを得ない。

——これでパワーズ式をキャッチアップできる。

とワトソンは期待したが、アメリカで「IBM405」の採用は一向に進まなかった。

なぜかというと、パンチカードの設計を変更したため、既存のパンチマシンやソーターが使えなくなったからだつた。現在でいえば、データとプログラムのコンパチビリティ、インターオペラビリティが確保されなかった。

それに対して、太平洋の向こう側にある新興国日本で立て続けに売れた。下地がない後進国が積極的に最新技術を受け入れるのは、今に始まった事ではない。

帝国生命は「IBM405」の採用を、同年九月の社報で誇らしげに掲載している。

穿孔式計算機械にはホレリス式とパワーズ式の二種類があり、その原理は同一であるが、前者は電気的作用、後者は針金の連結による機械的作用に基づくの相違がある。

我国に於ては後者が一般に採用されてゐるが、我社は大多數の米国諸保険全社が使用し、その顕著なる効果を実証してゐるホレリス式を採用することに決定し、而も二十数年前発明以来改良進歩が加へられたものの中、最新式の一九三三年型を選定した。

この新型は目下米国に於ても借換中のもので敎社が完備

してゐるに過ぎないから、東洋に於ては勿論、我社だけがその一式を備付けてゐる次第である。本年八月十八日据付を全部完了。その後実際統計につき種々試験したが、何等異常なき優秀なるものであることを実験した。

これに注目したIBM社の海外事業部は一九三五年（昭和十）、ベルギー出身のモリス・シュバリエを団長とする市場調査団を日本に派遣した。「モリス」はアメリカにおける通称で、正しくは（本名は）「ガイ・デイ・デ・ラ・シュバリエ」といった。

シュバリエは日本の政府機関や民間企業における統計会計機械装置の利用状況をつぶさに調査した結果、「東洋地区の営業窓口として、代理店ではなく、独自の現地法人を日本に設立すべきである」とする結論に達した。

そこでIBM社は、代理店を長く務めている黒澤商店に合併会社の設立を打診した。共同出資で日本法人を設立しようというのである。

しかし黒澤貞次郎は、本業であるタイプライターや事務用品の販売および、「印刷電送機」（テレタイプ）の開発に強い興味を持っていた。このために、IBM社の提案を辞退した。

モリス・シュバリエはここで日本法人設立の計画を見

直し、一九三六年の四月に再来日して第一銀行の常務だった洪澤敬三に新会社の設立を相談した。

洪澤敬三は、「近代日本資本主義の最高指導者」と評される洪澤栄一の直孫であつて、一九四二年に日銀副総裁、一九四四年に総裁を経て、敗戦直後の幣原喜重郎内閣で蔵相を務めた。

第二次大戦後は一九五一年に国際電信電話社長、文化放送社長、日本国際商業会議所会頭、日本航空相談役などを務めるかたわら、日本民族学協会、日本人類学協会の会長として民俗学、生物学の振興を支えた。

洪澤はシュバリエの提案を検討し、承諾する旨を返答した。併せて、実弟の智雄を新会社の社長に推薦するとともに、設立準備に必要な費用を負担することになった。

並行して、日本法人設立に関するもう一つの動きがあつた。

一九三七年の春、日本経済連盟が編成した欧米視察経済使節団に、第一生命の専務だった石坂泰三が加わっていた。石坂は五月末に米IBM社のエンディコット本社を見学した際、社長のトーマス・ワトソンと会談し、

——日本に法人を設立する計画があれば、ぜひとも協力したい。

と申し入れている。

米IBM本社と第一生命との交渉では、資本金の額や出資比率などかなり具体的な内容に踏み込んだといわれるが、このとき日本で渋澤敬三を中心に日本法人設立の事務手続きが進められていることが判明した。このため石坂ワトソン会談はまぼろしに終わった。

IBM社の日本法人「日本ワットソン統計会計機械株式会社」は資本金五十万円で設立され、横浜市に最初の本社を構えた。

株式五千株の内訳は次のようだった。

モリス・シユバリエ 四千九百三十株

渋沢智雄 十株

大沢三千三 十株

E・W・フレイザー 十株

ヘンリー・チャップマン 十株

水品 浩 十株

土居万三郎 十株

E・W・フレイザーは横浜市に在住していたアメリカ人で貿易商、ヘンリー・チャップマンはイギリス人でアメリカIBM社のスタッフだった。合計すると四千九百九十株で十株の不足が生じるのだが、その理由は明らかでない。

### 三

こうして日本にIBM社の子会社が生じた。

本社は最初、東京・丸の内に置かれたが、一九三七年十月、横浜市中区山下町八六番地乙に木造二階建て、総面積約五百平方メートルの本社オフィスが完成した。なぜ山下町だったかという点、同地に輸入品の保税蔵置場があったためである。

日本IBM社史に掲載されている当時の本社オフィスの写真を見ると、交差点角地を斜めに切って出入り口とし、その上にIBM社の社章と「THINK」の文字が穿たれている。

渋沢敬三がシユバリエの提案に承諾の返答を与えた背景には、一族の渋澤元治のアドバイスがあったであろう。

渋澤元治は一八七六年に渋澤栄一の甥として、埼玉県に生まれた。一九〇〇年東京帝国大学電気工学科を卒業しスイス連邦工科大学に留学した。日本に帰らず、そのままドイツのシーメンス社に入社した経歴を持っている。次いでアメリカに渡り、ゼネラル・エレクトリック（GE）社に勤務した。

帰国後、学歴と欧米での職歴を買われて逓信省に招かれ、

電力事業や電気技術の監督行政に従事した。一九一九年、東大工学部教授となり、モリス・シュバリエが日本法人設立の相談を洪澤敬三に持ちかけた一九三六年の時点では東大工学部長の職にあった。のち、電気学会会長に選ばれ、さらに日本人として初めて米電気学会（AIEE）名誉会長に選任された。名古屋大学の創設に尽力し学長。

その後の日本ワットソンについて、記録しておかなければならないことがある。

アメリカではホレリス式とパワーズ式の違いを問わず、パンチカード・システムによる会計処理や財務処理は、総じて「Punched Card Method of Accounting」（PCMA：会計におけるパンチカード方法論）または「Electric Accounting Machine」（EAM：電氣的会計機械）と呼ばれていた。アルファベット三文字略語が溢れかえっている現今であればともあれ、日本ワットソンでは「これではどうも具合が悪い」と考えたようだった。

英語はまだ日本人になじみがなく、セールスに行ってもユーザーが容易に理解できない。機械装置の役割を説明する前の段階で、時間がかかってしまう。

——どうしたものか……。

と頭をひねっていたとき、アメリカの研修から安藤馨が

戻ってきた。

はアメリカの大学を卒業していたが、ニューヨークの生活は不案内だった。このため三井物産ニューヨーク支店の駐在員・吉澤審三郎の世話になった。

水品が「どうだ、何かうまく呼び方はないか」と尋ねると、しばらく思索して安藤は言った。

「パンチカード・システム、というのはどうでしょう」

安藤によると、米IBM社での研修で学んだのは、統計会計機とは単なる機械装置ではない、ということだった。多種類の機械装置を組み合わせ、パンチカードで経理や在庫管理などの業務処理を短時間に行うだけでなく、企業の経営や組織を計数的に管理するシステムである、という。つまり経営管理のシステムである、というのだった。

「パンチカード・システム、略してPCS」

安藤は戦後も、電子計算機による経営管理システムを「EDPS」と命名している。計算機は計算のための機械でなく、経営のためのシステムである、という認識は、安藤において戦前から一貫している。

この考え方には、かつてフレデリック・テイラーの理論を学んだ水品も賛成だった。

安藤の案を水品がシュバリエに伝え、シュバリエも「いいネーミングだと思います」と了解した。以後、これが日

本ワットソン社内での共通語になった。ばかりでなく、日本での共通語になった。

これを共通語に仕上げたのは、三井物産の吉澤審二郎である。

彼はこのことを耳にし、その発案者がニューヨークで世話をした好青年であることを知った。

それで吉澤は一も二もなく、

「パワーズ式もPCSと呼ぶことにしよう」

と決めた。

パワーズ社の「タービュレーター」という呼称は日本人になじみがなかったし、それに比べ「PCS」は日本語の発音にして五文字なので覚えやすかった。また、「機械装置でなくシステムである」という本質を的確に表現していた。

PCSの時代がこうして始まった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

ワトソンの五か条 この五か条は長くIBM社の社是として掲げられた。日本IBM発行のユーザー向け機関誌にも「THINK」というタイトルが使われていた。

モリス・シュバリエ Guy Dele la Chevalerie: のちに第二次世界大戦が始まるとシュバリエは日本を離れ、イギリス経由で故国ベルギーに戻り、ナチス・ドイツ軍にゲリラ戦で挑むパルチザンに身を投じた。ここでも優秀な指揮官として認められ、日本がボツダム宣言を無条件受諾した一九四五年八月末、連合国軍のベルギー代表として再来日している。

石坂泰三 いしざか・たいぞう／1886～1975。東京都に生まれ東京帝国大学法科を卒業した。大学院を経て通信省に入り、一九一五年第一生命社長・矢野恒太の秘書となった。三八～四六年第一生命社長、四九年東京芝浦電気社長、五六年経団連会長に就任した。五八年アラビア石油会長、六八年大阪万国博覧会会長を務めた。

洪澤元治 しぶさわ・もとじ／1876～1975。洪沢栄一の妹・貞子と須永才三郎（のち「洪沢市郎」と改名）の長男。電機試験所、電気局を経て電気事業法や電気工作物規定の制定などに関与した。

洪澤元治は日立製作所の実質的な創業者である小平浪平と東京帝国大学の電気工学科の同級生だった。一九〇六年の七月、通信省の官吏だった洪澤が甲府行きの列車に乗り込むと座席に見覚えのある顔があった。小平浪平であった。

二人は懐かしさのあまり途中の猿橋駅で降り、駅前の旅館「大黒屋」に投宿した。このとき小平が「実は、日立鉱山社長の久原氏から誘いを受けている」ということを洪澤に打ち明けた。これに対して洪澤は、電力事業の重要性を説き「東京電灯にとどまれば、いずれ大きな仕事ができる」と意見したが、小平の決意は固かった。洪澤は「よし、そういうことなら思いきりやれ」と励ました。小平が日立鉱山に入社したのはその三か月後だった——という逸話がある。

小平浪平 おだいら・なみへい／1874～1951。東京帝国大学を出て藤田組小坂鉱山、広島水力電気、東京電燈を経て一九〇六年（明治三十九）久原鉱業所に入った。一九〇九年に久原鉱業所から日立製作所が分離独立するのに伴って移籍し、のち一九二九年から一九四七年まで社長として、こんにちの日立製作所の基礎を築いた。一九五一年四月、サンフランシスコ講和条約の発効とともに公職追放から復帰して日立製作所相談役となったが、その三か月後に病死した。

日本IT書紀 03 未剖篇

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。